
night sky's sagittarius

シクヴァル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

n i g h t s k y , s s a g i t t a r i u s

【Zコード】

N1329M

【作者名】

シクヴァル

【あらすじ】

2歳の時に親を失い孤児院暮らしを経て傭兵になった明は、口くな訓練も受けないまま大陸半分を巻き込んだ大戦に投げ出される。特異な若者のみを集めたような部隊に編入され、大国エクス・トロキアに無謀ともいえる戦いを挑むクランフォール軍の一員となつた。戦う理由の無いまま戦場に入り込み、人殺しが日常となつた中で、空っぽの自分の生きる意味を探す。―― 8／16とりあえずタイトル戻します

年表・人物

> i 8245 — 228 <

- 1909年 ヴァラキア、クロスフロントへ宣戦布告
- 1918年 東矮が鎖国を解除
- 1936年 ヴァラキア首都がクロスフロント軍制圧下に置かれる。戦争終結宣言
- 1937年 戦艦『アムルター』艦上にて降伏文書に調印、正式な終戦となる
- 1938年 残党軍が投降し、ヴァラキア軍は完全解散
- 1945年 領土返還、大陸同盟成立

1947年

アルメリアがジェット推進式航空機を実用化する

エクス・トロキアがプルトニウム爆弾を、アルメリアがウラニウム爆弾をそれぞれ開発開始（核兵器開発開始）

1949年

クロスフロンント南洋にて、クロスフロンントとアルメリア合同で核実験を行う。標的に使われた旧ヴァラキア軍旗艦『デウス・エクス・マキナ』が轟沈

1954年

エクス・トロキア、自国領内で地下核実験

1960年

ヴァラキアが世界初の有人宇宙飛行に成功

1961年

アルメリア、大陸間弾道ミサイル（ICBM）を実用化する

1963年

アルメリア、原子力空母及び原子力潜水艦を建造

エクス・トロキア人研究者が飛行戦艦構想を発表

1968年

アルメリア、クランフォールと相互防衛協定を締結（この子を攻撃したら核の雨が降るよ）

1971年

エクス・トロキアが飛行戦艦を建造開始。周辺各国へ支援を要求

1975年

アルメリア、クランフォールへ兵器供与を開始

1978年

飛行戦艦実用化に失敗、試作機乗員120名が死亡

1980年

エクス・トロキア、飛行戦艦開発を再開

1983年

エクス・トロキア、度重なる搾取により国交関係が悪化

1988年

アルメリア、小型戦術核数十発をクランフォールへ譲渡。また相互防衛協定を破棄、相互貿易協定に更新する

1990年

クランフォール、エクス・トロキアへ宣戦布告。周辺国を巻き込みつつ戦争状態へ突入

明
あら

東矮出身、飛行戦艦墜落事故で両親を失いクランフォールの孤児院に預けられる、苗字はわからない。頼る身寄りもまったく無く、金銭的都合により学校に行つていないので、一般常識以上の事を知らない。しかし苦労だけはしているため精神年齢は高い。20歳の誕生日と同時に孤児院を出て傭兵業に就いた。

体重 身長 年齢
61kg 170cm 20

裝備

- ・SG552アサルトライフル
- ・デザートイーグル50AE
- ・M67手榴弾

ユリアナ・リリ・エルク・イェルネフェルト

アルメリアの名門イェルネフェルトの次女、法学系大学に入れられそうだったが、祖母の支援の下脱走、傭兵になつた。余計な事に首を突っ込むタイプで、本人曰く『不幸を呼ぶ女』、同僚曰く『ただのトラブルメーカー』。経緯的問題によりアルメリアが嫌いであり、何かとつけて愚痴を垂れ流す。正面突破至上主義

年齢	20
身長	161cm
体重 (銃痕)	kg

装備

- S C A R - H アサルトライフル
- P 2 3 0
- M 7 2 L A W 使い捨てロケットランチャー

レオン・オーグレスト

エクス・トロキア人、父親が飛行戦艦構想の発案者であり、試作機が墜落してからはクランフォールへ移住、傭兵をやっている。高性能ライフルによる狙撃を主任務とするが、物質補給、作戦受領などの後方支援も行う。極めて柔軟な思考の兄貴肌であるが、同僚曰く『歳喰つたおっさん』。ビールとウイスキーをこよなく愛する

年齢	26
身長	176cm
体重	70kg

装備

- ・ P S G - 1 対人狙撃銃
- ・ V z 6 1 スコープオノ短機関銃

状況により F G M - 1 4 8 ジャベリン対地ミサイルを携行

マリアン・キャンベル

クランフォール人、国内の大学に通っていたが、エクス・トロキアの搾取を発端とする不況の中で母親が病死し、父親も自殺。中退後に傭兵となる。食いぶち稼ぐ為というよりはエクス・トロキアという国をこの世から無くす為に戦つており、戦闘中はすべてに対して容赦が無い。また壊滅的な味覚を持つ

年齢	19
身長	158cm
体重	45kg

装備

- ・ MG4 軽機関銃
- ・ コルトガバメント

状況によりFIM-92ステインガー対空ミサイルを携行

エレナ・ユースマリット

装甲車運転手。パラナ制圧部隊に随伴していたが、アクセル全開でぶつ飛ばす暴走っぷりに呆れたらい回ししてきた。ヴァラキア出身で、国の積極的な宇宙開発方針に影響されてか、天体望遠鏡を持ち歩いている、夢は宇宙旅行。

2年前に実家が強盗被害を受け、母親が死亡。そのショックで父親も精神を病み、生活費を稼ぐために傭兵となつた。血液恐怖症

年齢18

身長151cm

体重43kg

装備

- ・ストライカーアイコン
- ・M2重機関銃またはMk19擲弾発射機
- ・MP7

ソリッド・ツーリーズ

空軍所属の戦闘機パイロット、TACネームは『アストラエア』。
国内最大手兵器生産メーカーの息子、しかし愛国心が強すぎたため、

高校を出てから空軍に入隊、3年で1番機まで上り詰めている。戦闘機の構造、機体挙動などすべてを知り尽くしており、どんな状況においても最適な戦闘機動を取る事ができる。『型にはまりすぎてない』との評価あり

年齢22

身長174cm

体重68kg

装備

・F-15Cイーグル

ネア

morning moon

年齢

身長 165cm

体重 52kg

主装備

- UZI × 2 (短機関銃)
- Minimi (SAW)
- ベネリ M4 (散弾銃)
- バレット M82 (対物狙撃銃)

うち1種類を選択

予備装備

- Mk23 (拳銃)
- スペツナズ・ナイフ (浪漫)

アリソン・L・リトル

アルメリア出身。60年前まで国内最大勢力を誇っていた資産家の家系だが、養子縁組を繰り返して後継ぎを得ていているため実質的な血縁は無い。60年前にトップの座を明け渡してからは衰退を続け、現在は当時の私設軍を母体とする民間軍事企業が残っているのみで

ある。そんな状況下で養子縁組した後継ぎ候補の不倫から生まれ、煙たがられた後に企業の戦闘機パイロットとして就職。気が付いたら世界最強の戦闘機に乗つてクラシックフォールにいた。

なお『アリソン』はアメリカの航空機エンジンメーカー『アリソンエンジン（1995年にロールスロイスにより買収）』から取つたものであり、時雨沢恵一のライトノベルとは関係無い。でもあのミリオタも同じこと考えたんだろうな…

年齢16

身長146cm

体重41kg

装備

・F-22アラプター

攻撃ヘリパイロット。複座のアバッチロングボウを一人で操縦する。寝る時以外常に笑つてゐるような明るすぎる性格、雰囲気的には文系だが情報処理系に対し突出した能力を発揮し、タイピング速度は毎秒16発（自称）。簡単に計測したところ毎分720文字、毎秒に換算すると12文字なので、これは日本一タイピングが早いと思われる二ートの2／3である。

年齡 20

体重 48kg 身長 155cm

体重
48kg

裝備

A H - 64D アパツチロングボウ

『クロスフロント』

北半球中央近くに位置、面積第2位。地下資源と気候に恵まれ、経済が国内で自己完結している事で有名。ヴァラキアという砂漠だけの仮想敵国があるにも関わらず砂漠戦を想定していなかつたうつかりさんでも有名。一種の引きこもりじみた姿勢は外交の軽視に繋がり、まともに交易しているのは同盟国ヴァラキアとお隣りアルメリアのみ。アメリカが鎖国したらこんな事になると思われる。生産兵器はコストパフォーマンスに優れる低性能兵器と全点豪華主義の高性能兵器のハイローミックス。ヴァラキアとの戦争以降も軍備を増強し、どうからでもかかつてこいと息巻いているが、アルメリアの核の傘に守られている事をまだ知らない。

『ヴァラキア』

クロスフロントの西にある面積第3位の技術大国。土地がやせ細つており、物を売ってくれないクロスフロントへ戦争を仕掛け、敗北したものの貿易相手に引っ張り出す事には成功した。他国から素材を仕入れ、組み立ててから売り戻す技術屋である。また宇宙開発に

力を入れてあり、世界初の有人宇宙飛行に成功、衛星軌道上で宇宙ステーションを組み上げつつある。

『アルメリア』

変態改め腹黒、希少物質の豊富な火山島にあり、常識離れた技術力で有名（例：2年で核を作る）。何をするにも自ら動く事は無く、水面下で暗躍して他国を動かす。保持する大陸間弾道ミサイルはほぼすべての国を射程におさめており、アルメリア及び友好国が攻撃された場合、即座に反撃が可能である、それにより攻撃、特に核兵器の使用を抑止する。俗にこれを『核の傘』と呼ぶ。

『エクス・トロキア』

南半球の大国、面積第1位。世界最強の軍隊を持つ事によつてすべての戦争行動を抑止し、世界を平和に保つ事を目標に掲げていて、それが飛行戦艦（航空プラットフォーム。敵地爆撃、領空防衛、弾道弾迎撃などを行える）の建造に繋がり、過度の支援要求として顕在化した。周辺5カ国から宣戦布告を受け、他2カ国と防衛戦を開始するが、包囲された構図、異常に高い敵の士気、“なぜかそこにはつたアルメリア製兵器”により苦戦を強いられている。

『クランフォール』

エクス・トロキア北西に位置。経済基盤が脆く、飛行戦艦開発開始から右肩下がりが続き、貧困、失業率悪化などを招いている。アルメリアからの支援により経済崩壊を防いでいる他、軍部が独裁政治を敷く事で国家としての体裁を保つている。長らく受けていた兵器供与で戦力が整つた事と、アルメリア製小型戦術核を入手しエクス・トロキアとの核抑止論が成立した事で、1990年に宣戦布告、侵

攻開始している。

幸福か不幸かで言えば、不幸な部類に入るんじゃないかなと思つ。

2歳の時に両親が死んだ。いや、死んだらしい。当時の事はよく覚えていない、記憶していたのは”明”という名前だけで、物心ついた時には孤児院兼教会にいた。

頼るべき身寄りも無く学校に行けなかつた、成人に近付いてくると教会に頼り切りなのも申し訳なくなり、20歳の誕生日に傭兵業に就いた訳で、今は初陣の真つ最中だつたように思つ。

概要を確認してみよう。

目標はエクストロキア北方の都市パラナの制圧で、クランフォール正規軍1個連隊を含めた大部隊だつたはずだ。

自分と味方数名はジャングル地帯を突破して別方向から奇襲をかける割り当てで、武装はSG552アサルトライフル、デザートトイーグル50AE自動拳銃、M67手榴弾2個。ジャングルを抜けるまで会敵する可能性は低いと言われている。入つて5分で嫌気がさすような密林だつたからすぐに納得した。

そのまま30分くらい歩いて、そう、確かクレイモア地雷に引っ掛けた。

射程50メートルの小粒鉄球700個を前方60度にぶちまける地上設置型地雷だ、それが起爆して右脇腹に激痛が走つた所までは覚えている。

感触からして、地面に倒れているらしい。あと発砲音が聞こえる、かなり近い、というか、近すぎる。

「…………

ゆっくり田を開けてみる。

まず田に入つたのは飛び散る空薬莢と、足。

場所はジャングルで、やはり倒れていた。発砲音の正体は目の前で行われている銃撃戦。

視線を上に向けてみるといったのは人間の女性で、色の薄い茶髪、こつちに背を向けてアサルトライフルを連射している。

「おいまう持たないぞ！…早く回収しろ！…」

「わかつてん！…いいから援護！…」

別方向からパパパパ！という軽い銃声とガガガガガ！という重い銃声が加わった。それを確認してから女性がこっちを向いてしゃがみ込む。

「立てる？ 200メートルくらい後退するわよ」

10代後半か20代前半という所だらうか、自分と同じ年くらいに見える。比較的長めな髪に、緑と茶色のウッドランド迷彩

「あ……ああ……」

差し出された手を掴み一気に立ち上がる。途中で腹に激痛が走ったが、引っ張られたため動作は止まらず。

「走つて！…」

女性は再度反転して連射を再開、どうしても鈍速になるごつごつペースを合わせ、ゆっくり後退していく。

流し目で後ろを見るとフロイスペイントまでした真緑の敵兵らしき人間が5、6人、3方向からの銃撃で足止めを喰らっていた。

「ストップー！」

「「つおーー?」

いきなり肩を掴まれて急停止、脇腹が痛い。

下方向に押し込まれてしゃがむと、岩の影に隠れる形となつた。

「傷口見せて、応急処置する」

とは言われたものの、有無を言わせず服をめくられ腹を露出。そしてピンセツトを取り出す。

「え……それで何する気だ……？」

「何つて、弾の摘出」

「は……ちょっと待てそんな麻酔も無しこ……」

「大の男がつべこべ言つなーー!」

腹にそれが突つ込まれた。

「い……ー!」

時間にして約2秒、そこらの衛生兵に見せたら拍手ものの手際だつたろう、しかし痛いものは痛い。

「うん取れた、もう大丈夫よ」

全力で痛みに耐えている所にガーゼが当てられ、テープでぐるぐる巻きにされる。

「オッケー！」

しばらく悶絶していたら痛みが引き、以降何ともなくなつた。素晴らしい腕である。

余裕ができたので周りを見回してみる、ピンセツトをしまつた女性はアサルトライフルの弾倉を交換して三度発砲し始め、それを合図に短機関銃を握った男性がこっちに向かつて走り出し、左から軽機関銃装備の女性が乱射しながら近寄ってきた。

「1名排除」

追つてきた敵1人に弾丸が命中してつんのめり、そこに追撃が入つて動かなくなつた。

「ツ……」

生まれて初めて死体というものを見る。

嫌悪感は無い、自分もあれを作るためにここまで来たのだ。しかし怖いものは怖かった。

「撤退命令だ、本隊が壊走したらしい

「でしようね、この様子じゃ」

アサルト装備の女性が腰に固定していた筒を一本外す。M72ロケット

ツトランチャー、LAWと呼ばれる使い捨て装備である。

「聞いてた? 出発地点まで戻るわよ。合図したら走って、できれば撃ちながら

「お…ああ

SG552をストックを使わず構える。アサルトライフルだが、サブマシンガンとしての使用も可能だ。

それを確認してから軽機関銃が射撃を停止し、数秒、隠れていた敵兵が顔を出した。

「ゴーーー!」

足元を狙つてロケット弾が発射された。

着弾まで見ずに反転して疾走。ランチャーを捨てる音と、ボゴン! といつ爆発音を背中で聞きながらジャングルをひた走る。

「3名生存、来るぞ!」

軽機関銃が撃ち始め、敵も撃つてきたらしく近くの木に穴が開いた。片手でSG552を構え後ろを向くと、アサルトライフルの女性がLAW2発目を準備していた。早く撃つて軽量化したいよつだ。

「足止めするーー!」

銃弾が足元に集中し始めた。

それに習つてセミオート射撃すると、1発命中して隙が生まれ。

「発射！！」

頬を爆風が撫でた。

「うへ……」

2人爆発で吹っ飛んで倒れる。残り一人も体勢を崩して立ち止まり、銃弾で穴だらけにされていく。

「！」のまま突破するわよ、大丈夫？』

「む……大丈夫だ、もう痛くない」

「そり、良かつた」

走りながら微笑まれた。

「……」

何だこの胸の高鳴りは。

傭兵が必要な世界になってしまった理由は複数あるが、最たるはエクストロキアの焦りだろう

世界一の陸地面積を誇る国にとって、防衛能力の強化は必然的なものであり、特に大陸弾道弾から領土を防衛できるシステムは必要不可欠だった

通常の核防衛策は、自らも核を持つ事によって互いに睨み合いを続ける事である。撃つた直後に反撃が来るから撃つ事ができないという、いわゆる核抑止論

しかし、大気圏脱出口ケットの開発に失敗したエクストロキアにと

つて、他国からの大陸弾道弾を抑止する術は無かつた

今現在で大陸間弾道ミサイル、いわゆるICBMを持つているのは、北半球のアルメリア、クロスフロント。保有はしていないが、ヴァラキアもやううと思えばすぐ作れるだろう

これから身を守る為に開発されたのが弾道弾迎撃兵器と、それの発射台となる航空プラスチックフォームだった

高速で迎撃位置に移動可能で、陸地に影響の生まれない段階で弾頭を破壊する事ができ、場合によつては通常戦闘も行う

それを開発しようとした結果、費用は軍事費で賄えるレベルを遥かに超え、支援という形で周辺国の首を締める事になった

だが一度目は失敗、離陸直後にエンジンから火が上がり、乗員120人を道連れに墜落している

120の中には明の両親も入っていた、と聞かされているが

そして現在、2機目が完成間際であり、仕掛けるなら完成前と思つたのだろう、周辺5ヶ国が宣戦布告に踏み切つた

結果として生まれたのがこの状況

「また物資……、まさか明日も攻撃かける気じやないでしょうね」

ぶら下げていた木箱を降ろして帰つていったヘリを見て呟く

入れ代わりでC-1輸送機が着陸し、今度は人間を降ろし始めるベースキャンプまで帰還してからまだ30分。正規軍は戦力補充に励んでおり、今すぐ再侵攻します、とか言われてもおかしくない

せめて少しくらいは作戦を練り直して欲しい所だが

「よし、これで派手に動いても大丈夫なはず。痛い？」

「いや。悪いなわざわざ」

包帯の張りを確認してからシャツを着直す。迷彩服は穴が開いてしまったため、新品を調達しなければ。あの補給品の中に入つていればいいが

「いいわよ別に、これくらいならこくらでも」

救急箱をしまう女性を見る

年齢は同じくらいだろう、薄い茶色の髪が肩まで延びていて、目は青色、さつきまで着ていた迷彩服は脱いでシャツになつている

「ユリアナ・リリ・エルク・イェルネフェルト。ユリでいいから

「む…ああ。明だ、よろしく」
あきら
あきら

荷下ろしを終えた輸送機は急ピッチで点検を終え、再度離陸していった。あれではパイロットが可哀相だ

人材がどれだけ貴重かはわかっているだらう、それでも急ぐという事は、やはり明日か

「明くんね、極東の人？」

「恐らく」

「？」

「2歳で親が死んで、なんか事情が複雑らしい、名前以外わからな
いんだ」

「あ……そう。ごめんなさい」

「大丈夫だ」

また輸送機が飛んできた。今度は大型のC-17で、中身は戦車と装甲車が1両ずつ

「エイブラムス、ブレイブドレー…。あんな国頼つて屈辱感は無いのかしら……」

「何が？」

「ああいえ、こっちの話」

最後に偉そうな将校が降りてきて、C-17が離陸。兵士数人が駆け寄った

「20時間後に再攻撃だとよ

そこまで見て、後ろから男

くすんだ金髪で長身、体格もいいがゴツゴツしている訳でもなく、一言で表すなら『青年』

「……何、期待通りなの？バカなの？死ぬの？」

「まあ下手したら死ぬな」

ペラリと作戦指令書を見せてくる

こんな紙つぺらで地獄に行かされるとは

「レオンだ。傭兵の生き残りは俺ら4人だけらしいから、傭兵だけで1班構成のことだ」

4人だけ、と

今日の朝には1小隊30人ほどいたから

約26人死んだのか

「で、あそこで弾薬漁つてるのがマリアン」

指差された方向を見ると、MG4軽機関銃を背負つた、青色混じりの黒髪ポーテールが、アーモ缶数個を抱えていた

軽機関銃といつても重量は8kgあり、発射速度は毎分885発。それに見合う弾数を持つとなると、女性一人では厳しいものがあるんじゃないかな

「兵種はこいつが普通、あれが分隊支援、俺は狙撃兵な。まあジャングル戦だとライフル背負ってサブマシンガン芸な訳だが」

よろしくな、と、手を差し出してきた

ので、がっしりと握んでみる

そして笑顔

「……暑苦しい…」

「ん…? そこまで温度高くなくないか?」

「いやそうこいつ意味じゃなくて……もついいわ」

ユリアナが立ち上がり、弾薬漁りに参加し出した

20時間後に出撃となると、こまから準備して飯食って睡眠取らなければならぬ

明も服を調達しないと生死に関わる

「こんな時代だ、頑張つて生き残るつざ、相棒」

「…相棒はさすがに勘弁してください」

「そ……そつか……」

ショックを受けた

「ちょっとー！」AWが無いーーー！」

「あーそつちじやねえよーーー！」

レオンも離れていく

火薬漁つてわいわいやつているのを見、溜息をひとつ

「なんだかなあ……」

何が何なのか、自問自答したくなつた

「ジャングル突破は中止になった。クラスター爆弾をぶちまけるそ
うだ」

「何それ、正規軍は環境破壊とか考えてない訳?」

「考へてない事もなきそつだが、”仕方ない”の一言で片付けたよ

時計の針が7つほど進み、午後6時の夕食時。もともと親しい相手もいなかつたし、何より傭兵部隊は全滅したので、例の3人と同じテーブルについている

どうやら長身青年な熱血漢（？）レオンが情報伝達を含む後方支援も受け持つているらしい。日中ずっと指揮所に詰めていた

「…………」

話し合っている2人から視線を外し、正面の人物を見る

マリアン・キャンベル。黒系の髪を見て同じ人種かと思ったが、完全なクランフォール出身とのこと。眼光が鋭く、正面から見据えられるのは避けたい

そのマリアンが口へ運んでいるのは明と同様の支給品の集団レーション。50人分の食事をひとまとめにしたもので、ポケットサンドイッチ、パウンドケーキ、ターキースライスなど数種類の料理が巨大なトレーや缶詰に詰められている。正直に言つとあまり美味くはない

しかし戦場ではよくある事であり、それだけなら何でもないのだが

食事開始直後、マリアンがおもむろに取り出したのはモラセスという調味料。サトウキビから砂糖を取った後に残る廃液で、とにかく

甘い

その甘いシロップを料理すべてにかけ、さも美味しそうに食べているのである。ミックスベジタブルがモラセス漬けになつた時は思わず田を逸らしたが、難無く完食

甘党なんだろ？

「……？」

やつして見ていろと、視線に気付かれた

「…やらんや」

「いやいやない」

思わず即答

悪いが甘つたる「ターキーキーチーを食べる気にはならなかつた

その即答つぱりにマリアンは少し訝しげな顔をし

「……やらんや」

「だからいやないって」

念のためもう一度確認、その後食事に戻つた

案外そこまで恐くないかもしない

「明日は装甲車を使つ」

レオンの親指が遠くの車両群を指差す。最終的に送られてきた増援は1個大隊500人と戦車4両、装甲車8両、その他自走砲やら輸送トラックやらが陸路からやってきて、ヘリも数機停まっていた

「完全に戦力を分散しての挾撃になる、俺達の分担は南だ。だからぐるっと回つて進軍することになるが、徒步つてのもきついし、正規軍とトラック同乗もトラブリそうであれだからな」

「運転は誰が?」

「追加で傭兵が来る。ああそうそ、戦時中の臨時編成として班から分隊に格上げされた。運転手と俺達で5人な」

「ふうん、どんな奴?」

「まだ来るまでわからんよ」

たぶん使えない人材を押し付けてくるだろうがな、と付け足し、レオンが立ち上がる

「先に休むぞ、こちとら午前3時から仕事入ってるんだ

言つて、離れていった

「……忙しそうだな」

「ああうん… なんて言つたか、司令官に気に入られてるのよね。」
「ちの待遇良くなるから別にいいけど」

カラーン、と、プラスチックフォークをトレーに落とす

周囲を見れば兵士数人がトランプに興じており、その奥ではタバコの煙。各自リラックスタイムのようだ

作戦開始は午前7時だが、寝るにはまだ早い

「武装の紹介をしておきましょひ、こきなりじや陣形がどう動くか
わからないでしょじ」

思い付いた暇潰しがそれだつたらしい、自己紹介ではなく武装紹介
といつあたり戦場らしいというか鉄臭い

「私は主武装にS C A R - H、護身用のP 2 3 0と、使い捨てのロ
ケットランチャー2本。回りくどい事苦手だから、基本的に正面火
力担当ね。ロケットランチャーついていつても2発だし威力もそこま
で無いから車両相手には逃げる」

それでヨリアナの紹介は終わつたらしく、どうぞとマリアンヘジエ
スチャーを送る

「……MG4軽機関銃とM1911拳銃、徹甲弾を使用すれば兵員
輸送車程度は破壊可能だ。状況によりFIM-92対空ミサイルも
携行するが、重いからあまり持ちたくない。弾幕担当だ、それ以外
の事を求めるな」

終わりらしい、静かになった

じゃあ次は自分の番かと明は思つゝ、といつても今日が初陣だったの
で、担当もクソも無いが

「えー、SG552アサルトライフル、ストックをたためばサブマ
シンガンとしても使用可能です、自立記念にプレゼントされました。
それと中古のデザートイーグル50AE、弾薬供給ルートが無いと
聞いて困っています。手榴弾2個は正規軍から貰いました」

「誰が入手法を教えると…」

「新兵にいきなり聞かれても」

一応訓練は受けた、しかし所詮は訓練だ

実戦経験となるとクレイモア喰らったのみ

「特訓が必要ね…」

「え？」

「ついて来なさい」

「えー……」

寝て起きて外に出たら、ストライカー兵員輸送車が用意されていた
要員2名、完全装備の兵士9人を運ぶことが可能であり、12・7
mm機銃1挺を装備する。105mm砲装備の戦闘型も存在するが、
目の前にあるのは通常型

最大速度100km/h、500kmを走破できる最新鋭8輪装甲
車だ

「……」

「……」

それはいい、傭兵に割り当てられる兵器にしては高性能すぎる気もするが、きっとレオンが頑張つてくれたんだろ？

問題は運転手だ、身長一五〇cm付近の少女がタイヤの空気圧をチェックしていた

栗色の髪が膝下まで伸びている、長い、身長と不釣り合いで。どうか、服装、装備、車両すべてが似合っていない

あえて例えるならば、特殊プレイ中の援交学生

「Hレナと言います」

「お…ああ、明だ」

普通に敬礼してきた

「攻略本隊からこちらに回されてきました、本日付けで第666分隊配属となります。それで突然ですが、サイドウォール部に多数のクラックが入つてしまい交換したいのですが、予備タイヤはどこで保管していますか？」

「え……」めん、わからないからあそこの人間に聞いてくれ

少し遠くで偉そうな制服男と話しているレオンを指差す。忙しそうだが、タイヤ置き場くらいなら教えてくれると思う

「了解です、失礼します」

再度敬礼、それから指差した方向へ駆けていった

ちゃんとレオンの所まで辿り着けたのを確認してからしゃがみ込み、ストライカーのタイヤを凝視する

しばしじつと観察していたら左側4列目のタイヤに無数の亀裂が走つているのを発見した。なるほど、サイドウォールとはそのまま”横壁”という意味で、この亀裂の事をクラックと呼ぶんだろう

「何やつてるの？」

「いや別」

コリアナが来たので立ち上がる。昨日と同じくSCAR-Hを肩から提げ、腰にLAW2本。その後ろではマリアンがMG4を担いで立っていた

「なかなかいい車貰つてきたじやない、運転手は？」

「運転手は……あれ

栗色のロングヘアを捲して指差す。ヒレナと名乗った少女は物資集積所からタイヤを掘り出そうとしていた

「…どれ？」

「あのタイヤ持つて一息ついてる奴」

「……どれ？」

「あのすごい勢いでタイヤ転がしてる奴」

例によつてタイヤも似合わなかつたが、手慣れている。人にもぶつからず進路を制御してこちらへ疾走中。ちよこまかしている姿は小動物のようだ

「え……あれ？」

「たぶんそれ

運転手を発見してしまつたユリアナは名状しがたき物を見たような顔をしている、残念なことにそれが正しい反応である

そういうしている間にエレナがストライカーまで到達、スパナで左側4列目を外し始めた

「うわマジだ……」

僅か30秒足らずでナットを外し終え、古いタイヤが脱落。次いで新品を装着

「う……」

できなかつた

悪路も難無く走破する軍用タイヤはでかくて重く、女性の細腕で持ち上げるのは無理があつたらしい。手をこじまねいでいる手伝った方がいいかもしれない

「ほり、貸してみ」

「あ…すみません……」

位置を変わつてタイヤを持つ

素晴らしい重い、男の明でも上がるかどうか

「ふん…！」

目一杯力を入れると5センチ浮き上がり、力尽きた前にHレナが軸へ誘導して差し込む。動かなくなつた

「ありがとうございました、普段は機材を使つんですが

「ああ…だよねえ…」

一瞬持ち上げただけなのに手の感覚が無い

ナットを戻して締め直し交換完了。古にタイヤは捨てず、なぜか口一提升了して締め直し交換完了。古にタイヤは捨てず、なぜか口一提升了して締め直し交換完了。

「もひとつ仕事お願いできますか？」

「え？」

「予備タイヤとして積載したいのでこれを上まで

「……」

「何をそんなに疲れてるんだよ

「ちょっとタイヤが……」

「気付けば出撃10分前、ストライカーはエンジン始動してアイドリング中。後は乗るだけである

「偵察結果は?」

「敵主力は本隊方向に陣形敷いてる、そのまま近付かせてくれるといいがな」

「じゃあ動かれる前行つちやこましょ」「う

「まああと一〇分待て、遠足とま違つんだからよ」

融通の効かない…、と言しながらコリアナが乗り込む。さつきからガガガガとステインガーミサイルを積んでいたマリアンも内部に消え、残るは明ヒレホン

「……何かおかしいと思つたんだ」

「何が？」

「乗ればわかるだ」

言つて、車体を上つていく

「？」

よくわからなかつたが予測しよつもなく、とにかく乗り込もうとしたオンの後を追う。車内はやたら広く、寝泊まりしても大丈夫そうだ

「正規軍部隊に合流します」

「おー、おつづー？」

ぐいん!と急加速した

一気に40km/hほど出ただろうか、そのまま、8輪車で、ドリフトを決め、トラックの群れへ突っ込んでいく

「あやっーーー！」

遠心力で体が吹っ飛んだ

壁に激突するかと思い身を縮めたが、体に激痛が走る事は無く

ぶつかったのはレオンの体

「おっと、大丈夫かい？」

「あやああああーーー！」

「何だその絶叫は

ストライカーは暴走していく

戦況報告

開戦後72時間以内の電撃戦で占領した地域は89%を保持、第2撃での侵攻作戦もパラナを除き成功している。次作戦では防衛戦力の乏しい地域を重点的に占領し、各拠点を孤立化させるよう行動する。戦況は優勢はあるものの、依然として戦力比は1対3であり、各国との連携が重要視される

トロント動向

隣国トロントは我軍と同時に宣戦布告したものの、ヒクストロキアとの国境は山脈が大部分を占めており、陸上支援は期待できそうに無い。しかし航空機による爆撃と物資補給を約束しているため、南部の航空戦力は最低限に抑え、北部に集結させるべきである

パラナでの敗北について

事前の航空偵察及び衛星写真では攻略部隊の60%程度と思われていたが、侵攻時には倍程度まで増強されていた。これは周囲の密林地帯に潜伏していたほか、地下に大規模施設が存在すると考えられる。この地域のみに伏兵が現れた理由は不明であり、早急な占領、及び調査が必要と推測される

傭兵の雇用について

現在我軍は約500名の外人を含む傭兵を雇用しており、ある程度の独立性を持たせた上で我軍に随伴させている。これはクロスフロンティにおける傭兵部隊の活用を参考としたためである。傭兵は機動性が高く、撃乱戦術を取るには最適で、主に別動隊として活用される。しかし我軍とのトラブル発生数は増え続けているため、更なる独立性の強化が求められる

アルメリ

「……氣分悪くなつてきた…」

「「」の口^トホ車両内で読むもんじゅねえよ、おつヒー。」

機甲部隊を含むパラナ攻略別動隊は時速50キロ内外で東進を続けている。偵察車を前方に据え、その後ろに戦車、歩兵戦闘車、自走砲、対空車両と続き、やや離れてトラック群

第666分隊ストライカー装甲車は更に後ろで孤立していた。まあ、衝突の危険があつたので意図的に離れたのだが

エレナの運転はすごい、急加速と急減速しかないのだ。等速直線運動中はある程度の安定性が出るが、障害物に突き当たった瞬間にぐいっとブレーキ踏んでぐいんと曲がる。その度にユリアナが悲鳴を上げていた

「これが高性能車両の代償だよ」

「え？」

「これやるからいつで我慢してくれ、って事だ」

我慢できやうにないのが1人いるが

「もうこいつを殺せー……」

「ほら頑張れ、あと30分くらいいだ

「無理……」

エチケット袋片手に青い顔で寝転がるコリアナである。頭はマリアンの膝に乗っていた

「一応だが、敵情報を確認するぞ」「やあ

「1個旅団つてこれに書いてあるけど……」

「それが全部攻略本隊の方向いてる訳じゃ無いんだ。半分以上は市街地内に立て籠もつてて、周囲にパトロールが出てる。痛つ……見つからずにパラナ入りは無理だろ?」

「IJの規模つて1日で制圧できるもんなのか?」

「常識的に考えて無理だ、立て籠もつた敵はしつこいぞ。逃げてくれればいいが、最悪どくにかして基地に押し込んでからそれに書いてある通り他部隊に補給路を断つて貰つて、干上がるまで攻城戦になるな」

「うへ……あだつ……」

「少し前に大規模地下施設を作った記録があつてだな、何に使うかは不明だがとにかく広い、下手したらもつと隠れてる可能性もある。下手なおおおー?……下手な攻勢は危険なんだよ」

「つまりまた負ける可能性も……」

ガツゴオオン！！

「「いつでええええええええええ！」！」

一際大きく跳ね上がったストライカーは着地後にエンジンをフル回転させ、最大速度まで持つて行く

「何だ何だ何だ！？」

「敵航空機接近！！爆撃されます！！」

天蓋を開けて首を外に出すと、ジェット機2機が攻撃を終えて旋回している所だった

「フロッグフット2機！！狙われています！！前方で地上戦開始！！」

敵機来襲とほぼ同時、恐らく狙つたのだろう、エクストロキアのT-72とM1エイブラムスが砲撃戦を始め、自走砲は長砲身を天に掲げる

部隊はパラナ侵攻を中断しドンパチ始めてしまった

「どけ！」

後ろから言われて首を引っ込め、入れ代わりでマリアンがステインガー担いで外に出る

FIM-92 地対空ミサイル、毒針の異名を持つ。ロックオン装置を含む本体に砲身兼用のミサイルコンテナを装着し、発射機にバッテリー・ユニットをねじ込めば準備完了となる。電力供給が1分もないのがネックだが、命中率世界一としてギネス登録されている

「迎撃するなら早く！！次狙われたら避けませんーー！」

「わかつているーー！」

外を見るため運転席横へ、エレナが小さい体でアクセルを踏んでハンドルぶん回していた。似合わない

前方に距離が詰まりつつある戦闘車両隊、25mmガトリングを爆撃機に向け乱射しているが、対空車両は1台のみ、勝てるかどうかはかなり怪しい

「あー、じゅりゅりゅ、航空隊を少し回してくれ、待ち伏せされた」

ステインガー・ミサイルが発射されて白煙が舞う。ロックはしつかりされていたが、上に逃げられたら射程が足りない

「次ーー！」

「あ…おひーー！」

通信中のレオンの脇を通りミサイルコンテナとバッテリーを掴みマリアンへ手渡す

先程のステインガーは避けられ、しかし味方のガトリングが1機を

撃墜した

「ハインドー機接近……」

ヘリコプター1機追加

「機関銃撃つた事あるか！？」

「ある訳ねえよ！！」

「なら初体験だ……やつちまえ……マリアンはあっちに移動……！」

2射目を終えたマリアンが首を引っ込め、別の天蓋へ移動、M2重機関銃が使用可能になる

「あんま期待するなよ！？」

首を出す、田の前にヘリが1機

「気をつけろ……下手したら顔なくなるぞ……」

「あんた自分でやりたくないだけだろ……！」

エイブラムスとT-72の撃ち合にはエイブラムスの圧勝で終わり
そうだ

こちら数度の改修を受けたM1A1HA型で、戦後第三世代、劣化ウラン装甲による圧倒的な防御力を誇り、120mm滑控砲装備。ぬかるみにはまって移動不能な状態からT-72三両を撃破した逸話がある。

対するT-72は第一世代のB型、攻撃力ではエイブラムスと同等だが、それ以外のほぼすべてで劣っている。世界を代表する名戦車も旧式となつては最新機には勝てるはずもなく、草原に無惨な姿を晒していた

「フロッギーフット来ますー！」

「トライアック隊の援護位置に入れ！歩兵たるのこつてればどつともなる！」

残勢力は爆撃機1機とヘリ1機。更に北から増援が来ているようだ。こちらも航空支援は要請したが、間に合つかは不明

「AGM!! 狙われてるぞー！」

「チャフぶちまけろー！」

ボンーと、無数の金属片が打ち上がった。敵機のレーダー誘導を妨害するためのもので、何の変哲もないアルミニ箔である

それだけでミサイル（Air-to-Grand Missile）は目標を見失い、草原に突っ込んで爆散した

「だあらー！」

M2重機関銃を振り回してヘリに照準を合わせ発砲。12・7mm弾は反動が強く、しつかり握つていないとばらけてしまう。

飛距離が足りず、命中は無し。たが牽制にはなった

「そのまま抑えていろ！…」

マリアンがスティングガーを構え照準、ロックオンを終わらせ、撃ち上げる

白煙の帯を残してミサイルがヘリへ突撃し、横腹に直撃。轟音と炎を噴き出して爆発させた

「弾切れだ」

マリアンが引っ込む

しばらく味方のガトリングが爆撃機を追い回した後、向こうつも弾切れで帰つていった。被害は偵察車が2両

「増援は？」

「友軍が間に合つた

少し遠くで爆発音

ヒュン、と、F-15Cイーグル2機が上空に現れた

「休憩兼ねて今のうちに弾の補充しちゃ、補給車呼ぶぞ」

「早くね？」

「ユリが限界だ」

ああ

姿が見えないと思つたら、隅っこで固まつていた

「見てやるな

」「解

『戦況報告書』

当方が交戦したすべてのクランフォール軍はアルメリア製兵器を中心¹に装備しており、十年単位で大量の兵器支援を受けていた事は間違いない。本戦争はクランフォールがアルメリアの代理をしているだけであり、根底の元凶はアルメリアにある。つまりここでクランフォール他5国を武力によって制圧する事は何の意味も無く、下手

な戦力消耗は避けるべきである。ついては全兵力を各拠点の守りに回し、ある程度の譲歩を含めた和平交渉を……

『飛行戦艦計画進捗状況』

夜間のうちに実施した試験飛行は成功、トゥール港より発進、離水したのち、沿岸10km地点で着水した。これにより『ウムル・アトル・タウイル』本体は完成したことになり。残りの弾道弾迎撃用レールガンを実装すれば飛行戦艦計画は完遂となる。しかしサジタリウス計画を遂行中であるパラナはクランフォール軍による侵攻を受けており、早急な研究所移転もしくは戦力拡充、……

『エクス・トロキア軍司令部宛』

この計画は間違っています。

サジタリウス計画はICBMへの対抗手段だったはずです、対地攻撃能力は必要ありません。しかも核を撃つなど、アルメリアと考えている事が変わらないではありませんか。

エクストロキアは世界の抑止力とならなくてはならない、それは理解しています、しかし抑止力も一步間違えばただの暴力となり得る事を思い出して欲しい。

これ以上計画を歪ませるというのなら私は計画責任者としての立場

を辞任し……

まだ間に合ひ、と直感は告げていた

「…………」

数冊の報告書と送られなかつた手紙を元に戻し、それから基地内の地図を見る

ここから真下へ8階、そこに獲物があるはず

ウージーを持ち直して部屋を出、さつき蜂の巣にした警備員をまたぐ。サプレッサーの耐久性を考えると、射殺できるのはあと5人か6人。できれば見つからずに8階下まで降りたかった

手っ取り早いのはエレベーターだが、咄嗟の自体に対応できない。
そう考えると階段、もしくは他の何か

絵に書いたような緊急通路があるはずもなく、階段方向へ歩いていく

クランフォールが攻め込んでいる事もあってかほとんどの人間が出払っていて、階段は無人、特に問題無く目的階に到達した

まつすぐな通路が1本。その先に扉がひとつあり、SMG装備の兵士が2人

どうにかしないと近付ける筈も無く

装備はウージー2丁とMK23拳銃。この位置から狙撃するのは厳しいものがある

少し考えて、MK23の11・42mm弾を取り出し、投げた

カツン、と音が鳴る

「ん…？」

物陰の侵入者には気付かずとも今のは気付いたようだ、2人で目配せし、片方が歩き出した

ナイフをホルダーから取り出しつつ、もう一度音を出して残り1人の死角へ誘導

「……弾丸…？」

音の元凶を拾い上げようとした瞬間、後ろから首を掻き斬つて、それから心臓

びちゃり、と血が飛び散る

「おこづいた、金田の物でも拾ったのか？」

後の話は簡単だ

ウージーの銃口を残りへ向けた

「やつと着いたか」

スーパー・ロデオガール操縦のストライカーから降り、パラナ中心部を見据える。断続的な銃声が聞こえ、上空をF-16Cが飛び交っている。制空権は完全にクランフォールが握っているらしく、先程のイーグル小隊が暇そうに旋回していた。航空隊に展開される前に飛行場を絨毯爆撃したらしく、郊外の一角が大炎上中、煙がすごい

「じゃあ俺は狙撃に回る、後ろひしくな

ストライカーから降りすレオンが言う。持っているのはPSG-1対人狙撃銃で、弾倉を装着しつつスコープを調整中

「進攻ルートはわかるな？6時撤収だから時計は」まめに見ろ、もしかしなくとも延長されるだろうが

「独断撤退はアリ?」

そのままロデオストライカーで去つていった

「行くわよ」

「え、お、お」

残つたのは明、ユリアナ、マリアンの3人。小銃2人に分隊支援火

器1人、どこにでもいる「普通の編成である、女性2人な点を除けば

「後方、異常無し」

「はい前進、急ぐわよ」

急ぐとしても、全方位警戒態勢じりじり前進内での急ぐ基準だったが

慣れていない明を他2人がカバーしつつ市街地を進んでいく。住民は避難したのか人気が無く、所々の家の窓が割れてい、火事場泥棒でも入ったんだろう

「誰もいないわね、まだ気付いてないのかしら」

「捕捉はされているだろう、こっちに回す余裕が無いか、待ち伏せか」

ガチャリとMG4が脇道の先を睨みつける、敵影無し

「分隊規模で散開しているから対応に手間取っているだけかもしれないが、なんにせよ敵の残戦力は少ない、恐らく日中には籠城を決め込む」

「また伏兵でも出てこなければいいけどね」

人の隠れられそうな所をくまなく探していくが当たりは無く

しばらくすると無線が入った

『あー、あー、こちら狙撃チーム、エレナです』

「はい」

『立体駐車場屋上からサーモグラフィーで索敵していますが、ここ近辺に熱源はありません、進んで頂いて結構です』

上方向を見回してみると、一際大きい建造物の上にストライカー装甲車、目立っていた

大丈夫なんだろうかあれば、ストライカーの防御力は口径14mmが限界で、ロケット弾でもぶち込まれたら瞬時に爆散するのだが

「だそりだがどうする?」

「…信頼性は?」

『70から80%』

微妙な数字である、賭けてもいいが、担保は命だ。できれば90は超えて欲しい

「いいわ、行きましょう。どちらにしろやる事は同じだし』

SCARを右肩で構えたまま、コリアナが走り出す、すぐにマリアンも続き、少し遅れて明

『動きに合わせてこちらも移動しますが、銃の射程には限界がありますので、緊急時にはジャベリンで援護します、留意してください』

あのエイブラムスを1発で吹っ飛ばせる対戦車ミサイルで歩兵を援護するというのか、下手しなくともフレンドリーファイアだら

まあむぎむぎ殺されるよつはマシだと思つが

「近いわよ、準備は？」

「オーケーだ」

とにかく、今は前方に集中しよつ

カツン、と、空薬莢が床に落ちた

既にサプレッサーは役立たずとなつたため捨て、両手には加熱されたウージーが1丁ずつ。総数で20人ほど殺したろうか

他に敵影は無し、警備に当たっていた連中はすべて急所を貫かれ、薬莢に紛れて転がつていた

「……」

目的の物は無かつた

研究開発室らしき部屋の奥には長大な通路のようなもの、恐らく実験射撃場だろう。砲台を据え付けるための場所には何も無く、コンピュータ類も軒並みシャットダウンされている。プリンターを見る
と、出力された実験結果が放置されていて、慌てて撤収した様子が見て取れた

大体30分から1時間前。ギリギリで逃げられたか

ともかく目標は失われた、残った情報を入手しようと一台のパソコンを起動させ

「動くな」

拳銃を突き付けられた

「つ……」

人数は1人、白衣を着た男で、50歳から55歳。トカレフを両手で構え、こちらに照準を合わせている

「クラン軍か……？とてもそうには見えないが……」

素人が自衛用だからと押し付けられたような構え方だった。最後のデータ抹消を任せられ、撤収後も残っていたらしい

胸の名札は男がこここの所長だと証明していた。警備員が全滅したのにたいした度胸だ

「答える、何をしに現れた」

「……あなたの研究成果を破壊しに」

一瞬、照準がぶれた

その一瞬で体を反転させ、といつても最初から撃つ気は無さそうだ

つたが、ウージーを突き付け返す。弾はまだ10発ほど残っていた
はず

所長は大きく怯んだものの、トカレフは構えたまま

「レールガンはどう」「?」

「……答える義理は無い……」

やはり度胸がある、死体の散乱するこの状況で拒否するとは。まあ、こいつらとしても撃つ気は無い訳だが

彼は別に殺し合にするためにここにいる訳では無いのだ

「失礼ながら机を漁らせて頂きました、この計画に不満があるので
は?」

「……そうだな、もはやあれば私の望んでいたものとは程遠い」

共に凶器を向けたまま

「だがそれでも、この国には必要なものだ」

「…………やア?」

カラント、スマートグレネードが転がった

「なつ…！？」

破裂した缶から大量の煙が噴き出し、完全に視界が失われる

持続時間は約1分、その間煙は滞空し続け、霧散後には所長は気絶して倒れていた

「さて…」

パソコンには初期設定の入力を求める表示、これも手遅れだつたか少し考え、PCケースを開けてハードディスクを取り出した。初期化した後でもデータを復元できる場合がある

保存と消去なんてものは対応するビットを書き換えているだけなのだ、0と1をいじくつてやればすぐ復活してしまう

その作業が終わつたあたりで階段を駆け降りる足音が聞こえ、それからエレベーターも到着

「強行突破になりますか…」

あたりを見回して、緑色のアーモ缶を見つける。9mmパラベラム弾が詰まっていた

使い切つたウージーの弾倉にそれを流し入れ、装着。重量的に余裕

があつたので取つ手部分に適当な紐を通し、アーモンドリと肩ひも
掛ける

「まあ、嫌いじゃねーですナビ」

引き金を引けば弾が出る、それは銃の基本動作である。そして撃たれたら当たり所によつては死ぬ

「場合によつては即死の方が楽な時もあるのよ?」

「……そつか……?」

「苦しむ時間は『えないこと』、これが戦争の基本」

死に損なつた敵兵の応急処置をしながらコリアナが言つ

医学の知識でもあるのか、例によつて手際がよかつた。看護婦で
もなればよかつたのに

「ま、結局は状況によりけりなんだけれどね。長時間放置されてしま
うよりなら殺してしまったほうが楽」

いきなり息の根を止めると言われても土台無理な話である

無意識下で急所を外してしまう

「二つか慣れるのか？」

「慣れるつていうか頭のネジが外れるつていうか」

過度の爆撃と性能差により戦車戦はクラシックホールの圧勝で終わり、
市街戦も小康状態となっている。両陣営共に陣形を整えているとい
つた具合

これからどうなるにしろ、エクストロキア側にはもう退路がない。
援軍として現れた戦闘機（フランカ）もF-15とF-16が叩き落としてしま
つたし

後は一点突破か、じりじり削つていくだけ

「こんな場所にいるからね、脳が麻痺してるだけだと思つわ。終戦
したらどうなるか」

死なない程度の応急処置を終わらせ、コリアナは敵兵を物影へ移動させた

普通にしている分には存在に気付かないレベルで隠蔽している

「何やつてんだ?」

「ちょっとね…」

30秒ほどでそれを済ませ、程なくしてマリアンが帰ってきた

いくらか戦闘したらしく、MG4から煙を吹いている

「下水道から施設内まで行けそうだ、敵もいない」

「わかった、行きましょう」

無線機を取り出してレオンと通信し出す。ストライカーを呼んで入口の防衛に当てるようだ

地図上で確認すると下水道は北へずっと伸び、途中で敵基地の真横を通りている、距離約2km

「籠城体勢を整えられる前に侵入したいから、お皿はこれで我慢して」

圧縮シリアルバー数本を渡された

前大戦中のクロスフロントが使っていたDレーーション(チョコレート)を小麦粉他と混ぜて固めたチョコバー。通称『ヒトラーの秘密兵

器』（）よりはマシだが、これもだいぶ酷い。噛み砕けないほどに圧縮されているのだ

「……FURくら」持つてこれなかつたのか

「そんな最新鋭、傭兵に回つてきやしないわよ」

言いながらマリアンにも同じものを渡す

包装を開けてみると中身は大きめのクッキーかカロリーメイト。が、レンガと同じ触感である

「なんつーか… とりあえずこれ『空軍用』って書いてあるけど流通ルートはどうなつて…… ッ！？！」

「？」

シリアルバーにモラセスを染み込ませるマリアンを発見、思わず目を逸らした

まあ、完全に無い組み合わせではないが、戦場に瓶を持つてくるなよ

硬い穀物棒をどうにか飲み込みながら歩き、下水道入口に到着する頃にはストライカーも合流

「戦闘終了時間延長だ。軽く昼休みして、B-52でバンカーバスターをぶちまける。後はひたすら突撃だ」

「え」

「ここから侵入するんなら時間合わせた方がいいだろ」

と、レオンがクラッカーをかじりながら言つ

バンカーバスターとは地中貫通爆弾と訳され、土やコンクリート壁を突き破つて内部を破壊する特殊爆弾で、要するに徹甲弾を100発ほど投下して基地を耕してしまおうといつ魂胆のようだ

「ま、ゆっくり行けな」

「わかった」

ジャベリンミサイルを引つ張り出さうと奮闘しているエレナの横を通り下水道内へ

「…………」

一歩踏み入れた瞬間、ユリアナが停止した

「…………ちょっと、ガスマスク無い?」

爆撃が始まった

地中数メートル下まで潜り込んでから爆発する特殊爆弾がふざけた
弾数撃ち込まれ、基地施設が上から崩れしていく

まったく面倒な事をしてくれる、このままでは生き埋めではないか

『地上にいる者は基地外へ退避！！それ以外は地下へ避難しろ！！』

スピーカーが怒鳴り声を上げる

が、数秒で爆発音に変わり、やがて何も聞こえなくなつた

「む……」

正面からの弾幕が半分になつた、逃げたらしい

残り半分が弾切れになるのを待ち、スマーケグレネードを投げつつ
ウージーを構える

拾つて投げ返そうとした1人と、妙な動きをした新人をまとめて射
殺。煙が巻き上がってから普通のグレネードを追加した

地下3階、クリア

「無茶苦茶だ！！ストラトフォートレスが編隊組んでやがるーー！」

「とにかく下に行け！…生きてればビリがなるだろー…」

地下2階への階段を登るつとした所で話し声が聞こえ、兵士2人が駆け降りてきた

壁に張り付いてウージーを構え

「条例違反で訴えるぞあいつらーー！！！」

「航空爆撃に関する条例なんてねえよーーありそつだけどねえんだよーー！！！」

すごい勢いで無視された

「…………」

まあ、いいけど

今ので地下への避難は最後だつたらしく、地下2階に人は無し。崩壊した壁と天井が瓦礫の山を作っている

爆撃はまだ継続中。あと30秒もすれば爆撃機が基地上空からいなくなり、再度爆撃するための旋回に入るはず

脱出するならそこしか無い

地上への階段は埋まつていて使えそうにないが、ついでに天井も無かつた。地下2階まで日光が注いでいる。後はロッククライミングすればなんとか

爆撃停止を確認してからひたすら上へ上へ

「ツ……！」

本当に無茶苦茶だ

もう一つ編隊いやがつた

予想より相当早く再開された爆撃で振動が起り、足場ががらがらと崩れしていく

地上まであと数十センチだといつのに

崩れる前に次を踏んで鉄筋を掴み最後の上昇

「は……！」

できず

地下3階の天井が崩落したらしい。瓦礫はごつそりいなくなり、落下を防いでいるのは鉄筋1本のみという有様

そこに爆弾が降ってきた

不幸中の幸いはそれがバンカーバスターだった事だろう、こんな地

上付近で爆発するものではない

「ちよつ…まだ終わってなかつた…！戻つて…早く戻つて…！」

「落ち着け…踏むな…痛い…！」

瓦礫に埋まる前

やけに騒がしい声が聞こえていた

「夏草や 兵どもが 夢の跡」

「何それ」

「松尾芭蕉」

俳句を詠んでも今は夏ではないし、草も生えていない

B - 52が去った後の基地内には、瓦礫と、焦げ跡と、大穴がひとつ

基地としての原型はほとんど留めていない、市街地ではまだ戦闘が続いているが、360度全方位においてアリ一匹も見当たらない

『いやな、ここまで激しいとは俺も思わなかつたんだよ』

焼け野原でコリアナが無線機越しにレオンと話している。敵陣を強行突破する訳にもいかず、ストライカーは相変わらず下水道の向こう側で留守番中

「なんつーか、これ、早いとこり掘り返すこと生き埋め組がやばいんじゃないか？」

「……とにかく探索してみましょ。マリー、降りれる場所探してきて」

軽機関銃を担いだマリアンが縦穴を覗きだした

地下3階あたりまで突き抜けて崩壊している、そのまま降りるのは厳しいと思つが

「ロープか何か無い？」

『荷物固定用のチャーンからこくらか、今持つてくから待つて』

話しあつてゐる間、明はマリアンの元へ

着地地点までの距離を測つてゐるようだ。普通に飛んだら骨折どころでは済まない高さではあるが、紐を垂らすにしろ落差は少ない方がいい

「手榴弾はあるか？」

「ん……? 2つほど持ってるが…何に使うんだ?」

と、聞いた所で斜め下を指差された

あつたのは大量の瓦礫

「あそこ」の丘を崩せばこいつらがこくらか平らになつて高さも上がる

「ああ…なるほど…」

腰に付けていたアップルを手渡す。破片手榴弾にそこまでの衝撃力は無いのだが、場所を撰べばほつつく程度でいいんだろう

とこうか、強すぎると更に床が抜けそうだ

ぱいっと手榴弾を放り込む

「……」

「……」

「……………ピンを抜いていなかつた

そりや爆発しねえよ

「まじり、最後の1個だからな…………ん?」

もうひとつを手渡そうとして

マリアンがMG4を構えた

背中のナイロン製リュックから伸びる弾帯と給弾装置を接続し、照準はさつきのアップル

「耳塞げ」

「持つてきました」

「あれ…あのオヤジは?」

鎖を持ってきたのはエレナだった

寸足らずの女の子が自衛用MP7を肩提げして駆け寄つてくる様はお使い帰りの中学生のよう。しかし年齢は18だったはず

「車内で通信機広げてます」

「撃つてよし」

「……あれは撃つていいんですか?」

「あー…まあいいんじゃない?どうせハッパかけるだらうし」

「どう?」

「だいぶ狭いが…通れない事は…っと…!」

瓦礫の隙間に体を押し込んで地下4階への侵入に成功。電力供給は止まっていないようで、ぽつぽつと電灯が光っていた

生きている人間は1人も見当たらず、あるのは死体のみ。やけに床が赤いなと思ったら、上の瓦礫から血液が漏りしている

あの中で何人死んでいるのか

「射殺されてるじゃない、何かあつたの？」

「いや最初からじつだつたから何もわからん。……つか……悪い先行くぞ」

畠の中身を吐き出す訳にはいかない。明は階段を降りて階下へ

地下5階も同じような惨状だった。血の雨漏りが無いだけ幾分かましだが

「すみません……」「掴んでいいですか……？」

「ん？」

左腕の肘近くを握られる

振り向くと、小さいエレナがさらに縮こまって引っ付いていた

「こんな頼りないのでよければ」

「……すみません……」

自分以外にも慣れていないのがいたようだ。いや、コリアナ定義だと”頭のネジが外れていらない”だが

コバンザメよろしく追従してくるエレナを引き連れ、部屋の調査を

開始

「やつぱり死人見ていい気はしないよな」

「いえ、そういうのじゃなくて…怖いんです、血が」

地下5階は土官の私室のようだ、ネームプレートのついた部屋は軒並み鍵付きで、不用心な部屋も情報が残っているとは思いにくい、典型的な男の独身部屋なのだ

死体を避けつつ一番奥まで行くと、あつたのは所長室。この基地は研究所も兼ねていたらしい

「……鍵が撃ち抜かれてる…？」

ドアには銃痕が残っていた

中に入ると特に異常は見当たらず、他と違うといえば、散らかっていないくらいか

とりあえず机の引き出しを開けてみる

報告書数冊と、手紙が1通。大部分が飛行戦艦に関するもので、形式化が近い事を記していた。手紙は嘆願書のようだ、しまわれていたあたり、出す氣は無かったのか

「飛んだのか？あんなバカでかい鉄塊が？」

「見たことあるんですか？」

「2歳の時な、失敗した方のだけど」

明が孤児員暮らしになつた理由もある、が、わかりきつた地雷を踏むいわれも無いので黙つておく

といふか、実感が湧かなかつた。あれの犠牲者120名の中に自分の両親が入つているなどと

2歳までの思い出なんて、その後の18年に飲み込まれてしまつた

などと考へながら報告書をペラペラめくり、『サジタリウス計画』とこう単語を発見。ここで進行させていたものようだ

「これは、飛行戦艦の開発計画?」

「いえ、プラットフォーム本体は発案者の名前を取つて『オーグレット計画』です。恐らくそれに付随する兵器の開発計画か何かじやないかと」

とにかく、これは回収しておこう

他に何か無いかと引き出しをすべて開ける

部下の辞表、故障した空調の修理見積書、基地戦力表、世界地図、よくわからない数字の羅列、マルボロ赤ソフト

「メモ帳を発見」

ただし半分以上が破られている。この所長は不必要になつたペー

ジはすぐに排除していく人間だった、おかげで何か書いてあるのは
1ページのみ

6 / 24

クルスク移転処理

今日の日付だった

「手遅れ臭いな……」

「まだわかりませんよ、もっと下に行けば何か残ってるかもしれませんし」

「そつか

報告書を持って部屋を出る

次は、更に下か

降りるのが面倒だ

神話の残骸 2（後書き）

後書きって書いた方がええのん？

じゃあせつかくなので兵器紹介でも。
と思つたのですが。

軽一く操作ミスして書いた説明文がすべて消失しました。

今回はこれで勘弁してください。o_r_n

90式戦車きゅうまるしきせんしゃとは、日本国陸上自衛隊の最新兵器であり、チハたんの遠い子孫にあたる高級ブリキ缶（副業で戦車）である。

まだ主力戦力になれない90式は、各国MBT中でダントツの軽さを誇るスマートで可憐な可愛い外見であるが、中身はハイテクの塊である立派な第三世代戦車なのだ。自衛隊上層部は「主力戦車は情操教育が大事。だから空気のいい大自然の中で90式を育てる」とし、90式を北海道と富士山のふもとに配置している。

74式戦車ちゃんからは「最近の若い戦車は…」と渋い顔で見られることもあるが、これは昔から戦車の間で言われている文言であり、エジプトの壁画にも書かれていることである。

90式の開発は70年代より始められた。ドイツ連邦軍のレオパルド2を見た陸上自衛隊の幕僚が

「お母さんー！ あれ買って買ってー！ あんなかっこいい戦車うちこも欲しいよう！」

「ダメですー前に74式を買ってあげたばかりでしょー！」

「やだやだ、買つてくれなきゃグレでやる！」

と大騒ぎした結果、しぶしぶ似たような戦車を日本国が開発した。しかしこれを見ていた海上自衛隊幕僚が「イージス艦買つて買つて「16DDH買つて買つて」とマネして連発したため、90式の購入金が底を尽きてしまい、毎年細々と数輌購入している。なお海上自衛隊のおねだり癖はなかなか消えず、陸上自衛隊は最近お小遣いを減らされつつある。まあほら最近、陸より海のが危ないしね。

当初は10億円という高価な戦車だったが、町工場のおじさんが赤字覚悟で値引きしたため、最近は少しづつ安くなっている。とはいもののいまだにエンツォ＝フェラーリ10台分より高い値段であり、全部に配備するわけには行かず配備は一部のみである。このため、大部分の部隊はスクラップ工場の前でドナドナを合唱しながら整列していた74式戦車を再度使う羽目になってしまった。

なお、この戦車の装甲、ナイチチの少女の「とくツルペタで垂直だが、

「避弾経始つけるなんて面倒でイヤン」

と主張する三菱重工技術陣の怠慢いや涙ぐましい努力により、第二次大戦前の戦車も真っ青のマッチ箱スタイルが採用された。

60年ほど時代を遡ることとなつたこの画期的やつつけ設計は、後に比類なき癒し性とやわらか装甲を誇る「やわらか戦車」の発想に大きな影響を与えることになつた、かもしれない。さらに、2006年からはイラク派遣で実戦テストしていた、33発の迫撃砲・ロケット弾と一個の即席爆弾（IED）の攻撃を受けても自衛隊員に死者を出さないA・T・フィールド を搭載しその防御力に磨きをかけた

アニメ版

* オープニングテーマ「檄！ 戦車教導団！（ゲキセン）

「

* エンタイングテーマ「夢見るブリキ缶」

作曲・作詞：JAM Project & 陸上自衛隊中央音楽隊

スポンサー：防衛省

「おかしい」

「確かにおかしいな、これは」

地下8階まで降りてきてもあるのは死体だけで、自分達が来る前に何かあつたようにしか見えない

中には手榴弾で爆散したものもあり、あたり一面に血の臭いが充満していた

「銃痕はこっちに集中してて、でもこっち側に死体は無いから……下から上がってきた何かを止めようとした?」

冷静に分析しているユリアナを置いてマリアンが更に下へ降りていき、それに続こうとして左腕を引っ張られる

原因はさつきから引っ付いていたエレナで、臭いにやられたのか顔が青い。休ませないと倒れそうだ

「大丈夫か?」

「あ……まつ……大丈夫とは……」

階段に座らせて、鼻と口にハンカチをあてがう。臭いはだいぶ削がれるはず

「おーい、気分悪いみたいなんだが診てやってくれー」

「あ、はーい。……つて最近私の扱い衛生兵になつてない?」

とか言いながら寄ってきたユリアナであるが、顔色を見ただけで納得したらしく、すぐに離れた

「一畠外に出ましょ。悪いけどPTSDと恐怖症は非対応だから。背負つてあげて」

「お、ああ」

「時々いるのよね、血が駄目な人」

息絶え絶えのエレナを担いで上へ

外の戦闘はどうなつただろうか、本部がこの抜け殻具合だと戦つて
いる人数はかなり多いはずだが

「出口どこだっけ？」

「そのロッカーの右」

しかし、移転が完了していたなら逃げた後になる。包围したのは無
駄だった可能性が出てきた

まあ入手した報告書とメモ帳をレオンに見せれば対応できるだろ？

移転場所は明らかなのだ

「あ、やばい」

「何が？」

「完全に塞がつてる」

「…何だと？」

少し慌てた様子で無線機を取り出し、すぐに溜息。はたから聞いて
もノイズオンリーだった

つまり生き埋めになつた訳で

「まあ、あと2時間も音信不通なら外の奴が助けに来るでしょ。とりあえず下のベッドに寝かせてあげて」

「わかった。お前は？」

「いろいろ試してみる」

そのM72軽量ロケットランチャーで何を試すつもりなのか問い合わせたくなつたが、今は病人の看護が先決だ。地下5階の所長室まで戻つてエレナを降ろす

「寒いか？暑いか？」

「……寒……」

あるだけ布団をかけて、空調が生きていたため調節

「ちょっと待つてくれ」

エレナを残して外へ

そうしたら、階段付近でマリアンが突っ立つていた

ユリアナに言われて待機している風ではない、何か放心しているような

「お前は何だよ？」

「…………？」

ゆらりと

死んだ魚みたいな目がこっちを向いた

「私は何のために生きているのだ……？」

「いや昨日今日で知り合った人間に言わわれても」

「…………処刑してくれ…………」

「生きる」

頭を2回叩いて4階に行く

この絶望している機関銃兵にも対処しなければいけないが、最も気になるのは上の様子だ。あのロケットランチャーを撃つのか否かでツッコみ方を変えなければいけない

地下4階、かくしてユリアナは射撃態勢を取っていた

照準は言つまでもなく上、バックブラスト対策に長い廊下を使用するため角度を10度以下に留め、ぱっと見では階段、そこにいる明

を狙つてこるよにしか見えない

「……」

「……」

「……いこよ、何も言わないからやれよ」

発射

着弾

爆発

ガラガラガラガラなどという擬音ではどうてい表現できなぞうな音がして、視界が粉塵で埋め尽くされる

視界ゼロ状態でしゃがみ頭を守つてはいるが、吹っ飛んできた何かにより体勢を崩され、階段遊び場まで盛大に落下

「駄目か……やっぱり待つしかないかな……」

「痛つつつ……てえ……」

天井は塞がつたままだつた

おしゃれに見えて以外とおしゃれ芷といふか

立ち上がろうと上に乗る何かをどかす

瓦礫のような硬さではなく、むしろ柔らかい、人肌に似た、人肌だった。この状況で考えられるものというと

見たくないものの確認するには見なければいけない。飛び下がりつ
つ田を開き

まず見えたのはオレンジ色

二〇九

夕焼けのような頭髪だった

軍施設という場所に似合わない、よく普通の私服で、身体的特徴は女性のもの。ぱつと見の年齢は20代前半で、大学生と言われれば何の違和感も無い

「み 民間人？」

「おれか」

ランチャーを持つたままのユリアナが近付いてきて、女性の腰に手

を伸ばす

「民間人はこゝんなもの装備しないわよ」

ウエスタンベルトを外して持ち上げると、サブマシンガン2丁が現れた

もう一本付いていたので外す。こちらは拳銃とナイフ

余計なものをすべて外して仰向けにし、呼吸を確認

「まだ生きてる」

「助かるのか?」

「それはまだ何とも言えないけど……」

不意に

背後で金属音がし、視界の端に銃口が映った

「ちよ……こきなり何やってんだよ!?」

橙髪の女性を睨み付けているのはマリアンのMG4。先程までの放心状態はどこへやら、いつも通り鋭い眼光で引き金に指をかけている

よく見れば、MG4は既に熱を持っていた。周囲の空氣に伝導して薄い陽炎を作っている

ここには下の階でどれだけ撃つてきたのか

「はいストップ」

「ツ…………」

発砲前にユリアナが銃口を塞いだ

軽く貫通できる程度の障害物だ、そのまま撃つてしまえば何の問題もない

しかし、味方の手だと撃つ奴なんてまずいないだろう

「使用武器がワーゼーなら」この人間と戦つてた可能性が高いし、そもそもこんな年代物、正規軍なしまず使わないわよ」

ゆっくり銃を持ち上げていく

たいした抵抗もなく射線から女性が外れ

「少し落ち着きなさい、後で後悔するのは自分でしょ」

MG4の取り上げに成功

「…………」

マリアンは放心状態まで逆戻りして、いやしつきより酷い、下手すれば泣きそうな雰囲気

「すまん」

まつこと駄馬、下へ降りて二つた

「……訳ありか？」

「傭兵やつてる奴なんて全員訳ありよ、あなたも例外じゃないでしょ」

そう言わればそ�だが

「とにかく運びましょう、最低でも救急箱は無こと」

「ああ」

救助した橙髪女性を適当な部屋まで運び、応急処置を済ませてから1時間が経過、エレナはだいぶ回復したようで、室内からは出ないものの普通に動き回っていた

「これ食べてて、私は先に下調べるから」

倉庫から持つてきたりしきレーションパックを渡される。3食分をひとつにまとめたエクストロキア制式品で、重いが、食事としてはクランフォールよりも遙かに優秀

クランフォールにしてもアルメリア供与品にしても、小さくて長く保てばそれでいいと思っているためにフリーズドライやらレトルトやらに保存料代わりの調味料をぶち込み、硬いクラッカーで熱量を補完しているから”補給”以上の意味を持ってていないので

せめてパテかジャムは付けて欲しかった

「大丈夫か？ここ入つてから動きっぱなしだろう」

「あんま大丈夫ではないけど、一回りしてくるだけだから一〇分で終わるわよ」

それじゃ、と、コリアナは出でいった

「……何のための一回りなんだ？」

「敵が隠れていないか見に行くだけでしょう」

ベッド上にいたエレナが動き出す

机の引き出しを順次開けていき、やがてハサミを入手

「多かれ少なかれ、爆撃時に下まで避難したのがありますから」

エクストロキア製レー・ショーンは薄いプラスチックのケースにビニールで蓋をしたもので、見た目は市販の菓子に近い。朝食、軽食、夕食にわかれているそれをエレナは3つに分割し、テーブルに並べた

大、中、小の一人前パックが3つ完成

「.....」

うち大パックを掴んだまま、何か物欲しそうな目で見つめられている
大きいといつてもクラッカーの数が2倍になっているだけで、基本的な構成は変わっていないのだが

「いいよ、持つてけ」

「えへ」

笑って、ベッドまで戻つていった

残つた2つを掴み、明は部屋から出る

遺体は階下にまとめて布を被せておいたため、廊下にあるのは瓦礫と、乾ききった血痕のみ。臭いも消えていた

「 もう……」

鍵の開いている部屋のうち一番近いドアまで行き、中を覗く、件の橙髪が包帯ぐるぐる巻きで寝かされていた。落ち着きはしたが、血が足りないので絶対に起きないらしい

目的地はここではないのでドアを閉め、次に一番遠い部屋へ

「…………」

いた

薄く青の入った黒髪はポニー テールを解かれ床にちらばつている。前方には投げ飛ばされたようにMG4と弾帯入りリュック、男臭いベッドは使わず、壁に背中をつけてうずくまつっていた

落ち込んでいるといつよつは、いじけた子供

「 ほり、昼飯の補完分」

中パックをマリアンの眼前にぶら下さる

声にびくつと反応し、黒髪垂れ流しの頭を持ち上げた。弱り切った

表情も相俟つて貞子のよう

「……すまん、ちょっと触るぞ」

さすがにそのまま過いざれるのは遠慮願いたい

床に落ちていたヘアゴムを拾い、散らばる髪を纏め上げる

触り心地はかなり良い、動き回って撃ちまくった後とは思えず、汗臭さもまったく無い、むしろこう臭いがした

「何の用だ……」

「だからメシ。腹減ってるだろ」

全部纏めて、首周辺で束ねる

ポニーtailは無理だが、このくらいなら孤児院生活の経験でなんとか

「いい……」

「よくないだろ、とりあえず飲み物出すぞ」

髪を整え終え、次いでパックを開封、紅茶のTパックが入っていた

水はある、各部屋に水道備え付けだ、さすが土間

メスキット（食器セット）は持ってきてるので、あと必要なのは火

流し台周辺を探してカセットコンロ入手し、スタンドを介しつつ
カップごと火にかける

「味に関して何か要望はあるか?」

砂糖が3本ほど付属していたし、ジャムも備え付けられていた。う
まく混ぜれば結構なバリエーションができるだろ?う

「.....」

マリアンは顔を伏せたまま、小さく首を横に振った
どうでもいい、という意味か、もしくはまたあのモラセスなのか

「.....ほひ」

熱くしそぎない程度でコンロを止めてカップを差し出す

「.....何なんだ...お前は...」

「ん?」

「こんなどうしようもない人間を構って何が楽しい...」

「いやどうしようもないとか.....」

一応、カップは受け取った

が、飲もうとはせず、液面を見つめたまま

「赤で染まつてこる」

「？」

「」と、な時間滞在して、敵兵と遭遇しないなんておかしいだらう。

「そりや……確かに言われてみればそうだが……」

少し間が開いた

続きを言ひのを躊躇つたような、しかしそう口を開く

「殺した」

「え……」

「泣」いうが喚こうが関係無く、全員、私が

ああ

一人で下に行つた時にやつていたのは、やはりそういう事か

10、20では無かつただやつ。あの白熱具合は

「体が勝手に動く、といつも、憎悪に支配されているんだろうな。いつだつて気付いたら死体の山だ、全員死ぬまで撃つて、それでようやく正氣に戻る」

恐らく100単位で

「私はこの国の存在が許せない。だからいつもして傭兵になって、それをする為了にここにいるのに、結果がこれだ、本末転倒にも程がある」

細い声で言しながら、自嘲するように笑う

「なあ、どうしようもない人間だらうへ」

すべてを諦めた、今すぐ消えてしまいそうな笑み

今まで何人を殺して、どれだけそれを悔ってきたのか

であれば

「いや、まだどうでもなるだろ」

「は…？」

「詳しい事情は知らないけどよ、それで落ち込んでるんなら、何とも思っていないよつずっとマジだし、少なくとも諦めるのは早いと思うが？」

あくまで社会的な問題で、本人が気にしているなら何の意味も無い事だが、戦争中に殺人罪を問うのも馬鹿げている

償い方なんていぐらでもあるのだ

「まあ、結局は言い訳なんだけどな。とにかく、どうしようもなくなんかないから、どうするかは全部終わってからでいいんじゃないのか？」

しばらく硬直していた、肯定的な言葉など初めて言われたんだろう

それから何か言おうとして結局何も言えず、カップを両手で持ったまま顔を膝に埋めた

「馬鹿だお前は……」

「悪かつたな」

レーシックの中身を全部出して並べる

どうかしてこれを食べさせなければ、疲労と空腹で倒れられても困る

『F-15』

アメリカが開発したF-15の日本仕様、航空自衛隊はこれと複座型のF-15Dを合計202機運用しています。1機あたりの単価は約100億円、馬鹿じやねーの。

つづても全部の機体がこれという訳ではねーんですよ、他にも『支援戦闘機』という名の攻撃機F-2を94機（予定、約119億円）、旧式のF-4を改装したF-4E改をおよそ90機（30億くらい？）。他の偵察機やら管制機やら少數ずつあるもので日本の空を守っています、北朝鮮くらいうら瞬殺でしょう。

F-15Jは1974年に実施された次期戦闘機選定（第3次F-X）でF-14と血みどろの争いを繰り広げた後に採用されました。主な理由は

- ・F-15の方が（日本にとって）高性能
- ・F-14は艦載機で、日本は空母を持つていないため、艦載専用の装備、足回りがただの邪魔者になる。かつ艦隊防空に特化していけるため日本の要求性能には合致し難い
- ・フェニックスミサイルがアホ（1発4億円）など

なお、アメリカから輸入していく際にフレア、チャフ等一部の防御装備が提供されなかつたため、仕方なく国産品を開発しています。またその他の各所にも改修が見られ、自動警戒装置から時分割データを取り出せたり、脱出の際にキャノピーが粉碎されたり、常識破りのG制限設定によりパイロットをぶつしたりできます。

2010年になり、性能的にはまだ一線級としても旧式感は否めず、更に第4次F-Xの難航により今度しばらくは日本の主役であり続ける予定であるため、航空自衛隊はF-15を魔改造して延命処置を施す予定。

主にセントラルコンピューターの再換装、レーダーを従来のAPG-63から改良型機械式アンテナアレイのAPG-63(▽)1へ換装、空調設備と発電装置の改良、AAM-4/4改の運用能力獲得、通信装置への電波妨害対処機能付加、飛行記録装置の搭載など

つーかF-22はいいからラファール買えよ、空自
タイフーンでもいいよ
え、駄目?
しうがないな・・・

F-15が退役するのはおよそ2025年、下手したら2032年。更なる改修によりF-22等第5世代戦闘機にも対抗できる能力を得る予定、1972年初飛行の機体が何を言っているのかとにかくまだ現役の元最強であります。F-15は今後も航空自衛隊の戦闘機部隊の中で最大勢力を維持し続け、日本の主力戦闘機として任務に就役し続けることになります。

さすがに飽きたわ（軍オタ的な意味で）

- ・主性能は次の通りである
- ・全試射実験評価

・弾道弾撃破有効射程
・弾体初速
最低 5400 m / s
最大 9100 m / s
平均 8200 m / s

高度 120 km
距離 150 km

・地上目標撃破有効射程
距離 630 km

・必要電力
50 MW

総体として要求性能は達成、残る問題は軽量化のみであるが、構成材質の見直しにより解決可能と予想される。また必要電力に関しては、連続射撃能力を妥協すれば30 MW程度でも十分な性能が発揮できる

保守管理の件については、基本構造がレール2本と電源のみであるため、メンテナンスが必要な装置は自動装填装置のみ……

・破損したファイル

・例のあれの賭け金額

マーク・ヤングス

500D

テラム・シュナルツァー

300D

リッヅ・ペンバー

800D

ゼオン・ラフベルク

チキチキボーン50パック

・破損したファイル

・破損したファイル

・撮影画像

0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1	1	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	1
7	.	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	j	.
j	p	p	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g	g

• 移転先情00000

#08456

0
6
%
1
1
1
1
a
d
5
8
1
7

8
8
5
6

6
3
3
3
2

5
4
1
1

1

7
7
5

9
9
3
3

2
2
5
5

4
7
5

3 0
- 0
- 0
- 0
2
3 7
- #
5 7
- 4
- 6
- 2
- #
- 4
- 7
- 8
- 6
- #

011011111111000000101111110000111000

00000001011000111000011111100010111

100000001101010101010101000001111

00101101110111001111

0110101100011110001111011000000010

1
0
0
0
0
1
1
1
1
0
1
0
0
0
0
1
0

1 1
0 1
0 1
0 1
0 1
0 1
0 1
0 1
0 1
1 1
0 1
1 1
0 1
1 1
0 1
1 1
1 1
1 1
1 1
1 1
1 1
1 1
1 1
1 1
1 1
0 1

1
1
1
1
0
1
0
0
0
1
0
1
1
1
1
1
1
0
0
0
0
0
0
0
0
0
0
0
1
1
1
1
1
1
0
1
0
0
0

「まあ、ディスクとしては頑張った方か

例の橙髪が持っていたHDをパソコンに差し込み、中身を確認した所、保持されていたデータは全体の1割未満で、欲しい情報はほとんど破損していた

OSソフトを探してパソコンを動かし、更にネットワークへの経路を工面しつつHDリカバリソフトを落とすという苦労に見合つかどうかは微妙な所だが、その前に加えられた衝撃を考えると諦めもつく

これ以外に情報は残ってなさそうだ、書類関係は一切見当たらず、何かパーツが残されている訳でもない

「……ん……」

上から微かに土木工事音が聞こえる

ようやく味方が辿り着いたか

本当に何も残されていないかも一度確認し、立てかけておいたS CARを担いでユリアナは上に向かう。血生臭さは完全に消えていたが、各所に赤色がまだ残っていた

「…………」

地下1-2階、僅かに硝煙臭い

食堂だらうか。扉がひとつあるのみで、後は小さい掲示板のみ。内部はまだ調べていなが、どうせ惨状はわかりきっている、いくら慣れているといつても百単位の死体など見たくない

11階から上は目立つた場所は無い。全体として居住施設がメインで、最下層に研究所がくつついている感じだ

地下5階に着く頃には人の話し声も聞こえていた

「どう? 開通した?」

「お……いやもう少しつて所だが、これ大丈夫か? 崩落しそうだぞ」

「大丈夫でしょ、成形炸薬弾の直撃に耐えるんだから」

「ああ……そういえば誰かがロケットランチャー撃つてたな…」

そこから見回した限りでは廊下に出ているのは明のみ、残りはいずれかの室内だらう。とことん戦争に向いていない連中だ

上の様子は、作業音を聞いている限りでは人力作業らしい。時折プラスチック爆弾の爆発音が聞こえるが、運び出せない瓦礫を破碎しているだけと思われる

「例の子たちは?」

「あー…? ハレナは完全に回復したが、もう一人は牛缶食ってギブアップした」

「モ」

缶詰だけでも食べたならまだマシな方が

「どうやって餌付けした?」

「餌付けじゃねえよ

無線機を取り出してスイッチを入れる、まだ電波は届かない

この様子では開通までまだかかるだろ?」

「……牛缶しか食べてないの?」

「ああ

そうか

ながらアレがあるはず

「クラッカー残ってる?」

「すべてHレナが

「こちきしょうが——ツ——！」

「ふえあうはああああああああああああああ！」？

コリアナがエレナの頬を思い切り引っ張つてい

倉庫に行けば同じものがあるだろう、だがそれをするくらいなら上の仕事を待つ方がいい。誰だってクラッカーよりパンが食べたいのだ

「まあまあ、これやるから我慢しな」

「え……あ、うん、ありが……グラニュー糖かよ……」

ステイックシュガーが投げ捨てられた

「…………樂しそうだな……」

「…………？」

マリアンもだいぶ回復してきたようだ。といつても未だ体育座りしてまだが

結局コリアナが口に入れたのは圧縮シリアルバー。堅そうだ

「で、各員の収穫物は？」

言われたため、集めた紙束をコリアナへ。何か信じられないものをみた、という顔をされた

「報告書数種類と研究所移転先の書かれた手帳」

「…………」

「……なぜつねられなきやならんのだ」

「10階近く階段上り下りして無収穫だった時の気持ちってわかる？」

「そりやすいませんでした……」

まずクランフォールの兵器調達事情から説明しておく

アルメリアから兵器供給を受けていた頃はそれに依存していたが、今は輸入という形を取っている。破格の値段とはいえ有料であり、自国開発やライセンス生産をした方が安くなる場合もある。特に航空機は単価が高いため、その傾向が顕著に出でていた

その過程で需要を手に入れたのがツーリーズエアクラフトを中心とする国内の航空機製造会社で、ライセンス生産品を含めると軍用航空機シェアの60%を持つ事になった

結果、国産と外国産を混ぜ合わせた状態で軍を構成する事になり、現在空を飛んでいるのは国産の戦闘爆撃機ラファールと、輸入、またはライセンス生産したF-15、F-16の3機種が大半を占めている。変わり種としては盧獲したSu-27が数機いるが、今回それを上回る変わり種がいるためにあまり目立っていない

『イアンテの撃墜を確認、訓練空域より離脱しろ』

管制機が模擬戦の結果を伝え、少ししてラファールが1機、戦闘機の群れに合流した

クランフォール製マルチロール機、クロースカッブルドデルタという無尾翼デルタ機で、機体全長の半分を占める主翼を持つ。その外見は一般的な戦闘機のイメージとは合致しにくいかも知れないが、最近はこのタイプも珍しくなくなつてきている。コンパクトにまとめられるのが最大の利点だろう

『駄目だ、どうやつても3分なんてもたねえよ』

「いくつだ？」

『42秒』

戦闘開始した直後に後ろに付かれてるだろ、その数字は

ラファールと入れ代わりでF-16が飛び去っていき、同じく撃墜され戻ってくる。ラファールが勝てないのだからF-16が勝てる筈がないのはわかりきっていたが

『アストラエア、出番だ、移動を開始しろ』

「了解」

操縦桿とラダーを操作してF-15Cイーグルを訓練空域へ向かわせる

全長18メートルの大型制空戦闘機だ。かなり古い型だが、各種の改修を受けているため戦闘能力はラファールと同じかそれ以上、と自負している。少し前まで最強の座にいたし

訓練開始前に操縦桿を一回りさせて動作を確認、次いでエンジンも最大まで吹かし、簡単に点検を終わらせた

その後すぐに指定された空域に到達

『準備完了だ、アストラエア及びネメシスは模擬戦を開始しろ』

敵の姿はまったく見えていない

レーダーは何の反応も示さないし、辺りを見回してもあるのは雲のみ。それが敵機最大の特徴とは聞いていたが、実際見せつけられるとどうしていいかわからない

と

「ツー？」

ロックオンアラートが鳴り始めた

レーダーには何も映っていない、管制機とのデータリンクをアドバンテージにしてもこれだ、何の意味も無いじゃないか

思い切り首を振つて後ろを見ると、菱形の翼をした戦闘機が微かに見えた

相手が上にいるなら逃げるべきは上だ、とにかくあれの正面から外れてロックオンを外さなければならぬ。模擬戦では15秒、ロックされ続けると撃墜と見なされる

「飾りじゃねえんだぞ……！」

アフターバナー点火、思い切り機首を上げて上へ昇る。その間にレーダーを操作し、正常動作を確認

ある程度まで上昇してから更に機首を引き、敵とすれ違つて後方へ。すぐにロックは外れた

左旋回でもう一度反転しながら、レーダーを見てもやはり変化無し。本当にただの飾りじやないか

「畜生……」

姿の見えない敵というのは氣味が悪い、幽靈と戦つてゐるようだ。レーダーに映らないだけならまだいいが、相手パイロットがちよこまか動き回るせいで目視すらできていないのだ。どう戦えばいいかまったくわからない

そいつひじてゐる内に再びロックオンアラート

「どうからだよ……」

姿は見えない、ならばこちらの死角である下方としか考えられないが、どの方向から攻撃されているかで対応が変わる

ゆっくり考えている時間は無い、後下方に敵がいると推測しブレイク行動へ

攻撃するなら後ろからが基本だ

が

『15秒だ、アストラエア撃墜』

アラートは止むことなく、そのまま撃墜判定まで持つて行かれた。
最後まで姿は見えず

時計を見ると、戦闘開始から1分23秒。間違いなく最高記録だろうが、カップラーメンすら作れないとは情けない

「つ……」

待機空域に戻るべく進路を合わせて低速飛行していたら、左側にそれが現れた

灰色で塗装された菱形の翼と、上下に潰れたエンジンノズル。従来のステルス機のイメージを覆す比較的従来通りの外観で、こんなものがあの化け物じみたステルス性を出していたとは思えない

機体説明を簡単に言うと、アルメリアから実戦データ収集という名目で送り込まれた最新鋭ステルス戦闘機

形式番号F-22A、愛称はラプター

数ヶ月前にロールアウトされたばかりのそれが送られてきたのは1週間前で、機数は3。うち1機は空力及びステルス研究のため民間会社へ払い下げられ、1機が内装研究と予備パーツ確保のため解体。残った1機がこうして前線に送られてきた

「…………」

見せ付けるように横を飛びラプターを一通り眺めた後、キャノピーへ視線を合わせる。ヘルメットに隠されてパイロットの顔は見えず

だが、少し小さい？

「……離脱する」

少しスロットルを開けて加速すると、ラプターも訓練空域へ戻つていいく

結局、1分23秒は今日の最長タイムとなり、懸賞はビール1ダースだった

群がつてきた同僚にほとんど飲まれてしまつたが

「逃がした獲物はでかかったらしいな、急いで部隊再編し始めたぞ
うちの司令官」

「確かにね、迎撃兵器^{ヘルガン}さえ無ければ飛行戦艦は完成しない訳だし。
でも作り直すんじやない?」

「試作品のバーツを付け替えるだけならすぐ終わっちゃう。要は軽
量化できればいいんだからな、それで済ませる可能性もあるだろ」

「……それで、追つの?」

「追うぞ。ただいちいち本国からの指示を待ってる訳にもいかん、完全に本隊から独立して最初にまとめて権限を取れる。そつなるとPMC中心編成だらうな」

「そんな戦力あるの？」

「他の戦場から集めてくるだろ。俺らは運が悪かっただけで、他はほとんど無傷なんだからよ」

「ふうん……まあいいで足止め喰らつよつはいいけど。出発はいつ？」

明日？

「4時間後」

「バカじゃないの？」

「すぐ戦闘状態に移行する訳じゃねえよ、他の部隊と合流しつつゆっくり移動する」

「だからって運転手は……」

「…………」

それは怪我人を囲みながらやるべき会話なんだろうか

地下施設から脱出できたのは2時間前。まずストライカーと合流して安全地帯に落ち着き、輸血パックを取り寄せる。血液型はAB型のRH-だった、血液があるとか奇跡すぎるだろ

そしてそのパックで車内に寝かせていた橙髪に血を補充させる。レオンとユリアナはそれを囲みながら会議を始めていた

普通の病院ではありえない速度で輸血を終わらせ、現在は包帯を取り替えるための準備中。そのため患者を挟みながら話し合いつ事になつたのだが

「移動だけならなるとかなるか……」

準備が完了したらしく、ユリアナが橙髪の衣類を剥き始める。見てはいけないような気がして明は背を向けた

「あれ……？」

「ん？」

いきなり疑問文を出すので振り返りしそうになつたがなんとか思い留まる

代わりに耳だけそちらへ

「傷塞がつてゐる」

「何だつて？」

ハサミか何かで布を切る音と、人の頭を殴る音。レオンが後頭部を押さえながら出ていき、少しして視界内に投げられた血染めの衣類

「はい、もういいわよ」

言われて振り返ると、橙髪は迷彩服を着させられていた。白と黒で構成されているから寒冷地用迷彩だろうか

ボタンが外れた場所から素肌が見えていたが、外傷らしきものは見当たらない。つい数時間前まで瓦礫に埋まっていたはずなのだが

「痕跡すらないってどういう事なの？」

血が補充され血行がよくなつたためか顔色はそれほど悪くない。だがそれは関係ないだろう、単に輸血しただけだ

通常、傷は完全に塞がるまで数週間かかる。個人差はあるだろうが、数時間で治る道理もない

「魔法でも使つたか？」

「ああ、それ可能性あるかもね」

「まあ 実在すればの話だけじな」

「ハハハハハハハハ」

2人して笑い飛ばしてみる

「はは……つていう所でほんとに実在するからたち悪いのよね……」

「ハハ？」

何か意味のわからない事を言つた気がする

「UJの戦争終わったらクロスフロントあたり行つてみなさい、まだ絶滅しないはず」

「え、いやちよつと待て、魔法あんの?」

「文化保存として残つてる程度だけじね、前の戦争じや戦闘にも使われてたとか」

寝耳に水だつた

魔法つてあれだらう、主にファンタジー小説で用いられる非科学的現象の事だらう。教養の無い明にとつては『万能な存在』という印象しかない

しかし、それが絶滅寸前?

「なんで？」

「汎用性が無い、誰にでもできる訳じゃない、特別な訓練が必要、費用対効果が壊滅的、どんなに頑張っても射程距離が足りない」

おもむろにSCARを拾い上げ、弾倉から7・62mm弾を出す。その金属片は1個数円で、人間を軽く殺せる威力を持つ

「だったらこれを大量生産した方が手取り早い訳よ」

ボロクソ言われたものだ

「とにかくそれはいいでしょ、田下の問題は……」

未だ目を覚まさない橙髪を見る

傷は消えた、輸血もした、服も着替えた

「起きた」

ばつちーーん！とひつぱたかれた

「え——」

なんとも乱暴な

さすがに殴られれば覚醒状態まで持つて行かれるようだ、はたかれた瞬間に激しく痙攣して一気に起き上がった

「……？」

いきなりだったの完全に混乱している、オレンジ色の頭髪を振つて周囲を見回し、腫れた頬を押さえつつやや涙目

そうしたら明と目が合つた

白黒の迷彩服で、髪も乱れているものの、正面から見るとかなりの美人と言える。それにじつと見つめられているのだから何か落ち着かない

向こうといえれば数秒間こっちを凝視した後

「ミネバ・ザビに似ている……」

とのたまつた

「はい落ち着けー」

ユリアナが橙髪越しに背中をさすりつつ深呼吸を指示。吸つて吐いてを繰り返す

30秒ほどでだいぶ落ち着きを取り戻したらしい、瞳が正気を取り戻しよろしく状況を理解。乱れた髪を手櫛で直す

「ホールドアップ」

そして拳銃を突き付けられた

「再度混乱させて貰うる」

「忘れないで、こいつは地下施設内での惨劇起こした犯人かもしれないのよ」

そこで上り下りに使つたチエーンが再登場し、橙髪の手足を縛つていぐ。鎖じゃ痛いだろうに

「その気になつたら私達なんて5秒もない（可能性がある）んだからね」

「だからつい今夜は……」

「さあ、まずはこの綺麗な髪を維持する方法を教えてもらいましょうか」

ユリアナが暴走を始めた

「いや……あの……？」

「シャンプー何使つてるの？」

「え……特に決まつてねーですけど……」

「ふざけるなッ……！」

「あうひーーー」

なぜそんな尋問チックにする必要がある

結局、落ち着かせるまで数分かかった

町外れでテントを設営していた司令官から呼び出されたため車内に
橙髪（拘束状態）を残して集合し、追撃隊編成の説明を受ける。そ
れ自体は5分で終わったため情報収集にレオンを残し帰宅（帰車）、
エレナが車体チェックを始め、マリアンは寝始めた

作戦開始、というか移動開始は本当に4時間後で、休む暇は無いとばかりに補給車が到着、弾薬、食料その他を置いていったためしばらくそれを積み込む作業に没頭する。ストライカーは完全武装の兵士8人を乗せられる容量があるため、丸一日戦えるレベルの物資が収容された

そうしてから、例の橙髪への質問タイムとなつた

「名前は？」

「……いきなり難易度高いですね……」

手足の鎖をジャラジャラさせながら溜息混じりの息を吐く

名前言つ事のびじが難易度高いんだろう、まさか本名が寿限無寿限無五劫の擦り切れ海砂利水魚の水行末雲来末風来末食う寝る処に住む処やぶら小路の藪柑子パイポパイポパイポのシューーリンガンシューーリンガンのグーリンダイグーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助とかではないだろうに

「…………いや……」

鳴いた

「…………ない……」

何が無いのか

「あげは……」

蝶？

「はい……ネアです、もつそれでいいです……」

ネア

その前の言い淀みが気になるが無視するとして、あまり聞いた事のない響きだ、少なくともこの近辺でそんな名前は無い

「あそこで何してたの？」

「…スニーキングミッショーン？」

「じゃあ、あそこで暴れてたのもあなた？」

「お恥ずかしながら…」

暴れてる時点^{スニーキング}で潜入活動ではない気もするが

そこまで話して敵意は無いと判断したのか、コリアナが鎖を外す。痕のついた腕をさすりつつ伸び

「何のために？」

「あー……それに関してはこちらからも質問があるんですが

レオンが帰ってきた。持っているのは大きめの地図で、他には何も

なし。情報収集といつてもそれほどたいしたもののは入ってこなかつたのかも知れない

ドアを開けて車内の状況を見るなり明へ向け親指を立ててきた、どういう意味だ

「あそこで作られたものが今どこにあるか知りたいんですけど」

「……どこへ？」

「海外沿いに東進する民間船がレーダーに映つたらしい。今偵察機を飛ばしてゐるが、さすがに民間船は撃沈できないからな、手は出せん」

だいたいの位置はここ、と地図を広げる

パラナを出てからそろそろ遠くには行つてない、これが内地のクルスクを目指しているならあと2日といった所

「本当なら陸揚げされた直後に爆撃したい所なんだが制空権の問題で無理だ。だからPMC中心編成の特務隊を組むんだが。興味あるか？」

「え？」

「正規兵じゃなくて傭兵だからな、1人くらい簡単にねじ込める。そつちが希望するなりこにこられるよつと見てみるが」

「ちょっと、まだ味方とは決まってないんだけど」

「敵ではないんだろ？」

それは恐らく間違いないが

目一杯詰め込まれた弾薬箱とレーシヨンパックを脇に整列させ、明もようやく腰を落ち着かせる。ストライカーの収容量は運転手合わせて11名で、余っている半分を物資積載に回している訳だが、ジヤベリンとステインガーにプラスしてこれでは積載量オーバーの気がしないでもない。少なくとも寝るスペースは無くなっている

「……ん？」

橙髪改めネアがこっちを凝視していた

「う、うひの顔を見定めるよ」

「あの、お名前は……」

「明、だけど」

「あ……違つた……」

何が

と、そこでふと気付いた、一いちばんまつたく名乗つていないと、ここに喉渴いてるんじゃないかと思い物資の中からインスタント

ミルクを取り出す。水に溶かすだけで牛乳になる優れ物だ

「おー、自己紹介

「え…ああそういうえばそうね

その場にいるのは6人、うちマリアンは睡眠中なのでいいとして、カップを5つ出して粉ミルクと水を注ぐ

しかし、女性比率高いなつちの隊

「ユリアナ

「レオンド

自己紹介を始めた連中にカップをひとつずつ渡し、それらの後ろを抜け車外へ、さつきからずっと仕事しているであろうエレナを捲す

ストライカーの下に潜つて絡まつた草を取り払つていた

「飲み物いるかー？」

「いーるー」

小さこのによく働くものだ、さつき倒れかけたとは思えない

何で未成年なのこんな所で戦争やつてるんだう

「やつぱり疲れた時は甘いものですね」

「やつか、そりやよかつた」

素で嬉しかったらしい、数分足らずで飲み干してしまった

カップを回収して車内へ戻る、どうやらネアの666分隊参加は肯定的な方向で進んでいるらしい。レールガンなんか追っているとなると国の特殊部隊か何かなんだろうか

しかしやつは見えない。今は迷彩服を着ているがそれはコリアナの予備で、本当に着ていたのは長袖のシャツっぽいのとハーフパンツという超私服なのだ。火器なんて持つてなかつたら民間人にしか見えない

話を聞くと、今は部隊編成をレオンが説明しているようだ

「PMCって国内の？」

「いや、アルメリア。昔の金持ちの私設軍が母体らしいが

「げ……」

PMCとは民間軍事企業の事で、まあ要するに傭兵派遣会社だ

それはそうと、コリアナはあの国に恨みでもあるんだりうか、露骨に嫌な顔をしている

と

「名前は確か…『星の知慧派』だつたは……」

インスタントミルクの飛沫が舞い上がった

「げふっ…ー」「ふん…ー」ツ……！」

簡単に言ひと、吹き出したのはネアで、直撃を受けたのは明だ

「ちょ…大丈夫！？体に響いた！？」

「いや違つ……あまりの奇襲に…」「めんなわ……」

勢い余つて激しく咳込んでいる

そのあと小声で何か呟いていた。聞こえた限りでは「解散命令はどうなつた」

「…………」

顔、洗つてこよつ

- 『アストラエア、機体に座標は入力されているか?』
- 「ああ、問題無い」
- 巡航速度と高度までHUDの数値を合わせてオートパイロットに設定する。そうすればしばらく操縦桿に触る必要はない。戦闘機パイロットも楽な仕事になってきたものだ、前の大戦では巡航するにも神経を使っていたというのに
- 『よし、全機の巡航状態を確認した、予定通りこれから任務を説

明する』

周囲を見回して味方を確認

左後方に僚機のF-15Cイーグル、TACネームはネフティスで、どこにでもいるようなお気楽パイロットだ。殺し合いという尋常じやない環境で少しでも楽観したいから皆そういう性格になるのかもしない

その更に後ろをF-16Cファイティングファルコン2機が追随し、逆に前方をラファールD2機が飛んでいる

合計6機の遙か後ろを管制機『アトラス』と、例のステルス機F-22Aラプターがついて来ているはずだが、戦闘機のレーダーは前にしか付いていないため確認できない。通信機から声が聞こえるのでちゃんといるのだろうが

『といつても今日は移動するだけだ、先程制圧したパラナの飛行場に着陸し、その後は状況によって出撃する』

パラナ飛行場は爆撃で穴だらけにしたはずだが、鉄板でも敷いたんだろうか

『飛行戦艦の中核となるレールガンがパラナを出てクルスクに向かっている事が明らかになった。これによりクランフォール全軍から一部戦力を抽出して追撃隊を編成、我々はこれに参加する』

『なぜレールガンを？弾道弾迎撃専用ならそこまで焦る必要もないでしょう』

『入手した敵軍資料に対地攻撃能力に関する記述が見られた、それも核を積んで、だ』

つまり核を迎撃するだけでなく核を撃つ事もできると

クランフォールもアルメリアから供与された小型戦術核を持っているが、何の工夫もないただの爆弾なのだ、巡航ミサイル程度には改修できるが、弾道弾を撃墜する相手にそんなものが効くとは思えない。そして音速の何倍も出るレールガンで先制攻撃されたら反撃すらも許されない

『急な編成なのでまだ部隊番号は付えられていない、だが『ハーキュリーズ』という通称を貰っている』

大袈裟な名前だ、そんなものミサイルにでも付けておけばいい

ハーキュリーズは『ヘラクレス』を英語読みしたもので、ある英雄の名前を関している。集団としての『ーズ』とかけたのはわかるが、戦争に華やかな名前など必要ない

結局は自己主張の押し付け合いなのだ

まあ、ついこの間まで自らが正義だと信じてやまなかつたのは認め
るが

「強行突破してぶつ壊しちまえばいいだろ、そこまで遠くはないん

だ

『やうだな、数十機のフランカーから爆撃機を守り切れるところの
ならそれでいい』

「…………」

なんぞそんなことなんだよ

『詳細はデータとして送っておく、答應なんだおこしてくれ』

「…………了解」

「ちょっと待つてください、すぐ持つてくるんで」

作戦開始まで残り2時間、都市内のホテルに荷物を残しているとネアが訴えたため、徒步で移動し現在ロビーで休憩中の荷物持ち要員明である

どこにでもあるよつたホテルだ、1万もあれば1泊できるだらう、政府が援助しているような風ではない。本当に職業はなんだらう、まさか好き好んでやつてる訳ではないだらうし

それから傷が勝手に塞がった件についても不明のままだ、魔法とやらが本当に実在するならそれで説明可能だが、クランフォールとの周辺国では伝えられてすらない、いや学校行ってないから詳し

くは知らないが。となると文化保存として残っているクロスフロン
ト周辺の出身という事になるが、それではこんな所で戦争やつてる
意味がわからない

しかし、魔法

「職業＝魔法使い」

「いやそんな高位なものではねーです」

後ろに橙髪がいた

「呪いみたいなもんですか？」

「解呪とかはできないのか？」

「現実の神父さんはそこまで万能じゃないので」

はい、とギター・ケースのようなバッグを渡された

かなり細長い、150cmくらいはある。「ゴツゴツした中身は銃と
予想したが、残りの荷物は違うサイズのバッグが2つと小さい旅行
カバン1つ

比重が崩壊してはいいかこれは

「何と言つか、重武装だな」

「うんまあそれに関しては自覚してんですが…これでも減ったんですよ」

ホテルからストライカーへ戻りつつバッグを少し開けて中身を確認所有者が言つにはショットガンと軽機関銃、この細長いのは対物狙撃銃らしい。セガールかスネークにでもなるつとしてるのか

装備していたSMG2丁と合わせて、対応可能な射程距離は数mから1km超えだ、こうなると一人で何でもやれてしまう

「あらゆる状況に対しても装備を変える事で対応してたんで。最盛期はブレードからワンス通つてハンヴィー経由でアパッチロングボウまで」

なぜ刀から始まり槍行つて車行つて世界最強の戦闘ヘリなのか

AH-64D（アパッチ）となるとアルメリア出身が怪しいが、あそこの兵器は堤防が決壊したかの如くクラシックフォールへ流れ込んできているのだ、ここにいる以上、出身と職業の特定には繋がらない

「……意を決して聞いてみるが、職業は？」

「…………」

沈黙した

「……その……」

「うん」

「広義的に捉えると従者……え、つまり私メイドっしゃいや普通に
ありえないし……」

「うとうとう」

「やもれもそれは昔の話で、金稼ぎすることを職業と叫ぶならば私は一アーチ……ああああそんなどつかの火炎女じやあるまいしきい……」

「うとうとう」

とりあえず定職についていない事はわかつた

「君は何でここにいるんだ」

「本当……何ででしょうね……」

常に戦争しないと死んでしまうような戦闘狂には見えないし、明確な目的を持つているようにも見えない

などと話している間に帰路のほとんどを踏破し終え、後は片側4車線の巨大幹線道路を残すのみ。もつとも、民間人は避難民として隣町へ大行列したため、車の存在しないただの広い空間だが

「でも、まあ、そうですね。生き続ける理由が欲しかったんですね」

「その幹線道路上で、静かな声が上がる

「もう落ちる所まで落ちちゃいましたから、そうなると世間がとても遠いものに感じてしまつて。だつたらこうこう救いようの無い行為は救いようの無い存在によつて行われるべきであつて、まつとうな人間は少しでも助かるべきだと思うんですよ」

と

思わず見入つてしまつよつた微笑と声で、橙色の”それ”は悲哀を訴えた

「…………」

人間には見えなかつたのだ、その思想、雰囲気、姿すべてがなぜそう思つたのかはよくわからない、ただ声が出なかつた

「なんて、何言つてんでしょうね私」

言い残して、早足にストライカーへ寄つて行く

「…………？」

今の違和感は何だったのか、文章としての意味以上に何か重みがあった

普通の人間ではないのかも知れない

まあ、とにかく今はあれに追いつこう

主要戦力内訳

・クランフォール

M1A1エイブラムス

AMX-30

AMX-10RC

M2/M3ブレッドレー

M 109 A6 パラティン

M L R S

L A V - A D

A A V - 7 A 1

ローランドミサイルシステム

M Q - 1 プレデーター

ラファール D

F - 15 C イーグル

F - 16 C ファイティングファルコン

A - 10 A サンダー ボルト?

E - 3 C セントリー

F - 22 A ラプター (1機)

・星の知慧派

メルカバ Mk 2~4

マガフ

ナグマショット

M 163

M 110

ハンヴィー

Su - 47 ベルクート (1機)

クフィル

・銀の黄昏

74式戦車

10式戦車

96式装輪装甲車

96式自装120mm迫撃砲

03式中距離地対空誘導弾

軽装甲機動車

OH-1

F-2A

Mig-1・44フラットパック(1機)

・傭兵

T-55

BMP-1

M113

ストライカーICV

何書いてあるかさっぱりわからん

「要は味方がいっぱいいるって事だよ。歩兵の数はまだわからんが、1個大隊は軽く超えるだろうな」

慣れとは恐ろしいものだ、エレナの暴走運転が普通に感じてきた

軽い休憩を重ねつつ移動を続け、現在午前5時の夜明け方、紐でふん縛った物資がずれないよう押さえつつ貰つてきたコピー用紙を眺め、死にかけのコリアナのためエチケット袋を作成中

「もうあんな醜態は絶対に晒さない——……

青い顔で寝転がりながら言つた

昨日まで膝を借りていたマリアンが狭いのを理由に助手席へ行つてしまつたため、頭はニアの膝の上。苦笑していたが、別段嫌ではなさそうだ

「……いいなあ…

「え？」

「あ……いや、うん、俺は何も言つていない

いや言つたひづ

と返した所でどうせ認めないだろうからスルーして、空気の入れ換えをするためハッチを開ける。いつの間にか味方が集まっていたらしく、戦車から対空車両まで一通り揃つていた。上空では部隊直俺のラファールと破壊神A-10Aが旋回中

「お……」

朝焼けまぶしい空の前方から青い機体が飛んできた。敵では無いようだが、クラシックフォール所属でも無さそうだ

「F-2だな、銀の黄昏か?」

「ああ、例のPMC?」

「またの名を『平成の零戦』」

「おおー」

零戦といつても戦闘機ではなく支援戦闘機、実質的な対艦攻撃機だ。外見はF-16をベースにしたためにそれと酷似、それ故『フェイクファルコン』や『バイパー・ゼロ』などの俗称がある。しかし侮る事なかれ、ぱっと見の外見以外すべてが違う。全体的に大型化し、翼の形状も変更、内装についてはほとんど原形が残っていない。対艦ミサイル4発という過剰な攻撃力もF-16には無い点だ

「ほり見えてきた、よくわからんが兵器構成が東矮だな」

道路の先に軍用車両の群れ。さつきの資料にも書いてある通りの74式、10式、96式その他もうろだ。民間企業がなぜあんな高価かつ最新鋭な装備を持っているのか

少し奥にももうひとつ集団がいる。あっちが『星の知慧派』か

「メインクライアントからの報酬と借りパクですよ。民間企業で社員の死亡が戦死者としてカウントされないとしても、貧弱装備じゃ色々と困りますから」

車内のニアが言つ

「そうして借りてきたのを『壊れた』とか『応急処置のパート取りに使った』とか適当に理由つけて返さないんです」

「ほう。だが何であんな極東の？想定使用状況と実情が噛み合つてないだろ」

「……サムライに憧れがあつたんじゃないですか？」

その集団に合流する頃にはタンカーが追い付いてきた

タンカーといつても船ではなく飛行機だ。中型の輸送機に燃料を満載したもので、戦闘機の空中給油に使われる。ここでメシを食つて交代役がやつてくるまで護衛を継続するらしい

ちなみにジェット機の燃料の主成分は、灯油

「確かにね、急加速急減速は大事よ、緩急の速度差がそのまま回避

率に繋がるからね。でも常時それを実施する必要は無いじゃない

「意図的ではないんですよ」

「だからその突撃本能がどうにかなんないのかって……」

「ヴァラキア人ですから」

「ヴァラキア人じや、しょうがないね」

なにせ宇宙まで突撃かましてしまった連中である

ノリ良く返してしまったコリアナが肩を落として車内に戻り、入れ代わりでマリアンが出てくる。今の今まで寝ていたようだ、よく眠れたなあの揺れで

「……」

草原に布を敷き武器の手入れを始めた

リュックに目一杯詰めてあつた弾薬が欠乏するレベルで撃ち続けたため、銃身内が真っ黒になつて機関部も傷んでいる。規模はどうあれ解体して掃除してグリス塗るしかない訳だが

「大丈夫か？」

「あと20000発は耐える」

いや銃ではなく

「問題無い、仕事はこなす

「やつか？」

「問題無い」

ならいいが

「敵が来るぞ」

「え？」

気付けば後ろにレオン、何を思ったのかジャベリンのミサイル弾頭を2発抱えている、特攻でもするのか

「今警報が鳴る、戦車を先頭に兵員輸送車の群れだ」

「規模は？」

「数では負けてるな、フランカーとファルクラムも飛んできてる上

敵と聞いてユリアナが飛び出でくる、依然として顔は青いが精神面でどうにかできそうだ

次いでエレナが運転席へ、マリアンは分解したMG4を車内へ放り込んでM2重機関銃を握る

「やりますか

アンチマテリアルライフル抱えて出でたのがネア。全長140cmのバレットM82は装甲車対策だらう、戦車には勝てないが兵員輸送車には天敵となる

ほどなくしてサイレンが鳴り始め、上空のラファールとF-2が牽制をかけに去っていく。地上も慌ただしくなってきた

「じゃあ支援射撃頼める? 車両隊は前衛回って、そのオヤジは対戦車戦準備」

「おひ。つか狙撃は俺の領分なんだがな……」

「おひ。つか見た事無いが
撃つてるとこ見

敵機来襲の報を受けてからアフター・バー・ナー点火し、マッハ2で味方部隊上空を駆け抜ける。敵はT-72とT-80の混成で自下エイブラムスと交戦中。PMC所属のメルカバと10式は両翼に大きく展開して鶴翼体勢、挟み込むまでエイブラムスが耐えられるかといふと、微妙な所だ

普及型のT-72とは違い、ハイエンドのT-80はエイブラムスとて圧勝は得難い。後方の自走砲と航空隊の頑張り次第だろう

『フランカー6、ファルクラム6。うちファルクラムは爆装している、味方へ近付けさせるな』

「了解」

味方はPMCのF-2、クフィル合わせて総計11機。その内でフランカーに勝てる機体はイーグル、ラファール。4対6だ

勝てない筈は無い

「敵機捕捉後アムラームはオールオフ、それから突っ込む、自分の判断で交戦しろ」

『ウイル』

2番機ネフティスから返答が返り、下の戦闘を飛び越えた

アトラスとのデータリンクもありレーダー自体にはもう映っている。後はミサイルの射程まで近付くだけだが、既に友軍が格闘戦を始めてしまっているため、タイミングは計らないといけない

「連中一旦離れさせろ、撃つぞ」

『わかった』

距離80km、アムラームミサイルにとっては十分すぎる距離だ。イーグルに装備されているアムラームは4発で、ネフティスも合わせて8発。敵8機に対し同時攻撃を仕掛ける

といつても4発一気に発射する訳ではなく

アムラームの誘導方法は戦闘機からのレーダー照射で行うセミアクティブ方式、ミサイル自身のレーダーを使うアクティブ方式、プログラムに従つて単純にまっすぐ飛ぶ慣性誘導を組み合わせたややこしい誘導になつてゐる

誘導するだけならミサイル自身のレーダーのみで十分なのだが、いかんせん小さいために射程が短く、それを補つために戦闘機のレーダーで近くまでエスコートしてやる事になる

「オールオフ！」

まず1基田を投下する

ロケット点火したアムラームが急加速を始め、機体のレーダーから目標を指示してやる。進路を微調整しつつ飛んでいった

後はミサイル自身が搭載するレーダーで追跡して貰い、機体からのレーダー照射は止め次を投下する

そのあたりで味方機が一斉に飛びのき、敵機も回避行動に入った。命中率は、まあ2機落とせればいいほうだろう

もともとこれはファイアアンドフォーゲット能力（撃つたら忘れる）

獲得のための誘導方法だ、同時多目標交戦は副産物に過ぎない

従来の中距離ミサイルはセミアクティブホーミングのみで、ミサイルが命中するまで”前方にしか照射できない”戦闘機のレーダーで敵を捉え続ける必要があった。つまり誘導中は回避運動が取れない事になり、他の敵から攻撃された時点で攻撃失敗となってしまう

それをミサイル自身にレーダーを積む事で克服したのがAIM-120『アムラーム』。一定範囲内に入った時点で誘導中止、他にかかる事ができる。別に一斉発射するための機構ではないのだ

つっても接近後は格闘戦になる事がわかりきってるこの状況、重たいだけの中距離ミサイルを残しても無意味な訳で

『1基がフランカーに命中、反応ロスト。ああ、もう1基、両方ネフティスのものだ』

「ち……」

こちらの命中はゼロ。2番機より戦火が低い隊長といつのばどいなんだろう

『調子がいい、今日のヒースは貰いますよ』

「やれるもんならな

マッハ2のまま飛んでいたため敵はもう目の前まで迫っていた。ア

ムラーム回避で体勢を崩したファルクラム1機にF-2が取り付き、短距離AAM（Air-to-Air Missile）でエンジンを停止に追い込む。数秒で機体は爆発してパラシユートがひとつ残った

あつちは奴らに任せておけばいいとして、最優先で排除するべきはフランカー4機。認めたくはないが格闘戦能力に関しては圧倒されているのだ、基本的に長引いた分だけ勝率がなくなると考えていい

『ネメシスがアムラームを発射、30秒後だ』

「つ……」

そういうえば、レーダーにまったく映らない猛禽類が1機紛れ込んでいるのを忘れていた

データリンクとIFFが正常動作していれば友軍のレーダーには映るのだが、アレが空軍に編入されてまだ2日、更に何故かパイロットがPMC銀の黄昏所属で、システム調整が間に合わなかつた

よつてステルス機F-22Aラプターは管制機からの情報提供を受けられない状況にある。まあそんなもの跳ね返して有り余る機体性能であるし、何より”敵と環境が同じになつただけ”だ

『退避!』

機首を思い切り引き上げ上昇に移る

飛んできたアムラームは1基のみで、射程ギリギリからの発射らし

い、ロケットエンジンは既に燃え尽き慣性で飛行していた

ただ、1発だけといつ事は極限まで命中率が高まつてゐるといつ事である

最終的にフランカー1機に命中し、機体を鉄屑と爆煙に変えた

敵機残り8機

『1Jのまま継続的に遠距離攻撃を行う、一気に畳み掛ける』

「…」「解」

ラプターのコンセプトは『ファーストルック・ファーストショット・ファーストキル（先に見つけ先に攻撃し先に倒す）』であり、気違ひじみた機動性を持つてはいるものの、ステルス効果が削がれる格闘戦にわざわざ参加する必要もない。だから搭載兵器も中距離ミサイル中心になつており、接近戦は任せているのだが、何と言つか

負ける気はなくなつたものの、同時に無理して氣張る氣もなくなつた

この状況下で歩兵がやるべき事は車両隊を突破してきた敵歩兵と歩兵戦闘車、兵員輸送車の処理であり、そのためには遮蔽物を作らなければいけない

簡単で素早く作れるものとしたら、土嚢積み上げか塹壕掘るか

「どうひじてันのスラップかよー。」

「つべこべ言わずに早く掘れ！！」

よくこんなもん用意してたなという速度でスコップと土嚢袋がデリバリーされ、明がぶちまけた土をユリアナが袋詰めしていく

ネアは少し離れた場所で機関銃据え付けを手伝っていた。その速度が尋常ではなく、仕事を奪われた正規兵が渋々穴掘りに参加するといつ有様

「ほんとに何なんだろ? なあれば……」

「いいからもう土よこしてほれほれ」

「おばあちゃんか」

ひたすら掘つて、膝まで入る穴が横1メートル完成。他人の掘つた穴と繋げて塹壕とし、土嚢で高さを補強する

「おいこれ使え」

レオンが何か持ってきた

ずんぐりした形の銃に3脚が付き、右横に大きい弾倉が引っ掛けかれている。よく見ればストライカーの予備兵装として初期装備されていたもので、MK19擲弾発射機、いわゆるグレネードマシンガンといつやつ

「補給車は退避しちまつたから補充無しで頑張ってくれ」

「120発も必要無いと思うけどね」

コリアナがそれを土嚢へ据え付けにかかる。予備弾倉は2つ、1箱40発入りだ。1発の加害半径15mで、遮蔽物のない草原だと恐ろしい威力となる

その頃には戦車戦も一段落し、T-80が鶴翼の包囲から離脱していく。味方戦車は一部が兵員輸送車へと取り掛かり、陣形を維持したまま待機。代わりにMLRSがランチャーを天に掲げる

MLRSとは『マルチプル・ロンチ・ロケット・システム』の略、普通は『マルス』と呼ばれるものだ。発射後分裂するロケット弾12発か大型対地ミサイル2発を搭載可能

数台まとまって一斉発射すれば、局所的に死の雨が降る

「なんでこんなだだつ広い場所で仕掛けて来たんでしょうかね」

ネアが戻ってきた

塹壕に隠れつつバレットを構え、スコープで敵軍の様子を見る。こちらへの到達はもう間もなくといった所

塹壕掘る時間があつたこつちはまだいいが、向こうは車から降りれば完全な無防備なのだ、数で勝っているとはいえた海戦術できる程でもない

「別動隊が回り込んでるとか?」

「レーダー」に反応は無いし、IJの地形じや奇襲は成立しないぞ

「…海から艦砲射撃が飛んでくる」

「海軍がこんな所まで進出してるとは聞いてないな」

「……大規模な航空支援…」

「それはまだ可能性あるが、そつなるとレールガンが手薄になるから増援要請して……」

「…モウココからおひきはなはサイル撃つてろー。」

「なんで怒りにやならんのだ」

言いながらジャベリンミサイルが射出された

まず発射機の機能でミサイルを打ち出し、それからロケットモーターに火がつく。ファイアアンドフォーゲットのジャベリンは一度発射してしまえば特にやるべき事は無い

「撃ちまか」

明の隣でバレットが吠え始め、遠くでもTOWミサイルやらニーガンやうが発砲を開始。典型的な防御戦闘が始まった

敵の対応は、機関銃の射程ギリギリで進撃を止めミサイルを撃ち返していく。弾が切れるまでしばらく維持するつもりだらう

と

「ぬあつー？」

ズドンーーという爆音、数十メートル前方で火炎の花が咲く

それを皮切りに各所で爆発が発生、うちひとつが塹壕の一部を吹っ飛ばし、弾薬に引火したらしく花火のように弾が弾ける

擬音で表すなら、どんぱらぱらぱら

「榴弾砲…？ちょっとサンダー・ボルト何やつてんのーー」

「いやせつせから頑張ってるんだがなあ…」

遙か遠方にいるであろう自走砲に群がっているのはA-10Aサンダーボルト?。とつぐにミサイルは撃ち尽くしていたが、アベンジヤー30mmガトリングによる劣化ウランの雨が敵車両を粉碎していく。A-10Aも相応の反撃を喰らっているはずなのだが怯むそぶりを見せない、というか完全に無視していらっしゃる

「なにぶん数が多くてな、増援は呼んでおいたんだが」

「どんな増援よ」

「巡航ミサイル15発、状況に応じて追加有り」

「…………あつやう…」

ジャベリンがもう一発飛んでいく

白煙を引きながら敵陣へ突っ込んだそれは歩兵戦闘車1両にトップアタックを仕掛け、天蓋ぶち抜いて爆発させた。防御側といふ事もあってか相対的にはこちらの優勢、ただし数では未だ負けている。このまま続ければ勝てるだろうが、敵陣がじりじり近付いて来ている気がしないでもない

榴弾砲の攻撃も続いているし、戦車隊の結果次第では敗北も有り得る

「ストライカーは？」

「少々突出氣味」

「なら下がらせて、もうすぐ突撃がまされそうな気がする」

彼我の距離1km、射程が足りてるのはミサイル系とM2重機関銃、ネアのバレットも攻撃可能だが、いずれも近距離では取り回しが悪くなる。そうなると取つ組み合いの乱闘戦になってしまふのだが、数で負けている以上それはまずい

要点は到達される前にどれだけ削れるかだろう

「圧倒的に遮蔽物足りてませんよ。クレイモアとかねーんですけど？」

言いながらネアが弾倉交換を始め、12・7mm徹甲弾の空薬莢が転がる。小銃用のものと比べると気違ひなほど大きく、対人兵器ではない事を全体で表現していた

「どうかそつちは武装変えなくて大丈夫?」

「いえ、銃身の耐久度上げてあるんで格闘戦まで対応できます」

「.....」

どうこう事だ

『アストラエア、ネフティスが後ろにつかれた』

「ツ…何やつとんだあのアホは…！」

急速旋回を続けながら一瞬だけレーダーを見、フランカーに追い回される僚機を確認。すぐに前方の敵へ視線を戻す

格闘戦を始めてからまだ数の変動は無く11対8のまま。ラファールが2機がかりでフランカーを追い込んでいるが、結果イーグル隊がタイマン勝負させられる羽目になり、性能面の問題から徐々に形勢が傾きつつある

まず根本的な格闘戦能力が違うのだ。こっちが180度(反転)しているうちに向こうは270度旋回してしまう、単純な尻の追い合い(ドッグファイト)で勝てるはずがない

「スパイナルダイブ…！」

『やつてます…!』

まずエアブレーキを起動。400ノットを示していた速度計が一気に動き始め、失速警報が鳴りだした。そこから思い切り操縦桿を手

前へ

「ぬ……」

イーグルが落下していく

上を向いた機首はさつきまで取つ組み合つていたフランカーを捉え、数秒でロツクを終わらせ短距離AAM点火

赤外線誘導のサイドワインダーはアムラームのようなややこしい機能は無い、エンジンの排気熱を感知して勝手にホーミングしてくれる

「次！！」

今のは時間稼ぎだ、どうせ当たるまい。無理矢理機首を下に戻して速度を得、飛行に戻る。問題のネフティスはぐるぐると旋回しながら降下、じつちよりも低空にいた。決死の反撃機動も軽くいなされ尻につかれたまま

「EUR!!

『了解！』

こちらは簡単だ、前方の敵を全速で追いかければいい

対しネフティスはハンマー・ヘッドを組み合わせたインメルマンターン、つまり減速しつつ操縦桿を引いてそのまま反転、じつちとすれば違つ

反応した前方のフランカーも減速し、しかしハンマー・ヘッド気味の

動きに騙され反転までは至らず、機首を真上に向かたコブラ状態でネフティスを見失い、無防備な背中を晒していた

「落ちるやああああ！」

M61バルカンが歯医者みたいな音を出し始める

発射ボタンを押してから弾が出るまで約0・2秒、毎秒100発前後で20mm弾がぶちまけられ、フランカーに殺到、水色の機体を蜂の巣に仕立て上げた

『クリアーーー！』

ポン！と、後ろのフランカーも爆散する。ネフティスのAAMが仕留めたようだ

ラファール隊も最後の1機を片付け、フランカーは全滅

『敵機撃墜を確認。各機余力はあるか？』

緩く旋回しながら反転し、ネフティスが帰つてくるのを待つ。残弾はサイドワインダー3発とバルカン700発ほどで、残ったファルクラムを殲滅するくらいなら問題は無い。高機動なのは変わらないとしてもフランカーほど面倒ではないのだ

『まだ行ける、このまま突っ込むぞ』

『いや違う、そうじゃない、レーダーを見ろ』

「あ……？」

視線を下へ

そこには新しい反応が2つあり

『S U - 35… フランカー E 1だ』

ミサイルアラート

「ちょ……待て待て待て待て……」

発射されたミサイルは1機2発ずつの4、向こうのミサイルはアムラームのような小細工をしていないため、4発すべてがこっちに向かってくる事になる

「E C M ! !

『今やつている』

あれはレーダー誘導、電波を使ってロツクされている。ならそれと
はまったく関係無い電波を流して妨害してしまおうというのがE C M

空中管制機のバカでかいレーダードームから出る電波は生物の生命
活動にも影響を及ぼす程で、数百キロ離れたここにもかなりの電波
が届いている

ただ問題なのは、電波妨害が来るのは敵もわかりきっているという事

『あ……駄目だ……』

「来る前から諦めんなよ！…」

レーダー照射を邪魔されないのであれば、セミアクティブレーダー ホーミングより命中率が高いミサイルはステインガー以外存在しない ECMが効かないのであれば今更チャフ撃つても無駄だろうし、あとは自力で回避するしかない

『来るぞ…』

視界が弾体を掠めた

「ち…ッ！…」

思い切り機首を下げて速度を確保し、ミサイルの下に潜り込む

1発目はそれで回避

『すいません落ちます！…』

「はあ！…」

ネフティスのキャノピーが弾け飛んでシートが射出された

操縦士はいなくなり、残った機体にミサイルが殺到する

爆炎、一拍遅れて衝撃音

100億円がスクランブルになつて落ちていく

「戦闘前の『今日のエースは』のくだり撤回しろよーー。」

撃墜数3なのでエースは確定だろうが

大きいバレルロールで2発目を振り回し、命中直前でひねつてやり過げると、目の前をミサイルが走つていった

『敵ミサイル発射、次は4基だ』

「ふざけ……！」

1機に減つたため残りすべてこっちに向かっている

本来ならこのあたりで『駄目だ』と言つべきであつて

「脱出する……」

『いや待て！』

と

ミサイルアラートがいきなり停止した

勢いを失ったミサイル4発はあらぬ方向に飛んでいき、やがてレーダーから消失

『よし、間に合ったな』

「……あー…」

世界最強のつるべた戦闘機がいるのをまた忘れていた

本体は映っていないのにアムラームミサイル2発だけがレーダーに表示されている

よーく目を凝らして前を見つめると、ひらべつたい最新機が1機

『臨時編成としてネメシスをアトリア隊に編入、以後バディを組め。位置情報は無線で伝える』

「…」「解」

『アトリア』は自分の隊の名前だ。普段は固有のTACネームで呼び合っているが、部隊として呼ぶなら『アトリア1』『アトリア2』

となる。まあアトリア²は今パラシュートでスカイダイビングしているが

この場合はF-22アラプター、ネメシスがアトリア²に取つて代わる

『奴らの後ろにも怪しき反応がある、注意しろ』

「まだ来るのかよ?」

『解析中だ、少し待て』

とにかく、今はフランカーの相手をしなければ

前方で始まつた空戦に突つ込むべく、スロットルを押し込んだ

まず陣形を確認する

自分らがいる塹壕が敵の真正面に位置し、ぽつぽつとある岩や装甲車に隠れて塹壕の援護位置に付いている。少なすぎる遮蔽物で整えた防御陣形にしてはよくできていたが、とても十分とは言い難い

対する敵軍は歩兵戦闘車の後に隠れながら縦長に固まり、最大速

力で突つ込んできていた。既に距離300メートルまで詰まりなおも接近中

前方で行われている戦車戦だが、MLRSの一斉発射がロケット弾のスローを降らせ、T-80ともどもほとんどがスクラップ化している。未だに取つ組み合つてるのはエイブラムスと、各PMSの主力戦車のメルカバ Mk4と10式のみで、それ以外のやや旧式な戦車はこちらへと向かつていた

恐らく的の戦法としては、『すれ違い様に叩き込むだけ叩き込んでそのままトンズラかませ』だろう、そのまま乱戦などといつ削り合いに発展する訳がない

「うわあくんなこつあくんなこつあくんなああああッ……」

コリアナの照準によりMk19から40mm擲弾が毎分40発飛び出し、敵陣にボコボコ穴を開けていく。弾が120発しかないでこのままだと3分しかもたないが、敵との距離はあと200メートル、3分でも十分だった

「防御砲火だ、とりあえず撃つとけ」

「了解」

この際大事なのはとにかく派手に撃ちまくる事である。これは相手をビビらせる事に意義がある

SG552の透明な弾倉がしつかり装着されている事を確認し安全装置を解除、最初の1発を薬室に送るべくレバーを引っ張つて装填する

サブマシンガンに特性の似ているSG552だが、遠距離でも申し分ない性能を發揮してくれる。ただ装備されているのがダットサイトという近距離用照準器なので、そっち方向にばらまく以外に意味を成さない

後方にあるストライカーのM2も合わせ弾幕形成、M82の狙撃にレオンも加わって撃ちまくっているが、派手なものに囲まれていてどうしても地味に見えてしまう

そもそも狙撃銃はこんな派手な戦闘に使うものではなく、少人数部隊の支援や要人暗殺に用いられるべきものだ。ジャベリンを撃ち切つてしまつたためそうするしか無い訳だが

ちなみに観測手はエレナ。車内から無線で情報を送っている

「重つてえなあ……」

残り100メートル、PSG-1を捨ててスコープオンに持ち変える

今の武装にあまり気に入っていないらしい

「それ自分で選んだんじゃねーの?」

「まあ私財で買った私物だが、カタログスペックで選んじました点はあるよな」

迫力だけならPSG-1はM82に匹敵している。名前を和訳すると『1号精密狙撃銃』となる通り、セミオート機構を維持しつつ命中率を追求した銃なので、重量が増加するのは仕方ない。重ければ

重いだけ反動を吸収してくれる

「ＳＳＭ接近……」

ネアが叫んで、ストライカーからチャフが発射される。同時に急発進をかけて突っ込んできたミサイルを回避、弾頭は草原に突っ込んだ

「ツ……！」

巻き上がった土に襲われ一時的に射撃停止

最初に復帰したのはユリアナ、次いでネア。その頃には敵陣の先頭が塹壕中心部に突き刺さり、土嚢と人が蹴散らされていく

「ていうか……まあいんじゃないのかこれは……」

「な……何が……」

「そろそろ巡航ミサイルが到着しちまつ」

聞いて、ネアがスコープをあさつての方向に向ける

「どっちですか」

「方位325」

大まかに言つと北西だ

Mk19とM2の大火力で装甲車を追いつめている間に狙撃銃2丁

で搜索が行われ、明は生身の人間を探して照準を合わせる

すぐに重機関銃を乱射する敵兵を発見。距離50メートルほどあって詳細がわからないが、ダットサイトの点と合わせて引き金を引く。5・56mm弾が数発飛び出し、目標の射手は車両から転落した

やっぱ死んだんだろうか、あれは

「見つかったか？」

搜索を始めてから十数秒

ネアが顔を上げ

「死の鳥が見えた」

ユリアナがMk19を抱き上げた

「総員退避―――ッ！！！」

分隊全員と、近くで話を聞いていた兵士数人が一斉に塹壕から脱出する

僅かな差で全体に指示が飛んだらしく、ストライカーに駆け込む頃には連隊全体が退避を開始

「つかまって……」

いつも増した急加速でドリフトを決め後方にぶつ飛んでいく。巡航ミサイル到着前に可能な限り遠ざからなければならぬ

種類は恐らくAGM-129、B-52から発射されたものだ。アルメリアから購入した後に独自の改修を行い、搭載弾頭をクラスター爆弾としている、1基あたり10個ほどの爆弾に化けるだろう

それが15基となると、あたり一帯が耕される訳で

「とにかく撃ちまくれ！！」

上からマリアンに言われたため、開けっぱなしの後部ハッチからSG552を向ける。余ったスペースはコリアナのSCARが占領

かなりでかい発砲音が車内で反響する

「着弾10秒前だ！」

ボゴン！と、ミサイルの直撃を喰らった味方車両がこっちに飛んできた

「ひああ！？」

ミニガン装備のハンヴィー、積んでいた弾薬を弾けさせつつストライカーに衝突し、衝撃で左輪浮揚

「あ、——っ！..」

「ぐわああああーー！」

ユリアナに押し潰された

その頭上を飛行機みたいな形状の超長距離対地ミサイルが通り過ぎ

数秒で爆弾が地上に到達

今度は爆風で後部が持ち上がる

「いやああああー!?」

絡まりつつネアに衝突、勢いそのままレオンを奥まで叩き付けた

盛大にスリップしつつもなんとか停止まで持ち込む

「アツー……！」

通信機」と玉突きされたレオンが呻いている

それを尻目にマリアンが銃座から静かに降り、外へ出た

今の爆撃で敵は半壊、生き残った連中も撤退を始めていて、まだ続ける様子は無い

空ではまだ戦闘が続いているが

「だ、大丈夫か！？」

「…俺はもう駄目だ…最後に…聞きたい事が…」

「なんだ！？」

角ばつた通信機は痛かつたらしい、レオンは本氣で死にかけという有様

最後の力を振り絞り、言つ

「どうだった…？」

「モチのようだつた…！」

すごい勢いで蹴られた

ぶつちやけて言ひと、F - 15でSu - 35に勝利できる可能性は雀の涙ほどしか無い、基本的なスペックがまるつきり違うのだ

しかし現状で言えば、それを遙かに上回る性能である最新ステルスマジック機に、ファルクラムを片付けたラファール、F - 16、F - 2、クフィルがフリーとなつてあり、その実10対2で袋叩きしている最中だった

「で、その状況でなんでもまだ片付いてないんだろうな」

『気にするな、それは誰にもわからん』

いつなつたらもう技術云々の話ではない、取り囲まれ叩き落とされ

るのみ、の筈なのだが

今まで味方が撃つた弾薬はサイドワインダー4発とバルカン数百発、そのすべてが完璧なタイミングで発射されていた

それをあのフランカー、力任せに急旋回してかわしてしまつ

『少し計測してみたが加速力がかなりの数値だ、恐らくエンジン換装を施されている』

「シザースから回避機動取つてそのまま垂直上昇しても墜落しないエンジンってどんなだよ」

『まあ?』

片方のフランカーにラファールが食いつき、数秒食らいついてあつけなく引き離される。間髪入れずのF-2による挟み撃ちも軽くいなして上へ昇つていく

上空にいるといふ事はそれだけ多くのエネルギーを持つてゐるといふ事である。一気に降下すれば瞬時にスピードへ変換されるし、何より相手より上にいるといふのはそれだけで威嚇になる

本来そういうエネルギー戦闘はF-15の領分なのだが

「ま、味方が多いなりどつにでもなるわな

メインに据えるべきはやはりF-22Aだらう。レーダーに映らないといふのは圧倒的なアドバンテージになる

「おこ、ネメシスに指示出してやれ」

『むへなう回線を中継する、つこでに血口紹介したらどうだ』

何を紹介しろといふのか

イーグルの後方を追従するラプターを見る。コクピットには人影が見えていたが、耐Gスーツとヘルメットのためどんな人間かはわからない。ただ体格はかなり小さいようだ

そういひじいたら、じつちに氣付いて手を振つてきた

「.....」

手を頭に添えて

ウツーウツーウマウマ

なんだあいつ

「.....あー...、いらっしゃアストラニア、聞こえるか?」

意味不明ながらもとりあえず話しあげてみる。ちゃんと聞こえたらしく、向こうはコンソールを操作してノイズを排除

『うそ、聞こえる』

結果、ロリボイスが帰ってきた

「おー誰が小学校に繋げと言つた」

『繋があるな、ちゃんとネメシスに繋がつて』

コンソールを食い入るように見て周波数が間違つていない事を確認、それから視線をラップターに戻す

「……ネメシス、お前いま何やつてる?」

『ウマウマ』

戦闘機乗つてゐる、と答えて欲しかつたのだが

「最近のアマビツのはいんなもんなのか?俺がおかしいのか?」

『まあこいつにとってはお前も若さがる部類だがな』

それを言われると反論できない

とにかく、戦闘に支障はなさうなので言いたい事は後で言つ」と
にじよつ。田下の問題はフランカーだ

「アトリアーからアトリアーへ、連中の真上に陣取つて押さえ付け

ろ、可能なら落とせ』

『アトリア2、了解』

ラプターが昇つっていく。元々レーダーに映っていない事もあつてすぐ見失った

これだけで準備は完了

「さあ、モグラ叩きだ」

エンジンパワーを上げつつ旋回し、戦闘機の群れへ突っ込んでいく。丁度クフィルが追い回されている所で、救援がてらフランカーを後ろからロックオンした

距離が遠い事もあって目立つた回避行動は取らず、クフィル追跡を継続してミサイル発射、白煙が伸びていく

フレアを撒き散らして回避行動に入り、ミサイルはクフィル側面をすり抜けていった

『フローラ隊はアトリア隊アストラエアの支援。残りは下から突き上げる』

フランカーは加速力は凄まじいものの、代わりに最高速度が犠牲になつているらしい、比較的簡単に追い付けた。その点に関してはラプターと同じだ、あれはアフター・バーナー無しでマッハ1・7出るが、最速でも2・3までしか上がらない

まああれは『これ以上は空中分解の危険がある』という理由だが

ロックを継続したままフランカーの後ろを捉え、もう1機のフランカーがイーグルの後ろにつく。そのまた後ろからラファールが追跡し

『よし、やれ!』

下を塞いで、追い込んでやる

今までずっと上に逃げていたため特に疑問も持たなかつたのだろう、当たり前の如く上昇を始め、そこにステルス機が隠れているなど露とも思わず編隊を形成

3秒後、組んだばかりの編隊を慌てて解いた

『フォックス2、フォックス2』

サイドワインダーがラプターの弾薬庫ウェポンベイから発射される。イーグルと違つて短距離AAMは2発しか積んでいないため、今まで撃ち尽くした事になる

フレアと旋回でそれを回避し、急加速で振り切つて撤退に入ろうとする。だが加速力でもラプターは負けていない。どんだけ高性能なら気が済むんだよと思ったが、資料上では『対地攻撃能力を排除して空対空戦闘に特化した』とあつた気がする。排除したといつても汎用爆弾とディスペンサー兵器を積めるため、何も積めないイーグルより遥かに高い

『……追い付けない』

バルカン撃ちかけながら言われても

やがて言つた通りに引き離され始め、20mm弾数発を当たあたりで諦めてしまった

『逃げられたか。まあいい』

「どうする？ 燃料がそろそろやばい」

『そうだな。増援を送る、お前達は帰投してくれ』

言われて、機首を西へ向ける

今田は1機撃墜。未使用のミサイルが3発あるため、上々の戦果と言えるだろう

れて

帰つたら3機撃墜のエース様に罵声を浴びせてしまうことよう

crawling chaos 5 (後書き)

なーんか、作風がいつも通りになつてきやつたな。
爽やかさ + で行きたい今日この頃。

「終わったか？」

「そうみたいね、友軍も帰っちゃったし」

青い敵機と灰色メインの味方部隊が取つ組みあつていてるのをレーシヨン広げながら観戦していたが、ひらべつたい機体のミサイル発射を最後にお開きとなつたようだ。敵は逃げ、味方も一斉に帰つていつた

他の連中も対空部隊を除き遅めの朝食か負傷者の手当て中で、しばらく移動再開する様子は無い。飯はまざいが一応落ち着いていた

「詳細不明の反応がまだレーダーにのこつてゐるんだがな」

「どんな

「だから詳細不明」

ケイジヤンライスだか何だかよくわからないレトルト食品をトレーに開けつつコリアナとレオンの話を聞く

「……」

後方、マリアンがトレーにモラセスを振り掛けていた。それはいい、今に始まつたことではない

その隣、ネアが青い顔でそれを見つめていた

甘つたるいビーフステーキなんぞ見せられたらそうなるのは当たり前だが、よく見ると凝視しているのは瓶の方

ラベルには何かタニシがのたくつたような文字が書かれている。全体の雰囲気を考えても国産ではなさそうだ

そうしていたら、ネアがこつちに気付いて寄ってきた

「つ……」

ふわつといい匂いがする

微妙に甘い、しかし爽やかな感じ。ああこれが女性フロロモンというやつかと思う頃には顔が熱くなり

激しく首振りして邪念を排除

「外国製の糖蜜モラセスって、密輸入品しか存在しないはずなんですが」

「……え…？」

密輸入

税関も検閲も無視してひそかに運び入れる事。もちろん犯罪

「結局は砂糖作った後の残りカスですから、衛生面に問題があるんですよ。後進国の中なら特に」

「……あの奇怪な文字はどうの？」

「赤道直下のセントルバトスってとこのもんなんですが、あれ確かに糖度世界一でギネス載ってる代物だと」

「……え…？」

「一般的なグラニュー糖の数百倍、砂糖を作った副産物の糖蜜にそ

の砂糖ぶち込んで更に煮詰めるとかマジキチな事やつてる会社の…

…」

「ちよ、ちよちよ待った待つた、あの黒い液体について言及するの
はやめよつ、あつとあれは俺らが関知してはいけないものなんだ」

「超絶甘党のクーさんが絶叫悶絶した代物なんですよー?」

「誰ー?」

その後正気を失ったネアを落ち着かせるのに数分

「……寝てるな

「寝てますね」

色々考えてしまつ前にマリアンゴと視界から排除してしまおうとス
トライカーに移動。車内に入つてまず見たのは毛布に包まるエレナ
だつた

「数時間」とに休憩したとはいえ徹夜で運転していたのだから当たり
前だが、床で寝転がる事もないだろうに

いたたまれないので、予備の迷彩服を出して下に敷いておく

「ハーネル・レディ・トウ・イート。通称MRE……」

それはこのレーションの外前だ

内容物のほとんどがレトルト食品、A5コピー用紙よりちょっと大きいビニールパックに1食分が積められており、同封の加熱剤で温めればすぐに食べられる。1日3食をこれで過ぐすと3750calの熱量を補給可能

どの角度から見ても戦闘糧食、王道中の王道である

「戦地で現地民にばらまかれた回数20・1、各国籍軍での評価最も低レベル、極貧国ではこれが通貨代わりになる」ともあるところ、…

「そんなすごいもんなのこれ」

「す」「こいつーか、生産性やら携行性やらが高水準でまとまってる代わりに味が残念なんですよね。あまりに流出しまくるんでネットオークションで普通に手に入るっていう」

「ふうん」

何と書つかやけに詳しい

先日も思つたが、どこかの特殊部隊に所属していたとしか思えない武装対応幅と射撃精度である。NPCにも精通しているようだし、軍事に関しては万能と言える

傭兵業が長いならそれも有り得るだろ？しかし傭兵では無かつたよつだし、何より歳食つてゐるよつには見えない

前の職業はメイドだとこつし

ケイジヤンライスを口に運ぶ。汁がよく染み込んでくつた

「……レーショーンの品評会とかやつたりするのか？」

「やうひとゆつて開催される訳ではねーんですがね。多国籍軍が編成されると自然発生的にレーショーン交換会が起きるんですよ。私が知つてゐる限りじゅうトロント紛争の際に、優勝したのは東矮だつたかな

「これの開発元は？」

「最上位」

ですよね

しかしあまり詳しい、その場にいたよつな詳細説明つぱりでその後もネアは話し続ける

と云ふが、実際いたのだから、せつと

「国民性を反映してると云ふが、ジャンクフード万歳の国ですから、いつなるのは仕方ありませんね」

クラッカーにピーナッツバターを塗って食す。かなり甘い

「クラシックフォールは料理は世界最高峰なんですが、これ（MRE）の影響受けちゃつてレトルトオンリーでなんとももつたいない」

洋ナシのシロップ漬け、やはりよく染み込んでいてシロップの味しかしない。全般的に食感を求めたら負けのようだ

「やっぱ缶詰なんですよ、そりや『ハミ』として残りはしますが、直火であつたため豚肉缶に勝るものは存在しないと私は」

トッピングとして小形のタバスコ瓶が付いていた。何にかければいいんだか、といつも瓶はいらないだろ瓶は、多過ぎる

「ちょっと、聞いてます?」

「え?」

お湯を沸かしてインスタントコーヒーを2つ。途中でエレナが起床したためミルク追加

「…………昏下がりの親子？」

「いや、年齢差2つしか無いんだが」

明現在20歳、エレナは18歳。この差は通常同年代に属する

ネアはどうかと視線を向けたが、速攻で顔を逸らされた

露骨に年齢を隠したがるのは20～30代女性と聞くが

「それで、どうかしたか？」

「詳細不明機がすぐ近くまで来てるナビ雲の上なのでやはり詳細不明、注意されだし」

車内に入ってきたコリアナはまくカップを取つて紅茶パックを投入、

残っていたお湯を注ぐ

「なんか知らないけどだいぶ巨大らしいわよ、1機だけだしどうせ偵察だらうけど」

「巨大？」

そういえば、ジェットエンジンの音がかなりの音量で流れているようだ

「飛行戦艦？」

「まさかあ」

確かに飛行自体は成功していたはずだ

亜音速で飛び、数百km圏内の航空機を即座に叩き伏せ、抱えた大量の爆弾で地表を耕す巨大全翼機

自分の装備を守るために自ら出でてくるところのは疑問だが

「……ん？」

今気付いたが、エレナがミルク持つたまましゃぼくれていた

湯の分量は計つていなかつたが、そんな極端に濃くなつたり薄くなる事も無い。火傷するほど熱くもしてないし

とこりかまだミルクに口をつけていなさそりだ、つまり問題は別

しかし、他人の感情変化にやけに敏感だな、自分

孤児真暮らしだったからか？

「どうした？ 体調悪くなつたか？」

「体調……？ 体調……いえ……」

(、 、 、)

みたいな顔である

眉毛が垂れ下がつたままカップを口まで運び、ちょびちょび飲んで
その後深呼吸

「…………もし私に身寄りが無くなつたら、子供にしてくれますか？」

いきなり聞いてきた

「だ……あの……駄目だ……俺にそのプレイは特殊すぎぬ…………！」

「落ち着きなされい」

フルマラソン直後のランナーように酸素ボンベを押し付けられる

その間にエレナさんは同じ質問をニアへ叩き付けたらしく

途端に指折り計算始め、数秒後何かにたどり着きエレナもろとも絶望し始めた

「ぶはつ……いきなり何だよ。複雑な家庭事情ってやつか?」

「そんな複雑では……要因はシンプルなんですが…」

上のジェット音が大きくなつた、味方がやつてきたのだろう

「18…20…なんとイケイケな年齢……」

「はい落ち着けー」

ニアに酸素が吹き付けられる

その間エレナはシンプルな家庭事情を話そうとしたらしく口を開き、数秒固まって何も話をせず閉じる。相変わらずのしょぼくれ顔でミルクを一気飲みした

と

「……お……？」

外で爆発が起きた

「墜落……？」

例の敵機が落ちたかしら、と咳きながらコリアナが下車。少し氣になつたため、落ち込む2人を残して明も外へ

墜落地点はここから近い、といつか極至近距離だ。先刻の戦闘で荒らされた草原に焼け焦げた残骸が突き刺さっていた

「なんだあれ？」

「…………え？」

「いや、だからあの機体」

「あー…………あれね……」

墜落の衝撃で大破している。残っているのは機首部分と翼の一部分のみで、残りは辺りに散乱。兵器にまったく詳しくない明はそれだけでは機種特定は不可能だ

「あれねえ、F-15イーグルっていつクランフォールの戦闘機」

「そつかそつかF-15…………ちょっと待て」

味方が落ちた？

上空ではやかましいジロット音が鳴り続け、時たま発砲音や発射音。戦闘が行われているのは間違いないが、雨でも降りそうな勢いで雲が増えしていく確認できない

そうしたら、もう1機火だるまで落ちてきた

こつち方向に

「直撃コース！？」

「まず…逃げて…！」

ユリアナが叫んで、ストライカーから2人出てきた。そして状況を確認してから全力で走り出した

今からエンジン点けていては間に合わない

落下してきているのは恐らくさつきと同じF-15イーグル。爆装はしていないだろうが、数トンの燃料を機内に詰め込まれている。墜落した瞬間に大爆発すると考えていい

今日は雨以外のものがよく降つてくる

発生した大火災にストライカーが飲み込まれた

それからは逃げ切つたものの、追つてきた衝撃波に体を吹っ飛ばされ転倒。同じく吹っ飛んだ誰かに押し潰される

「いつ……痛う……」

上にいるのはネアのようだ

怪我したのか僅かに鉄臭い。付け加えて肉が焼けたような香ばしさ

「おおおおいちょっと大丈夫か！？」

「だ…大丈夫です…即死でなければまだ…」

振り返るゝとしたが、首を押さえ付けられた

そのまま立ち上がり、深呼吸を1回挟んでから解放される。ネアは所々服が焦げているものの、体には掠り傷すら見当たらない

先日『呪い』と言つていたやつか

「さて……どうしましょつか、あれ」

空を見上げる

上空を隠していた分厚い雲から黒色塗装の鉄塊が顔を出し、数十秒かけて全体が雲から離脱

全長100メートルは軽く超えている。縦よりは横の方がやや長く、

翼と胴体が一体化した外見は、例えるなれば『ブーメラン』

出てきた瞬間、ただでさえ雲で暗い地上が一層暗くなつた

「なんだありやあ……」

「弾道弾迎撃用航空プラットフォーム『ウムル・アト・タウイル』。俗に飛行戦艦と呼ばれる代物です」

戦艦といつても大砲は付いていない、真っ黒い空飛ぶマンタだ。代わりと行つては何だが腹部の弾薬庫が解放され、無数の爆弾が見えている

「機甲部隊からこれだけ離れてれば大丈夫でしょう、目立たないようにしてねば」

飛行戦艦

この戦争の元凶

明が孤児になつた理由

「…………」

なのに、何も感じなかつた

戦況報告

主要な戦場での推移は概ね良好である。防御の厚い大都市への迂回が完了し、第二次攻撃による制圧が進んでいる。しかし特別編成の独立部隊『ハーキュリーズ』においては、航空プラットフォームの強襲を受け戦力の40%を喪失、独立部隊としての機能を失っている。現場での再編成により数時間後には最低限の能力を取り戻すが、

以降は作戦行動に合わせて支援が必要となる上、早急な戦力増強を受けるべきだろ。

ウムル・アト・タウイル

ハーキュリーズ上空に出現した航空プラットフォームはB-52爆撃機およそ3機分の無誘導爆弾を一体に散布していった。撃ち込んだ対空ミサイルはECMにより無効化され、敵の被害は無し。反撃により航空機1個小隊を失った。現在においてこの巨大兵器への対抗手段は存在しないため、遭遇した場合は撤退を妥当とする。

車庫に入つてエンジンを止めた直後、バスン！と音が鳴つた

「逝つたか」

「そのよつで」

よくもまあ！」までもつたものだ

爆風で横倒しになつたストライカーを転がし直してタイヤだけ交換した後エンジン始動。快調には程遠い状態で10km程度を走破、占領済みの都市まで撤退してきた。撤退といつても方角は真北のため、実質的には前進と言えなくもない

その撤退行動最大の功労者は今、エンジンから煙を吐いて沈黙していた

「修理が必要です」

「本当に修理で済むか？」

「フレームが原型留めていれば」

ボツコボ「だが大丈夫か？」

「とにかく休憩しましそう、特にエレナ」

「いえ私はこれに付き合わないと」

「整備員がやるからいい加減や・す・み・な・せ・い！」

「わわわわわわわ……」

エレナがユリアナに連れていかれた

昨日の朝から都合丸一田働きっぱなしなのだ、いくら若くても疲労は溜まつていく

「じゃ、俺はあの建物のあのへんにいるから」

ビルの最上階を指差してレオンも退散。どうやらあれが仮設の指揮所として使われているようだ、偉いせんはあそこに詰めてると記憶

そして気付いたらマリアンもいなくなっていた。今日の宿として割り当てられたホテルに向かつたと考えるのが妥当だが、まあ武器は置き去りにされてるので余計な心配はいらないだろう

取り残されたのは2人

「…………」

「…………」

まず、このニアと名乗る橙髪さんの生態を把握しきれていない訳である。普段何やってるのかとか、どういう話を好むのかとか、そもそも何でここにいるのかとか。少しくらいはそういうのを把握しないと接し方がわからない

そしてこのシチュエーションである

自由、男女、町

「と……とりあえず喫茶店でも入るつ……？」

「は？」

声超裏返つた、あと意味不明だった

「別にいいんですけど、敵地の店入つてもあんま落ち着かねーですよ」

「……いや、すまん、忘れてくれ」

少し落ち着こう

場所はエクストロキア西部の港町、名前は確か『ソーチ』。さして重要でもなかつたが、敵軍の防衛施設をまるごと奪取出来たため前線基地として物資を集積、次の侵攻への土台としている。飛行戦艦の爆撃でボッコボコにされてからここに逃げ込む形でやつてきた。敵軍は駆逐し切つていたが、逃げ損ねた住民はわりかし普通に生活中だ。怯えている風もあるようだが、こっちから手を出さなければ問題無いだろう。

その町のいくつかの建物を接收し住居として使用、第666分隊にはビジネスホテルの2部屋ほどが与えられている。たつた6人のしかも傭兵には豪華すぎる寝室だが、昨今の軍隊は男女トラブルを極力避ける傾向にあるし、正規軍とも区別したいんだろう。情熱を持て余したら町に繰り出し適切な順序を守つて口説けという事だ

疲れたならそつち行つて休んでもいいが、エレナ以外はさつきまでずっと車内待機、壊れかけのエンジンを気遣つて鈍速走行したため、ユリアナが酔わないレベルで安全運転だつた、休憩は十分

あと気になるといえ巴シャワー浴びてない事くらいだが、どうせ夜にはホテルなのだ、あと数時間我慢できないわれもない

「んー……じゃあちよつとこの施設内見回りまじょうか、探し物もあります」

「え？ そういうのは軍がほとんど押されると思ひや？」

「パソコン一台くらいはあるでしょう。一人で行つてもいいんですけど、女だけじゃ立つんですよね」

「立つ？」

「しつこいナンパ男をノすあたりで。プライド高い上に技術ありますからね、どうしても一撃で下せないというか」

「ああうん…把握」

いつの時代の軍隊だつて内情はそんなもんだ。昔の海軍では長期間の航海に出る際に妻の下着持参させたとか言つし。現地で××して変な伝染病貰つてくる水夫も絶えない

まあ、ネットで色々手に入る情報化社会の昨今、コントロール不可能な訳では無いが

見たくないだろ？、エロ本支給する軍隊とか

「じゃ、行こうよ」

「ああ

車庫を出で、メインの施設へ向かう

データー、とは言えないな

「勝てねえ……」

「あ、マジで勝とつと思つてたんすね」

キヤノピーを開けて新鮮な空気を取り入れる、地上の空氣は暖かかった

「必要無いと思いますが今の模擬戦結果。10戦0勝10敗です、最長時間は2分15秒」

カップ麺完成まであと45秒と

溜息をひとつ吐き出してF-15Cイーグルから降り、滑走路方向へ田を移す

後から降りてきたF-22Aラプターが着陸を終え、自走でハンガー前まで戻ってきていた。これから牽引されて屋内へ引っ込んでいく

「…………」

「クピットから出てきた

耐Gスーツを着込んだ小柄の人間。空中ではヘルメットと酸素マスクでわからなかつたが、今ならわかる、あれは完全に女だ

パイロットの身長は170から180が普通だが、どう考えたって160もいっていない、150すら怪しい。あれでは「クピットは専用に改修されてるだろう

ちなみにデカすぎるほど不適合のレッテルを貼られる

じつと見ていたら、いつに気が付いて駆け寄ってきた

「じゃ、後はよろしくお願ひします」

「おいで逃げんのかよ」

「若い子の相手とかおもひれん自信ないですよ」

「お前俺より若いだろがーー。」

行つてしまつた

「いざながひ

「え、あ、おひへ……」

「はじめまして」

「おひへ……？」

「おひへじ、ふりです？」

「なんでだよ」

並んでみて確信したが150cmも無い。耐Gスースがぶかぶかである事もあるだろつが、恐らく中学生から高校入りたて。明るい茶髪のショートボニーが頭から伸び、小首傾げながらこつちを見ている

小柄の方がパイロットとしては有利という話だが、いくらなんでも

小さすぎるだろ

「……年齢は？」

「今年で17」

「つまり今16と……」

「法的にギリギリセーフ」

「何が

よくわからんねえこの子

「アルメリアより来ましたアリソン・L・リトル、TACネームは『ネメシス』。以後よろしくお願ひします」

「お……あー……ソリッド・ツーリーズ、TACネーム『アストラエア』」

「正義の女神」

「そうこうお前は復讐神」

本当に、何故うちの軍はお前に華やかさを求めるのか

「イヒーちの文化をよく知ってるな

「本があつたから読んだ。綺麗に善と悪に分かれてるのは新鮮」

「は？……あー… そうだな」

神話なんて大体そんなもんなのだが、それを新鮮と言われると少し困惑してしまう。しかしイレギュラーも存在している訳で

北半球の一帯には、ひたすら陰鬱で暗黒で救いようのない神話が存在しているとか。庶民の娯楽であるおとぎ話がR-18G寸前とは些か矛盾しているような

「クトウルーの邪神群は実在するとも言われる」

「はあ？」

「半世紀前の戦争では人間1人が出したとは考えにくい戦果が報告されてるから。所属部隊の記録は抹消されてるけど、有り得ない話ではない」

「…………」

「私力ルトじゃない」

「あつそ」

そこまで話して、自然的に足を管制塔方向へ向ける。訓練という名の私闘は終わつたが、終了報告とデブリーフィングが残つていた

10回やつてすべてあしらわれて終わりである、普通なら懲罰確定ものだ。しかし何のお咎めもないだろう、戦闘機の第四世代と第五世代にはそれを納得させるだけの差がある

性能だけが原因ではなさそうだが

「根拠は何だよ。キチガイな戦果出した人間ならいくらかいるだろ」

「ん……昔の軍人で挙げるなら、505人射殺の狙撃兵シモ・ヘイヘ、戦車519両撃破の爆撃機操縦士ハンス・ウルリッヒ・ルーデル、航空機352機撃墜の戦闘機操縦士エーリヒ・ハルトマン。後は無傷で終戦を迎えた駆逐艦雪風とか」

「だろ?」

「残念ながら話になつてない」

いやそれはおかしい

さつき拳がつた中から一番有名であろうルードルさんを例に取つてみる。生涯で入手した称号は『スツーカ大佐』『スツーカの悪魔』『ソ連人民最大の敵』『アンサイクロペディアに嘘を言わせなかつた男』。WW2で活躍したドイツ軍の魔王で、朝起きて出撃して朝メシ食つて出撃して昼メシ食つて昼寝して出撃しておやつ食つて出撃して晩メシ食つて出撃して夜食食つて出撃してシャワー浴びて寝るという生活をしていたら、総計2000目標以上を破壊して世界最強の爆撃士となつていた男である。

これがいかにトチ狂つた戦果なのか説明するため、簡単に殺害数を算出して他と比較してみる事にする

まず戦車には4人乗るのが普通なのでこれだけで2000人、車両800以上があるので、1台2人としても1600人、火砲1門につき3人だと150門破壊で450人。これだけで4050人となる。他にも軍艦数隻や航空機数機などあるが、全員が死亡したわけでもないのでこの数字に留めておく

・真珠湾奇襲

2388人

・『史上最大の作戦』ノルマンディー上陸作戦連合軍側

10264人

・アメリカ同時多発テロ

2993人

・ルーデル生涯の戦果

4050人

つまり彼はたった1人で真珠湾2回分の損害を叩き出したのである

「どんだけだよ、人数は？」

「一説では一万五千人以上」

「ハ……」

「1個師団まるまる潰してゐる」

顎が外れた

「確証はないけど、私は信じてる」

「……何故」

「それは長くなる、今は報告が先

行つて、早歩きで先行していく

案外、仕事熱心のようだ

車庫と隣接していた施設に入り、しばらく歩いてそこが宿舎であることを知る。1部屋10畳ほどの空間に総数10以上の多段ベッドが詰め込まれた姿は見てるだけで汗が出てきた

それが廊下両側にずらーっと並んでいるのだからもはや狂氣である。下手したらこの中のひとつをあてがわれていたかもしないと思うとレオンが偉大に見えてくる

「あつた」

その中の1室でノートパソコンを発見。だいぶ古い型だったが、普通に使う分には何の問題もない、むしろ最近のはオーバースペックすぎるのだ

「個人の私物?」

「でしょうね」

電源を除いてケーブルは伸びていない、だが無線LAN機能があるようだ、ネットサーフィンするならこのままで問題なし

「ただ今はここのはプライベートネットワークに入りたいので……」

周囲を漁つて青いLANケーブルを手に入れ、それとパソコンを持ってネアが部屋から出していく。端子を探しているようだ

施設中枢に直結されているネットワークに一般兵士用の無線LAN挟んだりしないだろう、それでは機密も何もない

アクセスポイント 자체はすぐに見つかって、廊下の端という何に使うのかよくわからない場所にあつたが、きっと緊急用だらうといい加減に納得する

「アクセスさえできればデータが残つてると思つんですが……
あー……」

電源を入れて、起動完了したあたりで数秒固まり、その後ゆっくりとディスプレイを置んだ

「どうした？壊れたか？」

「いや壊れてはいねーですけど……」

額に手を当てて数回首を振る、表情的には何か名状しがたい何かを見たような

「壁紙からアイコンから全部ズボンクだった……」

「あーーー……」

どんなだらうそれは、男として見てみたい氣もある

ネアはパソコンを強制終了させ、再度起動、F11キー押しつばなしで通常起動から外れ

「もはやこれは変態の域」

「あ」

Cドライブ初期化した

「全然定してゐる訳でもないですよ、ただ限度とこつものですね」

「まあ……いるんだよな、10代前半で脳の成長が止まる人」

学校らしき学校に行つたことがない明ではあるが聞いた事がある、12歳から15歳までが通う中学校では男子が人生最高潮の思春期を迎える、体育を覗いたり集まって話合つたり土手に探しに行つたりと1日の半分がピンクに染まつてゐるとか

そしてその過程で生まれたイレギュラーが中一病や邪氣眼という

「いや、その認識はおかしい」

「えつ」

「どうやらロック解除キーの入った記憶媒体が必要みたいですね
気付けは再セットアップが終わっていた。必要最低限とはいえ、一
体どんな速度で設定を終わらせたのか

「ふうん?普通はパスワードとか聞かれると思うが
「パスワードはもう突破しました」

なんだと…

「探しに行きましょ、これを見るとなると一日かかります」

「あ……ね」

1日で済むのか

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「おへ、どうした?」

宿舎を離れてレオンのいるビルまで移動してきた。占領の終わった後では怪しい記憶媒体などを接收済みだろ?とこいつ判断だ

実際、各所から集めてきたタワー型PCや紙媒体やらがフロア全体に並べられている。解析はひとつ上の階でやってこいつだが、レオン一人が寂しくデスクトップをいじっていた

「何やつてんだ?」

「とりあえず中身をやつと見て有益な物品かどうかを判断するの。ほとんど全部初期化されてるんだけどな、中身がありそんなら上に持つてつてセキュリティ割る」

「大変そうだな」

「そりでもないさ、一番早く情報見れるしな。……で……」

後ろを見る

「あの子は何やってんだ?」

「CD-ROMかフラッシュメモリを探してるんだと思つ」

小物の山を切り崩すネアがいた

ただ煩雑に崩すのではなく種類別に分けて整頓している。本人は真剣だが、はたから見てるとバイトのおねーさんだ

「……施設内にサーバーがあるそうだけ」

「ああ、目下の問題はそれなんだよな。アクセスしようとしてパスワードにぶつかったんだが、解析に1週間かかりそうなんだよ。スパンコンがあれば1時間で終わるんだが」

「…………」

どりやらの後にもうひとつ壁があるのを知らないらしい

PC処理で1週間かかるとなると、数分で突破したネアの情報処理能力は……いや考えないようにしよう、パスを知っていただけとう可能性もある

「なかなかうまく見つかんないもんだな

「何が

「飛行戦艦」

指を上に向けてぐるぐる回してみせる。あれを撃墜する方法と/or
事だらう、確かに早く見つけなくては生死に関わる

「本来ならあれの他に防空専門の中型機が付くからな、戦闘機じや
接近すら不可能だ」

「地上からやれるのか？」

「やれない事は無いぞ、ただ奴の高度まで辿り着ける兵器つてのは
かなり制限されるが」

この隊の装備じゃまず無理だ、と付け加え、レオンはパソコンのチ
エックに戻った。HD内のファイルを名前だけ眺めていつているよ
うだ

「兵士に拘束的な軍なのか欲求不満なのか。ちょくちょくH口画像
入ってるのは何なんだろうなー」

「それならさつきひでーもん見ました」

「？」

その衝撃はニアしか知らない

「デブリーフィングの前に伝達するべき事がある」

「おひ

パイプイスに腰掛ける

投影機が部屋中央に鎮座していりため薄暗い。場を仕切っているのはいつも空中管制機から指示を出してくる『アトラス』で、名前は……何といったか。年齢は三十半ばといった所だが、正確な数は知らない

それ意外に室内にいるのはアストラエアことソリッドと、ネメシスと、タッグを組んでいるネフティス。名前はアルズ・ブラックウッド、21歳

あとパイロット志望の新米が4人ほど。仮にここにパイロットが全滅した場合、補充が来るまで彼らが前線に向かうことになる。帰つ

てきたら奇跡だと思つが

ちなみに言つと彼らは最年少で24歳、現役パイロット3人より歳喰つている。そういうどつちが敬語使えばいいんだかわからない状況はほんと勘弁してほしい

「まずネフティス」

「はい」

「機体が来るまで地上勤務だ。機種転換訓練も受けておくよつ」

「ですよねー」

奴は前回自機を墜落させた訳で、乗るべき機体が無い。そしてF-15のC型は既に生産終了しているため、新しい機種を取り寄せる事になった。普通なら部隊ごと取り替えるのだが、時間刻みで戦線を広げている今それはとても面倒だ

となると、F-15Eかラファールか

「それと連動して、アトリア隊はしばらく臨時編成を維持する。戦闘方法の違う機種の組み合わせとなるが臨機応変に対応するよつ」

「……それは俺が下がればいいのか、こいつを上げればいいのか」

「どつちでも構わん、搭載兵装で使い分けろ」

F-15Cは短距離ミサイル4発、中距離ミサイル4発を搭載し、

接近しての格闘戦を主体としている。中距離ミサイルは会敵時に一斉発射してしまっため、メインは短距離ミサイル

対しF-22Aは短距離ミサイル2発と中距離ミサイル6発、バ力气たステルス性能を用いた中距離戦闘を主体とする。短距離ミサイルは護身用で、基本スタイルは闇討ち

F-22Aに格闘戦やれと言えば涼しい顔でやつてのけるが、闇討ちできる程のステルス性をF-15Cは持たない。前衛がいること前提ならできないこともないだろうが、恐らくF-22Aに前来てもらうことになるだろ？

ついでに言つと『ステルス性能を持つたF-15』は現在開発中で、F-15SEサイレントイーグルという。30年前の機種の派生型がいまだに作られてるとは、すごいを通り越してもはや恐ろしいなんて考えながらネメシス、アリソンに視線を送る

「あなたのお家ヘテリバリー」

やはりよくわからない

「最後、戦力増強の話だが」

「彼ら？」

「…………まだ無理だ」

新米パイロットを指差したら、苦笑気味に返された

本当に緊急時の補充要員である。普段は練習機で訓練をしたり、機体が空いている時を狙つて模擬戦したりしている

大丈夫なんだろうか、こんな体制で

「飛行戦艦に4機やられた戦闘機の補充を要請したんだ。汎用性を考慮して『フランカーに勝利できる戦闘爆撃機』と要望を出したんだが……」

「何が来た？」

「ストライクイーグルが2機と、アパッチロングボウ2機」

豪華なんだか的外れなんだか

F-15Eストライクイーグル、F-15を大幅に再設計して対地攻撃力を付与した型だ。各種対地兵器の運用能力を獲得したほか、対空戦闘でも若干の能力向上を果たした。クランフォールが運用する機体では最高レベルに入るだろう

そしてAH-64Dアパッチロングボウ

世界最強の”攻撃ヘリコプター”だ

「戦闘機単体での飛行戦艦撃破を諦めたと見える」

「まあ火力も足りないでしょ」
「うしねえ」

ネフティスが言つ

「実物見たのか？」

「イーグル4機を叩き落として爆弾降らして帰つていくまでを救難信号出しながら見ました」

ああ、そういうえばそんな時間があつたな

「航空機搭載のミサイルじや火薬が足りませんよ、パトリオットでも持つてこないと」

「いざれは持つてくる、だが今は情報が足らん、どこにいるかもわからぬんだ」

投影機にパソコンを繋いで、さつきの模擬戦を流し始めた

「デブリーフィングに移ろい、新米もよく見ておくよ」

「やめろ恥ずかしい」

「大丈夫、恥ずかしいのは最初だけ」

「さつきからお前は俺を誘惑してんのかMに染めたいのかどっちだ」

גַּתְּנָהָרִים

ガタン！

どうにしろ恥かいた

「めつけた！！」

「め……？」

「あ…………」ふん

小物の山から一枚のCDを探し当たたネアである

「すみません、昔の自分と邂逅しました」

「さうか、若かつたんだな」

「…………」

ひとしきりレオンを恨めしい目で見つめた後、持ってきたノートパソコンにLANケーブルを繋ぐ。少し間を置いてから、CDドライブに認証キーらしきディスクを挿入

読み込ませること数分、画面に何かの三面図が現れた

「ちょっと明さん、そのへんからメモリースティック取って貰えます」

「ん、いくつだ？」

「できるだけ大容量なのを2つ」

小物の山から長さ5cm程度の棒を探し当てる。容量を見る、2GBと4GBが大半だったが、16GBのものが少量混じっていた

見繕ったものをネアに渡し、中に重要なものが入っていない事を確認してからサーバー内の情報を移し始める

そうしたら、レオンが画面を覗き込み始めた

「……何やつてんの？」

「サーバーのセキュリティ突破に成功したよつで」

「…………？」

「…………？」

「…………？」

聞いたレオンは身を乗り出して画面を流れていく情報を読み取つていぐ。飛行戦艦関係だけ抽出しているようで、画像や性能表が踊つていた

「三面図と基本情報だけですね、これから欠点を見つけるのはちょっと」

「いや待て待て待てなんだこれどうなったパズワードどうしたんだマジで」

「一定法則で並んだ0と1を一度に8192ケタ以上入力するとバグるところ性質があります」

「へへへ……」

「そのセキュリティホールからパズワードが取り出せるんですよ。ソフト面で根本的な改修されない限りはこれでいけます」

「コードは？」

「バレたくないの教えません」

めぼしいものを移し終えて抜き取り、それは自身のポケットへ。今度はもうひとつメモリースティックを差し込んで全内容「コピー」始めた。さっきのは自分用で、これはきっと提出用

「正規軍には自力で手に入れてもらいましょ」

でもなさそうだ

「いいのか?」

「最低でも一週間後には手に入るしな、パスワード割った後はこれ差し込めばいいんだろ?」

欲しい情報も無さそうだし、と付け加え、レオンが一旦ノートパソコンから離れる。あまり興味が無いのかと思って見ていたら、自分が用のメモリースティックを探し始めた

「関係無いはずだつたんだがなー……」

何か呟いている

「搭載兵装だけ見てみましょか」

メモリースティック3本目を受け取りつつワードファイルを開き、武器の項目までスクロールする。軍の管理物なだけあって大衆向けロボットアニメのような多彩性は無く、複数の弾頭に対応できる発射機（VLS）と機銃、それと爆弾を積むための弾薬庫のみだ、最近の兵器は弾の変更で要求を満たしていく、それを撃ち出す側はあ

まり代わり映えしないのが実情である

「対地兵器は一通り積めるみたいですね。SAMにグリーン、将来開発される予定の弾道弾迎撃ミサイルにも対応可能。宇宙を目指す気は一応あるようですが」

「それは予算の問題だろ、一度失敗したとはいえ技術はあるんだから、金と国民世論があればすぐ行つちまつよ」

40年ほど前の話ではあるが、ヴァラキアの宇宙開拓に触発されたエクストロキアも成層圏の向こうに挑んでいた時期があった。まず1基目はエンジン不調で離陸すらできず、2基目は1000メートル飛んで暴走、泣く泣く自爆。そのあたりでアルメリアに追い越され、頼みの3基目も衛星軌道を素通り。有人飛行が実現したあたりで国民が反発を強め、それから今までエクストロキアの宇宙への道は閉ざされている

ちなみに弾道ミサイル対策の初期段階で飛行戦艦の主兵装とする案もあつたが、ミサイルの『誘導』よりレールガンの『速度』を取つた訳だ

「と…対空巡航ミサイル…？」

一番下の項目

『Uranusbreaker』と名付けられたミサイルシステムがぽつんと記載されている。それ以外には兵器種別のみで、どういふものであるかは書かれていない

巡航ミサイルは通常ミサイルと違い、目前の翼とジェットエンジン

で飛行する、航空機と同じ飛行原理である。2000km程度の射程距離を与える事が可能だが、コストの兼ね合もありて普及しているものは500km以内が主流だ。コンピュータを搭載するため、プログラムに従つて迂回したり、敵の迎撃に対し回避行動を取ることができる。最大の長所は射程で、空軍のアムラームミサイルが有効射程40～70kmであることを考えると実にけつたんな兵器となる

「確かに、燃料氣化弾頭を積んだ多段ミサイルとか公式発表があつた気がするが。他のファイルに書いてあるんじゃないかな？」

「いえ…無いみたいですね」の中には

ざつと見て飛行戦艦本体の実情しかない事を確認し、ノートパソコンを閉じた

「後でゆっくり見ましょ。今何時ですか？」

「午後5時前」

「じゃ、今日はもう休みとこ」とド

行きましょとネアが出口へ向かっていく

「…………」

「俺はまだ仕事だよ」

「そうか、じゃあ……」

「頑張つてな

何を

次目標

M1A1エイブラムス 2両
M2ブレイドレー 6両
HiMLRS 2両
LAV-A D 2両
F-15E/Fストライクイーグル 3機
AH-64Dアパッチロングボウ 2機

ハーキュリーズに編入

コトボ占領に参加、同地を支配下に置く」と

先日までの3度における戦闘により敵主戦力は壊滅しており、現有戦力での占領は十分可能であると思われる。占領後は同都市に隣接する敵軍駐屯地へ進攻、基地としての機能を喪失させる

なお航空プラットフォームの情報については、現在諜報員を首都周辺へ送り込んでいるが、即急な情報取得は困難である。現在、敵基地からのデータ奪取か、対空ミサイルの高性能化が検討されている。現有兵器では対抗し得ないため遭遇時は即時待避すること

「全体の戦況について書かなくなつた、末期症状だ」

「さすがに早過ぎますよ」

負けそうな国が戦況をぼかして伝えるのはよく聞くが、開戦2週間

田で勝ち��けてこるのにそれをやるのは少し考えられない

明日にはまたロデオストライカーに乗れと告げるロビー用紙を放り捨ててベッド上で一回転し、テーブルに置いてあつたエネルギーバーを掴むコリアナである

エネルギーバーはレーショーンを解体して入手した間食用だが、緊急用のシリアルバーみたいな硬さはなく、触感は市販のカ○リーメイトに近い、味をもつとマトモなものにすれば文句なしだが、なぜサラダ味なんでものを作ってしまったんだろう

「明日には直るの？あの車」

「たぶんエンジンは無事なんですよ、ギアボックス内は完全に壊れてますけど、そのへんの歯車交換すればなんとかなると思います」と、テレビリモコンをいじくりながらエレナが言つ

やつてる番組はどうにも同じようなプロパガンダ放送だが、旧世代的な戦争を煽るものではなく自制を求める内容になつてゐる。方法はどうあれ戦争を無くそうとしている国が戦争推進する訳にはいかないんだろう

ちなみに”旧世代的なプロパガンダ”はクラシック放送中だ

「……戦争したくない国がなんで戦争の火種ばらまいてたんですね」

「将来的に核ミサイルが拡散するのを予想して慌てちゃつたんでし

よ。なんだかんだ言って根は普通なんだから、問題なのは煽つてゐる連中と裏で手引いてる奴よ本当にしうつもない」

「アルメリア嫌いなんですか」

「おーもう大っ嫌いよー」

「戻^{アラタク}に^{アラタク}言つ意味がわからない

「じゃあ、なんでクラン側で参加したんです?」

「んー…?」

この戦争はアルメリアがクランフォールを焼き付けてエクストロキアに攻め込ませた戦争である。大陸半分を巻き込んだ大戦争になつたのは予想していなかつただろうが、根本的な元凶はそこにある

つまり、クランフォール側=アルメリア側といつ事であり

「そういう条件で家出させてもらつてるからね」

「家出?」

エレナがやや強めに反応を示した

そういうえば家庭事情でなにか複雑な事があると毎に言つていたが、こつちは家庭事情というよりは進路の問題なのだが

そういうじてこるうちに寄つてきた

「どうこの理由でこんな所に来……」

「うつや———！」

「わ——つ——？』

隣部屋が騒がしい

太陽が完全に沈んだ午後8時、正規軍の消灯時間は10時であり、更に6時からは外出禁止なため、あれだけいた軍人が今は一切見当たらない。傭兵には関係無い規律ではあるがトラブル発生の原因となり得るため、星の知慧派、銀の黄昏ともども6時を境に引きこもつてしまつた

隣の女子集団はその雰囲気で修学旅行気分を楽しんでいるようだ

「興奮するか？」

「孤児院つて毎日こんな感じだしなあ」

「……恵まれてんなー…」

孤児院にいる時点で恵まれない代表格だと思つが

「じゃ俺は情報収集してくるから」

「まだ働くのかよ?」

「ここから先は趣味だよ」

このワーカーホリックめ

「たぶんそのまま寝落ちするから朝まで帰つてこないと思つ。1人でゆっくり休んでくれ」

「まじい?」

夕食付きで一泊1万2000円くらいのやっすいホテルだが、1人で使うには少々広すぎる。といつても部屋が広い訳でなく、畳数だと8程度の空間にベッド2つが押し込まれ、くつろげるスペースはベッド上と窓際の椅子2つのみである。物理的には狭いのだが精神的に広い

「寂しいなら一緒に行つて一緒に寝るか?」

「よしわかつた1人で行つてこい」

レオンを追い出す

その途端に静寂が部屋を包み込み、いや隣からは相変わらずの喧騒がだだ漏れではあるが

個室とは縁の無い生活をしていた明にとつてこの状況は新鮮、数えても両手の指で事足りる。常に誰かしらと相部屋で、時には女性がいる事もあつた、5歳くらいの

「.....」

静かだ

すぐ近くで大騒ぎしてゐにも関わらずあたりは静か。なんだらうすごく落ち着く、暴れ回つて電池切れで力尽きた修学旅行最終日に似たものがある、修学旅行行つたことないが

とりあえず椅子に座つて一息、思いの外疲れは溜まつていなかつたようで眠くはない。リモコン操作でテレビを付けたはいいものの外国のバラエティーでは笑い所がわからず、しかも戦争してゐ事が馬鹿らしくなつてくるというおまけ付き、数分だけ見て消してしまつた

次にテーブルの横の小棚をチェック。本1冊と、ダイス数個と、おはじき的なものがたくさん出てきた

TRPG『クトウルフの呼び声』

なぜこんな所にある

ガチャン！

ପ୍ରକାଶନ କେନ୍ଦ୍ର

部屋のドアがいきなり開いた

突然の出来事に二十面体ダイスを取り落とし、残りを落とさないよう落ち着かせながら視線を出口へ。入ってきたのは黒髪ロングの女性、Tシャツとジャージのズボン姿で、入るなり最寄のベッドに直行して無言のまま潜り込んでしまった

-
.

卷之三

「…………いや、マリアンさん向やつてんすか」

「つるをみて眠れん」

それはよくわかる、壁1枚挟んでこれだからな

なるほどなるほど

で、これはどういう状況だ？

「さすがに孤児院出身でもこんな展開は慣れどりませんよ?」

「そ、うか」

「……昨今の男女同室についてのことは無条件でそういう理解をされる傾向にあつてですね?」

「そうか

駄目だ」つづく無敵だ

落ちたダイスを拾つて、状況を確認してみる。押しかけ女房も真っ青の勢いでマリアンがやつてきて2つあるベッドのうち片方で寝始めた。前述した通り部屋は狭く、大部分の面積を占領しているベッドは間の距離が50cm程度しかなく、軽く跨げば簡単に乗り移れる。思春期の少年が情熱を爆発させるには十分すぎる状態だ、ただし相手を考えると爆発させたが最後であり、またこの状態にいい体格のお兄ちゃんが組み合わされた可能性もあったといつのも考えるとそれはそれで悪寒がしてくる

『まことにテレビを点けた

『正解は?』

『据え膳食わねば男の恥イー!』

消した

「あー…………明日の予定つてどうなつてんだっけ?」

「いつも通り、攻めて占領する」

いつも通りになるほど繰り返しているんだろうか

「……嫌だとか思ったことあんの?」

個人的な恨みがあつてこの戦争に参加しているようだが、昨日の地下施設で見た限りはなにか葛藤めいたものがあるよう見えた。仕返しに殴り込みかけて、罪悪感に引っ張られた感じだろうか

つか、この質問は地雷じゃないか?

「……殺人行為を楽しんでる訳じゃないからな、そういう感情は常にある」

彼つていた布団から頭を出して黒い瞳を見せる。眠いのか、両方とも半目

寝ようとしていた所から顔を出したという事は話に乗ってくれるという事でいいんだろう、しかし話といつよければカウンセリングっぽい事になる気もする

「それはやっぱ、復讐とかしたいって理由?」

「……」

僅かに頷いた

「奴らが原因で深刻な不景気になつただりつ」

「ああ、確かに悲惨なものがあつたけど」

最初は株価の暴落が原因とテレビが説明していた。少ししたらクーデターが起きて、すべてエクストロキアのせいだと言い始めた

少し調べてみると出てくる単語は『飛行戦艦』であり、完成時は共同保有する約束で周辺国から開発費を収集していた

その『ちょっと過剰なODA』がどれだけ経済を締め付けていたかは不明にしても、額を見ると何らかの影響を与えていたのは間違いない

「間接的にだが……そのせいで大多数の国民が切り捨てられた。銀行凍結されて、それから医療保険も。私は大学にいて、何も知られなくて……」

「…………」

「結局……最後まで気付けなかつた、馬鹿みたいに学費だけ振り込んできて、そんなもの払わなければどうにでもなつたのに」

「国立？」

「私立」

それはまあ、ものすごい親である

私立の学校は国から金が降りてこないため、1年間の学費は約100万円。銀行口座が差し止められ口クに稼げない状況、さらに保険が効かないとあっては、普通は大学なんて通つてる場合ではない

「逆恨みのはわかってる、だがさうでもしないと、あの頃は本当に……」

「……それで、冷静になつてやめたくなつたつて感じ?」

「途中で投げ出す気は無い」

「お……」

「今やめたら今まで殺したのが無駄になる。それは、駄目だろ……」

呟くよつて言つて、布団の中に戻つていった

今まで年下の相談に乗る事は多々あつたが、そんな有象無象がどうでもよくなるレベルだ。世話役としては優秀な方だと過信していたかしかしまあ、言つてくれればできる事は……

「む……」

「うおーーー！」

いきなり布団を引つぺがしてマコアン復活、またダイスを落とした

「眠気が失せた」

立ち上がり歩いて、明とは反対側の椅子に座る。そしてメモ帳とペンをどこからか調達してきて、TRPG『クトゥルフの呼び声』を開く

「え、やんの？」

「隣の連中も呼んでーーー」

ああ

べつめの地雷、一段跳びだつたよひぢ

気付いたら朝になつていた

「.....」

ベッドに潜り込んだ覚えは無いのだが、寝かしつけられたのかもしない、明はそう思いながら掛け布団から抜け出す。もう片方のベッドは何か人型の盛り上がりができていたが、頭まで毛布被つてい

るため詳細わからず

その後時計を確認してまだ早朝である事を知る。朝食までは1時間と少しで、一度寝する空き時間ではないし、かといってやる事も無い、世間一般に言つ『早く起きすぎた状態』である

とつあえず換気をしよう、そう思つてベランダへの窓を開ける。部屋のサイズに見合つた申し訳程度のベランダに出て外の様子を確認、正規軍は完全に起床しているようで、出発に備えて戦車を並べている。昨日と比べると数は激減していたが、それでもなんとか戦闘できるレベルまでは回復させていた

今日はまた別の都市に乗り込んで占領すると聞いたが、現状戦力では苦戦する可能性も

「や」

「ん？」

隣部屋からコリアナが出てきた

「よく眠れた？」

「数時間だけな」

「そ、私は子供の寝かしつけが大変だった

「なぜ？」

「知らないわよ、ベッド一つしか無いから一緒に寝ようつて言った

らこきなり泣き出すんだもの。たぶん家庭事情ビーたりーたらの
延長だろつけど

やつぱ訳ありか

若者の傭兵なんてみんな訳ありとこの前言つていたが、どうも例に漏れないようだ。家の事で何かトラウマがあるようだが、今のところ話してくれないのでどうしようもない

「じゃ、お前は?」

「え?」

「なんかあるんだろう?」

「あーいーのよ私はどうでもいー事だし」

どうでもいいとか言わるのが余計気になつて最悪なパターンでだな

「18年も孤児院にいるとかウンセラーになれるのね」

「まあな、15超えたあたりから便利屋としか見られなくなるんだぞ」

「はは」

爽やかに笑う

それから一日視線を戦車に移し、車両の数を確認。見るからに日減りしているのを一通り眺めてから溜息をつき、手摺りに肘を乗せ頬杖をついた

編成されてから一日たたずみ壊滅させられては溜息もつきたくないが、一番の不満は補充数にあるらしい、「少な……」と呟いて更に

溜息

「あんなんで敵中枢まで突破しきっての？」

「無理か？」

「無理つてこたないけど…歩兵もある程度は対物戦闘しないと勝てないわよ」

人対戦車が生まれるという事か

「今日から攻めに行くのはもう撃破済みだから問題無いけど、その次までにはもつと増やさないと」

手摺りから離れた

最後にもう一度車両を眺め、ユリアナは室内へと戻る

「じゃ、また後で」

窓を閉じた

「………… やで」

換気は終わった、後は出でていく準備をするだけだ

残り時間 45分

そして女性の寝起きは時間を食つ、起こすなら早い方がいい

人間1人分の膨らみがあるベッドを見る

「おーい」

無反応

「朝だぞー」

揺すってみる。人間の感触がしたためいるには違いないがやはり無反応、健やかに惰眠を貪つていらっしゃる

とにかく布団を取つ払つてしまおうと端に手をかけ、ゆっくりめくつていく、黒髪が現れた

小さく丸まつて眠るマリアンさんは歳相応の表情で睡眠を取つておられ、いつもの威圧感はどこかへ消え去つていらっしゃる。広いとは言えないが窮屈を感じるほどでもないベッドを半分以上余らせている様は、まるで何かから身を守るような

じっくり観察している場合ではない、起きなくては
「…………ねつ」

肩を掴んで強く揺する

「ん……」

薄く目を開いた

「もう起きとけ、寝坊するぞ」

「…………」

カタツムリもびっくりの鈍重さで顔を上に向け、そこにいた明を視認。そしてVISTAも真っ青の処理速度でそれが誰であるか解析する

「…………」

「…………？」

沈黙した

「どうした? つーか見えてるか?」

「…………だ……大丈夫だ……問題無い……」

わたわたと起き出す。何を焦っているのか急いでベッド端まで移動し部屋備え付けのサンダルに足を通した、そこまではよかつたものの立ち上がる際に手をベッドにかけ損ね、マリアンが視界から消えていく

「そんな転落で大丈夫か?」

「…………一番いいのを頼む……」

手を差し出す

「いつも通りじゃないな

「別に……」

手を引っ張つて立ち上がらせ、尻の埃を落とすのを待つ。その際髪に埃がついてるのを見つけた、相手は孤児院の幼児ではないが、ほつとくのもどうかと思つたため長髪をすいて落とす

「…………狙つてるのか?」

「何を?」

「いや……」

異物を除き終え、長髪に漆黒が戻った

終わると同時にマントは明をチラ見して、部屋の出口へと歩いていく。
朝食まであと30分、間に合えばいいが

去り際

「…………孤児孤児言つてればなれどもさるといふ事な

「は？」

「いやー、案外来ないもんですねー」

「2日3日で来る訳ねえだろアホ」

アルズの頭を小突く

今日は作戦決行日であり、数時間後には空の人となる。しかしイーグルの代わりが到着しなかつたため、F-22Aと肩組んで出撃することが確定した

そして現在、補充されたパイロットの出迎えをするため管制塔入口

で待機中

「いきなりで大丈夫なんですか？」

「確かに連携はできねーだろ? が、まあどうにでもなるだろ」

近くの飛行場には大した戦闘機が無いようだし、連携できずとも性能だけは化け物じみているのだ、最悪ちょこまかしているだけで後は勝手に撃墜してくれる

どのみちー〇連敗した時点で心は折れているし

「それで、機種は何になつたんだ?」

「F-15のF型、最新型ですよ」

「…あつそ」

F-15FはE型の発展型で、対地攻撃力増強のために複座としたものを再び単座に戻したものだ。1人乗りなので忙しい事になるが、頑張ればE型と同等以上の能力が得られる

しかしそうなるとE型との能力差が生まれてしまう訳で

「ほり来ましたよ

「む」

ガタイのいい男が4人向かつてきた。何と言つかまず第一にでかい、

ソリッドやアルズは普通に職業パイロットといつたら嘘だと思われるかよくて民間航空機だ、しかし連中は何も言わずとも軍人とわりそうだ

「いやー、やっぱ裏口入隊とは違いますねえ」

「裏口じゃねえよ限りなく裏に近い正面口だつつってんだろ」

「それどんな正面口ですか」

人数4人、間もなく管制塔に到着して、立ち止まり敬礼してきた

敬礼し返しつつ肩の階級賞を確認、同じだ、敬語使う必要無し

「キルケ隊だ、よろしくな」

「ああ、じゅうじゅ」

握手を求められたので差し出されたのを握る。手もでかい、地上では喧嘩しないほうが良さそうだ

「噂は聞いてるが、若いのに頑張ってるな

「いやまだまだ特に2番機が」

「はは、まあ頑張りすぎてスコア全部持つてかないでくれよ

今話していたのが中に入つていく

「復帰するまで任せとけ」

次いでキャラクタのような金髪、その相方らしにスキンヘッド、集団から1歩離れて真面田やうな超長身

「任せとけー」

最後に身長150cm以下の少女

「ひー」

「あう」

中に入ろうとしたアリンソンをひつ捕まえる

「何やってんだお前は」

「ヤマザキ春のパン祭り」

「何言つてんだお前

どうせ機体の出撃前チェックしてたら新しい機体が降りてきたから気になつてそのままついて来たんだろう。あのラブターはクラン軍籍だが、なにぶん1機しかないので整備面に不安があり、飛ぶ直前にはパイロット自らが整備に参加している。コクピットに陣取つて下々に指示を出すだけだが

あと個人的には、『コクピットが狭すぎて効率よくチェックできない』といふこともあると思つ

「あ、とつあえずそ」で待つとか

「ん

頷いて、ソリッドの横に落ち着く。少しして暇になつてきたらしく腕組んできたり腰に巻き付いてきたりしたのでそれをはね退けつつもう一部隊の到着を待つ

「とあ」

今度は背中に飛びついてきた

「……何なんお前

「どうだむすこ」がたつたろ」

「俺の息子そんな安っぽくねーから」

誰かここにどうにかしてくれ

そしてできれば隣で羨ましそうに見つめておいたるバカもどうにかしてくれ

「来ましたよ」つぬ

またガタイのいい兄ちゃんが2人来た

階級章確認、格下だ

「本日付けで赴任してきましたスキュラ隊です、よろしくお願ひします……」

階級差があるので敬語、途中で背中のアリソンに気付いてどもつてた。普通こんなもん見たら声出して驚くと思うが、なかなか優秀のようだ

つか恥ずかしい

「……行つてよし」

「あ、はい」

それ以外何も言わなかつたので少々戸惑つていた。ジェスチャーではよ行けと伝えて無理矢理ドアをくぐらせ

「よ、よろしくお願いします」

2人目のイケメンも押し込む

「よろしくねーす……」

女の子がそれについていった

「待て待て待てお前は待て……」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

「そのネタはさつき見たから……天丼とかいらねえから……つかお前誰！？」

通話

「いやいや今の流れ！－アイアムパイロット－」

「……めでたいめでたいめでたい」

「いいから名を名乗れ！……！」

「サー！！！本日赴任のマガリ・M・ダグラス中尉であります！！」

以上、首ねっこ掘んでからのソリッドとの会話

「すまん何だつて？」

「マガリちゃんとでーす！」

脳天に手刀を下ろす

「その後ろだ」

「中尉？」

中尉、少尉と大尉の間、空軍では主に分隊の隊長等を務める。アト

リア隊を例にすると、隊長であるソリッドが中尉、ウイングマンのアルズが少尉。アリソンは正規軍ではないため明確な階級が不明だが、本人曰くそこまで高い地位は貰っていないという

まあつまりはそういう訳で

「おかしい……」の軍何かがおかしい……」

「落ち着いてください隊長、俺らもおかしい部類です」

あらためてその女を見る。アリソンほど小ねくないもののまだ十分に小さい、年齢はいつても二十あたりで、観察中せわしなく手をぱたぱたさせていた

一言で表すならば『動』だ、テンション高むる

「君も中尉だよね

「あ……あ……」

「若いのにすいこねー

「だからうきから騒いでる理由はだな……」

「あー……何そのかわいいの……あたしむかむごぶれ……」

「…………」

もうなんだつていいや

「……乗りたくない」

見事に復活したストライカーへ物資を積み込み直している最中、ユリアナがそうのたまたま

「酔い止め飲むか?」

「その程度のものであの地獄に耐えられるとでも？」

普通は耐えられると思うのだが、どうやら車酔いしやすい体质らしい。ここから目的地までは幹線道路が伸びているので上下には揺れないとしても、きっとエレナのことだ、前後左右に揺らしてくるだろう。コリアナもあれやこれやで安全運転してもらおうと働きかけていたようだが、ことごとく失敗、スピード狂は不治の病だと実証するに留まっている

「ねえほんと急ブレーキだけでもどうとかならない？」

「意識すればいけますけど、なにぶん慣れというのが」

直す努力はしているようだ

と、それを聞いていたレオンが何か思い出したように顔を上げ

「その事だが、知り合いに頼んでエコモードを搭載して貰った」

「え？」

「簡単に言つとアクセル制限だよな」

近年の低燃費乗用車にはよく搭載されている。エンジンが電子制御されている事が前提条件となるが、強制的に加速を緩やかに調節し燃費を向上させる。燃料代を浮かせたい人には喜ばれる機能で、逆にレーサーや暴走族にとっては冒涜以外の何物でもない。実際、聞いて2秒でエレナが泣きそうになっていた

「だ、大丈夫だ切り換え効くから」

レオンが焦つてなだめ出す

反比例するようにコリアナは元気を取り戻し、そそくさとストライカーに乗り込んでM2用の弾帯をジャラジャラさせ始めた。もはや憂いの事は無いと、そんな顔だ

「でもアレが管理できるのって加速だけじゃないですか？」

「え？」

「アクセル踏んだ時は緩やかになりますけど、ブレーキとハンドリングはどうしようも……」

「ストップ、ストップ、それは出発するまで黙つてよつ、話ややこしくなる」

これ以上余計な事を言つ前にネアを黙らせ、乗車を促す。今日はウージー1丁に付け加えセミオートショットガンを腰からぶら下げていた。戦闘距離が短くなると見越してのチョイスだろうか、予備弾薬の所持数を半分こしている上に走る時邪魔だと思うのだが、そもそもウージーサイズのサブマシンガンを2丁持ちしている時点で常識は通用しない、黙つておこう

「……それで、私達の割り当てはビツになつてゐんでしょうへ」

「俺に聞かれても」

「ですよね

走りながら説明されるつもりで来たのだが、情報を持っているレオンは子供をなだめるのに必死だ。出発まで待つた方がいいだろう

車内は既に弾薬と雑貨で3分の1が占領しており、うち一つのアーモ缶からは1・2・7mm弾がじゅらりと伸び、コリアナの手によつてM2重機関銃に繋げられつつある。今日は100発入り8個持ってきたようで、その代償としてMK19はEMPTY状態、出番はなさそうだ

後は大量の5・56mmと、少量の7・62mm、9mm、ネアの私物。特にバレットM82は収納ケースが無いらしく、2つに分解されたまま立てかけてかなり目立つ

「それじゃ、今日の割り当て決めようか

セット完了したコリアナが降りてきた

「まずはおっさんに使わせるとして」

上のM2を指差す。いちいち狙撃ポイントを探していくと進撃速度に追いつけない上、その度に観測手を取られる性質上、攻撃には狙撃は向かないようだ

しかしM2だつてうまく使えるれば狙撃にも使えるのである

「ストライカーの護衛に2人。まずマリーは決定ね

さっきから助手席で沈黙を保っているマリアンへ視線を送る。いつも無口だが、今日はいつにも増して無口だった。朝に慌てて出でていってからまだ一言も喋っていない

それに関しては朝食時に少々尋問を受けたが、深夜の解散までに寝落ちしていた事もあって吐く事もなく、何が起きたかは神のみぞ知る「ショットガンで防衛つてのもどうかと思うんで、私は動き回る方を」

座席に腰を降ろしつつネアが言う

「じゃあバランス考えて明くんも攻撃で」

「バランス？」

「昨日の1ーショット1キルつぱりなら多少足引っ張つても大丈夫でしょう」

「ああうん、そういう意味な…」

自分を戦力として数えるにはかなり厳しいものがあるのはわかっているが、なるほど、そういう補完方法で来るかと。普通は楽な配置にして対応すると思うが、 $(10+0) \div 2 = 5$ 的なやり方だ

「恐慌状態にでもならなければ問題ねーですって

それはもしかして励ましているのか？

「よし行くぞー」

レオンが乗り込んできてハッチを閉め、運転席にエレナが入る。ほどなくしてエンジン始動、ゆっくり、とはいかないものの常識の範囲内な速度で動き出す

「アクセルが！！アクセルがああ！！」

「大丈夫だ！！最高速制限はかけてない！！」

案の定といふか騒ぎ出した

「あー快適快適」

ユリアナが満足そうに「くへりこでこ」といふ

が、10秒待たずに急ブレーキ、急旋回ときて、Hモードの限界が浮き彫りとなり

「快…適…じゃ…ない…？」

残念ながら今回も地獄になりそうだ

アルメリアの支援があるとしてもこの速度は速すぎる

そう言われて見ればクランフォールとの国境からはだいぶ離れた気がする。明が参戦してからの数日でも物凄い速度で進撃しているし、それに開戦72時間での奇襲戦を付け加えると、エクストロキアの30%は既に占領したと言える。同盟国が4ついるといつても、うち3国は敵陣の国で手一杯だし、残りも地理的都合により陸軍がうまく展開できていない。実質、クランフォールのみでの戦果だ

ストライカーに揺られつつ、ネアが呟いた

「結構遠くまで来ましたねえ」

「なあ、なんでこんな急いでるんだ？」

「すまん今ちよつと忙しいからコリに聞いてくれ」

送受信機を接続したノートパソコンと睨めっこしてこるレオンが言う。青い顔でうーうー唸っている人に聞けと言つのか、まあ、きっといつも不遇な扱い受けてる分の仕返しだろ？

「……大丈夫か？ 横になつた方が

「あー……いや……加速が無いぶんまだマシ……」

壁に後頭部を押し付けていたユリアナがゆらりと顔を通常位置に戻し、大きく深呼吸。直後に襲ってきた減速Gに悲鳴を上げ、勢い任せでネアの肩を枕にした

前回と比べると症状は軽く、吐くまでは至っていない。しかし念のためエチケット袋は持たせている、握り潰されてグシャグシャだが

「……約1世紀前えー…北洋…大陸戦争うー…」

「うふ

「世界最高の経済基盤を持つクロスフロントに対しいー…開戦当初の奇襲で圧倒的有利に立つたヴァラキアですが、…結局負けたじゃん…」

「そうだな

「状況…まつたく一緒…」

「……おお

現在の敵、エクストロキアは国土面積第1位、土地が広いという事はそれだけいろんな事ができるという事であり、実際、GDPではクロスフロントに次いで世界2位となっている。対するクランフォールはここ数年の「ゴタゴタ」が原因で経済基盤など崩壊しているも当然であり、全体規模においてエクストロキアの10%にも満たない、持久力の差は歴然としていた

「ヴァラキアは20年とちょっと耐えたけど…クランの場合はもつて半年だから…最低でも年明けまでには決着付けないとまず負ける訳…」

「それ、可能なのか？」

「可能だと思…う…？」

普通、無理だ

悪事を働いた国を他の国がフルボッコにするというシチュエーションなら、過去最速で2ヶ月、正規軍が瓦解し散発的ゲリラまで追い込んだ前例がある。しかしそれは戦力差が歴然としていたからであり、例えるならアントニオ猪木がガキ大将を張り倒した状況だ。今回はその逆なので、勝つにはやり始めの奇襲しかない

「でもね、結局、こうなるしかなかつたのよ…あのクソ腹黒国家か

アルメリア

ら支援され始めた時点で操り人形は確定だつたし…よしんば拒否しても財政破綻するだけだし……」

「…で、しょうがないから早期終結を田端してると?」

「そ……正規軍殲滅はどう考へても無理だけど…一切の反撃を許さず圧倒できれば、向こうがやる気を無くすかもしれない…クラトンとしては今の恐慌状態から抜け出せねばそれでいいんだから……」

「煽りまくった国民感情は?」

「そんなもんマスクが頑張ればどうでもなるわよウ……」

症状悪化したらじへ、頭を下にずりじてネアに膝枕させた、限界らしい

「……まあ補足しますと、砂漠だらけのヴァラキアが27年も戦争できたのは理由があつたんですね」

苦笑しつつ、ネアが話を引き継いだ。こうこう話はやたらと詳しそうだが、どうなんだろ?

「こいつかありますけど、最たるはクロス政府が能天氣だったんですよ。真横にある国を仮想敵国にもしないで自国内での使用前提な兵器ばかり作つてたから、開戦後の反撃が呆れるほど遅れた」

砂漠の粉塵に戦車や戦闘機が耐えられなかつたんですね、と付け加えた。今まで続く引きこもり外交っぷりだ、攻める気など毛頭無

かつたのだろう

しかし、戦争とは攻めなければ終わらないのである

「今回それと似たようなアドバンテージはアルメリアからの高性能兵器です、どうなるにしろ永続的なものではない。戦況が逆転すれば早々に手を切りたがるでしょう」

「……つまり？」

「一センチの後退も許されないんです、私達は

夢見事だろう、それは

「やらないと全滅

「マジか」

「いつの時代だって他人には無理強いするもんです、どうなつたって構わないんですから」

確かにそういう風潮がある

外交＝潰し合いなのだ

「でもまあ、といつあえずはエチケット袋作り直すとこから始めまし
よつか

「確か」

「で、敵は？」

目的地コトボまでの航路を設定してオートパイロットにし、アトラスに向け話しかける。一緒に飛んでいるのは僚機のF-22Aと、配属されたばかりのF-15Eが2機、視界内には存在しないがAH-64Dもこちらに向かっている。敵部隊が半壊済であるためと同時進行の別作戦に戦闘機が持つて行かれているため、大規模な空戦は発生しないだろうと判断、F-15Eにも爆装を施し、実質的

対空戦闘力はアトリア隊のみとなつていた

『今のところレーダーに反応は無い、恐らく逆転は諦めているから、地上で足止め程度の戦闘があるだけだろ?』

数日前まではかなりの戦力が集まる大都市だった。民間人も相当数が残っていて、下手に攻撃すれば様々な意味でまずい事になるはずだったが、悩んでいる暇は無いとばかりに撃ち込んだ巡航ミサイルが敵主力に大打撃を与えて、ワイルドウイーゼルでレーダー網を破壊、爆撃を繰り返し行つたのち今に至る

空軍主力が出て来ていないのが気掛かりではあるが、陸軍は既に壊滅している、今から反撃した所でどうこうできるものではない

『ここのまま暇で終わるのが一番いいがな』

「戦果無しか勘弁だぞ」

『精力的なのは感心するが落とされるなよ』

F-15Eが戦闘速度まで加速していく

『始めるぞ、アトリア隊は陸戦部隊の直掩に当たれ』

「アトリア1了解」

『アトリア2、了解』

進路を修正、エンジンに最大出力を吐き出せせる。F-22Aが援

護位置についたまま追隨してきた

とうあえず田標近くまで行つて、担当時間終つまでぶらつていろ
うと思つ

「飛行戦艦は？」

『あれ以来は動いていない、あそこまで巨大では飛んだだけで田立
つからな。首都周辺で沈黙しているというのが作戦会議室の予想だ』

首都周辺、という事は今から出撃しても2時間はかかる、遭遇する
可能性はなさそうだ

ここを押さえてしまえば国道直通で次の敵軍航空基地まで陸路で行
けるようになり、周辺一帯の制空権が不動のものとなる。そしてそ
の向こうにあるのはレールガンだ

ここを死守するか捨て石にするかで悩んでいたようだが、捨て石で
決定したらしい

「ならマジで暇か」

『一応、警戒は怠るなよ』

いや、おまえ警戒は管制機の仕事だ

「はい、行きますよ」

ストライカーを見送つてから3分間、隠れていた草むらから這い出る

少々突つ込んだ場所で降ろしてもらつたため、前線はまだ背後にあつた。広めの公園に潜伏して様子を見ていたがどうにも敵の数が少なく、どこを奇襲したらいいのかまったくわからない

「もう指揮所いつちやいまじょひ、防衛隊もそこまでいなはづ」

腰のショットガン、ベネリM4を掴み上げて代わりにウージーをぶ

ら下げるネア。そして周囲を見渡して、1kmほど先にあるビル群を指差す、あのへんにあると踏んだよつだ

「いけんの？」

「1人なら潜入するんですが、2人なら強行突破でも問題無いでしょ」

普通は問題がある

早足に歩き出したネアの後を追いつつ後方を確認、銃声は絶え間無く聞こえているが派手な爆発音はあまり聞こえず。対物戦闘は発生していないらしい

「敵に戦車は無いのか」

「どれだけ爆弾落としたかは知りませんが、対空装備まで根こそぎ持つていかれりや そうもなりますよ」

第一に静かなのだ、この戦場

頑張った痕跡は見受けられるが、民間の建造物に爆撃で開いた穴があり、それが誤差で済まされない数に達している、相当量の爆薬を落とされた事は間違いない

恐らく民間人は半強制的に避難させられただろう、誰だつて誤爆で殺されたくない。東へ逃げたか、避難所で寄り固まっているか

上空にF-15が現れて爆音を撒き散らし始めた

「欲しい情報もなさそつなんでぢやぢやつと終わらせましょ」

情報

「そういえば飛行戦艦関連のものを大量に持っていたな、この子

「情報集めてどうすんの？」

「過去に前例のない兵器ですから、ビックりに欠陥があるはずなんです。もしかしたらステインガー1発で落とす事も可能かもしれません」

「なぜ一人で落とそうと？」

「え」

「弱点見つかったとしても普通は軍隊に頼むとかさ」

「え……いや……その発想は無かったといふか……頼れる人いなくなつてからかれこれうんにやひ……」

「どうも他人に頼るという思考パターンが存在しないようだ、金さえあれば生きていけるこの世の中で素晴らしい生き方をしていらっしゃる

やる。引きもつ一ートは全員見習え

「…まあ…あくまで私事なんで、他人に迷惑かけるのはどうかと思つてですね。目的一致してなかつたらこの部隊にも参加しませんし」

「ふうん」

「あ、多人数行動が嫌つて訳ではねーですよ?」

話しつつも移動を続け、ビル群の近くまで到達。臨時の指揮所を置くなら倒壊しにくい1~2階立ての建物だと思つが、生活空間が縦に伸びていく昨今、十分な広さの平屋など確保できないのかもしない

「あそここの野球場とかどう?」

「奇遇ですね、おんじ所見てました」

物影に隠れつつ道路の先を見る

距離約100m、プロ野球での使用に耐えそうな規模の球場である。三階建て施設に1個師団整列できそうな広場付き、司令部としてはなかなかのものだと思う

ついでに言つと観客席に見張りが数人立つており、指揮所でなくとも何かはありそうだ

「ただこのまま近付くのは避けたいので……」

ネアが周囲を見回し始めた。すぐに何かを見つけ、球場側から見えないよう隠れながら移動

十数秒で地下駐車場への入口と、見張りの兵士2人を見つけた

「あそこから行けますね」

「そりゃわかるが、あの見張りはビリす……」

長い橙髪が翻る

会話できるような距離で使用されるイメージの強いショットガンだが有効射程は50mもあり、実際その距離で発砲すると極めて高範囲に散弾が飛び散る事になる。威力は下がるが、まとめて仕留めるには最適な訳で

ベネリM4が7回ほど火を噴いた

鉄球と鮮血が飛び散る

「行きますよ」

「あ…あ…」

忘れていた

ここはこうこう所だと

ストライカー上部に設置されたM2重機関銃が敵部隊を蹴散らしていく

蹴散らすといつてもばたばたと撃破していつている訳ではなく、攻撃中断させて退却をさせるに留まっている。数は少ないが練度は高かつた

「どーよ」

「完全なる時間稼ぎだなこりゃ」

現在、先行する74式戦車のスピードに合わせており、74式は護衛の歩兵に合わせて走行しているため、速度は6~10km/h、今のところ酔いとは無縁だった

上ではレオンがM2を撃ち、後ろでマリアンが後方警戒している中、（書類上は）隊長であるコリアナはSCAR抱えて車内で休憩中。敵が来たと思ったらM2に追い払われて帰っていくのだ、護衛も足りてないし、わざわざ出でている意味もない

が、ここまで進んでもいまいち戦果が上がらないとくると

「回り込まれてる可能性は?」

「ゼロとは言えないな」

座席から立ち上がった

「ちよつと見回つてくるわ、銀の黄昏も出せたら出せとこで」

安全装置を外しながら飛び降り、マリアンについて来いとジエスチヤーを送る。このまま行けば30分後には都心部に入るから、少し遠回りしてそっちに向かう。記憶したルートからは外れるが、標識に頼ればなんとかなるだろう

「物影とかよく見て、隠れてるかもしれないし」

装備の重いマリアンに合わせながらの駆け足でストライカーから離れていく。遮蔽物から遮蔽物へ移動しつつ、何か隠れていなか確認住民がいなくなつて閑散としているものの、日が経つていなために生活感だけが残つていた。物販店のいくつかは襲撃された後があり、集団パニックが起きた事は間違いない

典型的な戦争被害だ、これは戦後問題になるだろ?。勝てば揉み消されるだろ?が

隣の道路に出でてしまひ直進、何も無いためもうひとつ隣に行くがやはり異常は見つからず。単に撤退準備に入っているだけなのかそれとも派手に大回りしているのか

「どう思つ?」

「見つけ次第撃破すればいいんだが!」

「ああまあ…あんたに聞いたらそう帰つてくるわよね……」

しつかり上まで見て何もない事を確認してからもつ一回隣へ、と思つたが、見方戦車のものとおぼしきキャタピラ音が聞こえてきた、素直に直進する事にする

そこでふとスナイパーがいか心配になり、付近で一番高いマンションに足を向ける。屋上に隠れられたら見つけるのは困難だが、更に上から索敵できれば幾分かは楽になる

玄関から入つて階段の一段目に足をかけ

「おー」

マリアンに呼び止められた

「爆薬が仕込んである」

「どうだ?」

「柱」

指差された先にマンション全体の重量を支えているであろう巨大会社の柱、それが穴を開けられ、軍用の高性能爆薬が埋め込まれていた。爆破されれば折れるのは確実で、よく見れば他にも数カ所同じものが設置済み

「これ崩してどうすんのよ」

とりあえず危険なのでマンションから出、もつ一度誰もいない事を確認、こんな場所のマンションを倒していくか

「トリップ」

「随分遠回りな攻撃手段ね

「…………」

「…………」

弾幕担当に意見を求めるのが間違ったようである

変なもん見つけたし合流してしまおうと思い直進を継続。そのまま

いけば駅前で合流できるはずだ

と

「あ……」

上空に戦闘ヘリ「プター」が現れた

かなりの低空を維持しままコリアナの真上を通過し、強い風を撒き散らして東へ。種類はアルメリアのAH-64Dで、機体に描かれたクラシックフォールのマークが友軍であることを表していた。

「こまさらそんなもん出してきてもめぼしい標的無いでしょ」

敵に車両はほとんど残っていない、あつたら既に戦線投入している。そんな所にへりなんか出した所で効果は上がらない

「対人口ケットを積んでいた、本陣を攻撃するつもりだろ?」

「……大丈夫かしらあの2人」

「ロケットの命中率は信用ならん」

駄目そうだ

「じゃあ今頃向こうはて…………」

左横5メートルで敵歩兵2人が話し合っている。内容を考えるに何かを待つているようだが侵入に気付いている様子は無く、出入口からここまで歩哨が全滅している事も知らないらしい、このまま動かないようなら展開はさつきと同じ

「2分切った」

「あと何分だ?」

血の花がひとつアスファルトに咲く

一切の狂い無く頭部に直撃だ、2人のうち片方が倒れ、間髪入れず
に飛び出して残った片方へデザートイーグルを向ける

マグナム弾が飛び出して、歩哨の胸に直撃

「駐車場は掃除し終わりましたね」

50メートル離れた場所からネアが出て来た。あの距離から拳銃で
ヘッドショットだ、どういう目をしてるのか知りたい

「ここから進めるところまで進んで、会敵した時点で強攻突破に切り
替えますよ」

「本当に2人で大丈夫か?」

車の間から出て競技場への階段前に集まる

人がいないといつても1個小隊はいるだろう、約20人、蛇の人な
ら楽勝だろうが

「見た感じなら大丈夫でしょう、素人臭さもねーですし」

「1週間たつてないけどな」

「とりあえず上登つて……なんすと?」

1段目に足をかけた直後、ニアが勢いよく振り返った

もたついている場合ではない、移動継続を促す

「……もしかして懲罰部隊だったとか…」

「犯罪者集団ではないな」

「じゃあ幼少期から戦闘訓練を…」

「その可能性についてはむしろ君の方が疑わしい」

階段を登つて地上1階に到達、人影は無かつたができるだけ小声に切り替える。比較的新しい施設らしく綺麗なリノリウムが続いていた

観客席には数人立っているのがわかつているためそちらには近付かず、施設中央を目指して前進

「いいですか、兵士というものは訓練修了したからつてすぐに活躍できるものじゃないんです、殺人行動に慣れるまで1ヶ月程度かかります」

「まあ嫌は嫌だけどな、今でも」

「あなたの即応性は普通じゃありえない」

「あー、そういう子供が怪我したの見ても冷静すぎるとか言われてたな」

廊下は一通り確認し、ウージーに持ち替えたネアが部屋のチェックを始める。明のSG552は室内でも十分取り回せる作りをしてい

るが、どうせ補助だ、本格的に始まるまで「デザートイーグルで」いつ

「……ご両親は18年前の航空プラットフォーム1号機で亡くなつたんですよね」

「ああ、記憶は無いけど」

「あの惨状を直で見たのなら、物心つく前の出来事でも脳が勝手にアレと比較しちゃってるのかもしれません、あれ以上の死体なんてそもそも作れませんから」

ただその場合…と言いながら事務室への扉に手をかけ、一瞬停止、明に向けて指を2本立て、次いで扉を指差す

少なくとも中に2人

デザートイーグルを構え直し、ネアの肩を2回叩く。打ち合わせ通り突入を開始した

「なん…！」

ドアをぶち空けてから1秒足らずで正面にいた2人がダウン、脇を通つて明も入室し、左側の通信兵へ発砲、デスクの影へ消えた

「クリア！」

この間2秒

まず死体を見て高級士官ではない事を確認し、それから通信機、電話中ではなかつたようで目立つた点は無し

「次行きますよ、たぶん今まで気が付いたでしょ」

急ぎ部屋から出て2階への階段を探す。自分ら以外の足音も発生しており、敵が向かってきているのは間違いない。ただ数は少なく、本当に本拠点かと疑いたくなる閑散具合だった

ネアを先頭に2階へと駆け上がり、遊び場で反転する間にショットガンの発砲音2回、入れ代わりで敵兵が転がり落ちていく

「廊下の向こう側に敵！！」

どうやら本拠地は放送室にあるようだ、廊下にあつた長椅子が押し倒され畳下体育マットで補強中。それを守るべく敵兵2人がライフルをこぢらへ

一直線の廊下でこの状況はかなりまずいものがあるが、そこからのネアは超人的だった

構えていたショットガンを右手一本で持ち替え腰のMk23大型拳銃を左手で抜き取る。ほとんど照準をつけない腰溜めで連射しつつ真横にあつたドアへ向けてショットガンを発砲、蹴倒して中に入つていった

「フラグ！！」

ライフル弾と共に指示が送られてくる。フラグとはフラグメントグレネードの略で、更に和訳すると破片手榴弾となる、つまり投げろという事。階段に伏せて隠れている現状、投擲を妨げるものは何一つ無い

「行くぞー！」

レバーを握ったまま安全ピンを引き抜き振りかぶる。手を離した直後に信管が作動するので、投げてから爆発までに数秒

バリケードの内側にリンゴ玉が吸い込まれる

この場合、投げ返されるのは定番だ、しかしそれはネアが許さなかつた

1人が拾つて、振りかぶった直後、ウージーから発射された9mmバラが殺到、鮮血と一緒に床へと戻っていく

爆発、間髪入れずに走り出すネア

「クリア！」

明が辿り着く頃には残っていた指揮官も血に沈んでいた

『アルファからポラ里斯へ、敵部隊のポイント到達を確認した、予定通り実行する』

こちらの通信機は稼動中、受信状態で声を送っている

『ポラ里斯、どうした？』

返信するべき人間は既にいない、案の定不審がり出した

「……」

スイッチを送信に切り替え、ネアの指がマイクを叩く。モールス信号のようだ

『？：りょ、了解』

通信切断

「なんて？」

「勝手にせえって」

「大丈夫なのか？」

「アルファってのはたぶん小隊で規模20人ですから、突撃開始するとかそういう意味でしょう。こつちは先行する全部隊に何かしら車両が付いてますから、たかが小隊に負けはしませんて。ここに殺到される方が困ります……」

ドッゴオオオオオンー！

「…………工作部隊とは思わなかつたなあー……」

都市全域を爆発音が包み込む

ビルが一斉に崩壊を始めた

「なんだなんだなんだ！？」

駅に到着すると同時に、正面の大通りが崩れてきた高層ビルによって通行不能となり、さつき確認したマンションも倒壊、道を塞いでいる。目視で確認できる限りあと3箇所、同じように爆破されたようだ

ストライカーとF4式戦車は既に見えている、何が起きたのか情報が来るはずなので、走つて車両部隊と合流

「どうした！？」

「まずいぞこれはまずい！！本隊と分断された！！」

通信機に繋いだヘッドホンから派手に音漏れを起こしている、部隊全体がパニックに陥っているらしい。それを聴くレオンは聖徳大使ばかりの判別能力で地図に×マークを印していく

片側2車線以上、隣にビルのある道は全滅、郊外を通るバイパスも橋の部分で×を付けられた。すべての道路を塞がれた訳ではなく地図上で見れば何の事はないが、こちとら普通の乗用車とは訳が違うのだ、細道なんか通つていては時間がかかりすぎる

「北口に回つてこの道使えばなんとか…少なくともダガー5とは合

流できる

「部隊おつきくしたら余計ドツボでしょうがー！」のまま増援無しで走り回るしか……」

「考えてる暇は無いぞ……東から2個分隊接近……」

外でマリアンが叫んで、迎撃するべくコリアナもストライカーから下車

「南東の飲食店に対戦車兵！－！ RPGを構えてる！－！」

どうやら隠れていたようだ、割れた窓から敵兵が顔を出し、ロケットランチャーをこちらに向けた。種類は超有名なRPG-7ではなく現役のRPG-22、最近流行りの使い捨てロケットランチャーで、重量3kg、1人で何本も持ち運べる上いちいち装填する必要がない、そして撃つたら捨ててしまうため通常戦闘にも参加できる。軽量故に戦車を破壊できるほどの威力はないが、装甲車程度なら難無く爆破できる

案の定、照準はストライカー

「急速回避！－！」

エレナが宣言したのをレオンが復唱し周囲に伝達、ただちにストライカーから飛びのく

ギヤリギヤリギヤリ！－！と音を立てて8輪車がドリフトをかました。尻を掠つたがなんとか回避には成功

「敵前面に制圧射撃！！！」

マリアンのMG4とレオンのM2が火を噴き出す、特に不満もなかつたらしい、74式も従つた

ユリアナは2発田を撃たれる前に対戦車兵を片付ける事にする、店内に引き籠ろうが関係ない、田には田をだ

M72ロケットランチャーのチューブを引き延ばす

「吹き飛べーッ！！」

爆風が後方に、爆炎が前方に飛び出した

数秒と経たず1.8kgの66mm HEAT弾が飲食店に突き刺さり、炎と衝撃波を撒き散らす。確実に仕留めただろう、チューブを捨てSCARに持ち替える

「グレネードランチャーでも付けたらどうだーー？」

「山なり弾道が気に食わないーー！」

敵に接近させないようひたすら撃ちまくり、その間に74式を突撃させる。2～3人倒して、後は退却していく

「おいどりするーー！田退くかーー？」

銀の黄昏が聞いてくる。後続がないのだ、下手に戦闘継続しては危険である

が、こっちには退却できない理由がひとつ

「逃げるなら勝手にやつて……潜入させたのが戻つてないの……」

手放した地点は通り過ぎたが、打ち合わせは場所も時間もまだ少し遠い、指示を送ればすぐ戻つてくるだろうが、こちらも前進しなければ合流は難しい

「わかった！…もう少し…ってみよつ…」

最近のPMCは情熱的だった

「航空支援は！？」

「ヘリ2機が駆けずり回つてゐるが追加にはひと時間かかる……代わりといつちやなんだが30秒後にMLRS…！」

敵陣にロケット弾をぶちまける、とのこと

「じゃあ着弾確認後に前進再開！…30秒…！」

装備の関係で足の遅いマリアンはストライカーに収容、その間にGPSシステムで潜入組の位置を探し出し、移動ルートを組み立てる。幸か不幸かここから一直線で、バレやすいが時間はそうかからない

次いでトランシーバーで連絡をはかる

『「めんなさこめんなさい止められたの」「めんなさーーー！」』

『』

「えー..」

『こいつももうなんですよ最後の詰めなんですよ油断して包囲されるわ生れ埋め詰めりつわー..』

「ヒ、とにかく今駅にここから直線で今流してー..10秒ー..」

『じきいひいひぎよおおおおおおおー..ー..ー..』

「いわゆるこので切った

「来るぞー..隠れろー..」

衝撃波を喰らひわないよいつ車体の影へ

轟音

煙へ向かって走り出した

「押しまくれええー..」

『問題が発生した』

「見りやわかる」

帯状に建物が崩壊していく様は壯觀だった。現在は櫻の外側から内側に向けて自走砲とMLRSがあり、たけの弾をぶちまけて、孤立した部隊を援護しようともがいている

こいつの時便りになるのはやはり航空爆撃だが、ストライクイーグルは既に爆弾落とし終わって帰宅していた、戦域上空にいるのは対地装備を持たない戦闘機2機とロケット弾装備のヘリ2機のみなので、どう頑張つたって全部隊を支援できるはずがない

「で、どうすんの?」

燃料はまだある、戦闘用を残しても1時間はここに留まるが、F-15CとF-22Aに対地能力は無い、無理すればバルカンで攻撃可能ではあるが

『孤立した部隊をそれぞれ目視で確認してくれ、無線が錯綜して正しい脅威レベルを出せない』

つまり、一番危険な所を探して、ヘリを向かわせるという意味

偵察機の1機でも飛ばしておけばよかつたものを

「…アストラエアからスキュラ隊、残弾はどれだけある?」

『まだまだありますぜ軍曹ー』

「……軍曹じゃねえし…」

なんというか、気の抜けるパイロットである

「…ネメシス、上空警戒してくれ、俺は下に行く」

『騎（^ω^）位？』

「…………」

本当に氣の抜ける

「この状況……どうにかなんねえ……？」

『確かにイロモノ集団になつてきたような氣もするが、実力はあるんだ』

GPSマップを確認して最も突出している部隊を探し出す、見つけたらそこへ向かい、状況を目視する

74式戦車と、RWS非搭載のストライカー-ICVの2両編成で、目下敵1個小隊と交戦中。機関銃兵1人の制圧射撃で正面を押さえ付け、ストライカーライナー搭乗の狙撃兵がめぼしい敵を潰し、その間に74式戦車が突撃、隠れていた連中を遮蔽物ごと吹っ飛ばす。合わせて10人程度の傭兵部隊はどこかのレンジャーかという速度で敵を駆逐し、息付く間もなくアクセルを踏み倒した

「おーーーーとんでもない勢いで突撃してんのがいるぞ……やめさせろーーー！」

『指揮系統が違うから時間がかかるぞ』

さすが寄せ集め

もう一度GPSを見て他に危なつかしいのがいないのを確認、傭兵

部隊の前を飛んで偵察すると、重武装の敵兵が数十人、影に隠れて待機中

「仕方ない、ティア、行け」

『アイサー！』

スキュラ隊1番機、ティアに指示を送つて攻撃させる。ヘリとしては常軌を逸した機動性を持つAH-64Dアパッチロングボウが墜落みたいな動き方で降下、部隊の真上に陣取る

「おいおい、射手気絶してないだろうな」

『え？ 射手？ ……あー… 大丈夫、なんじゃない？』

マガリといったか、スキュラ隊隊長に話し掛ける。例のふざけた女だ、相方は相当苦労してるに違いない

無口な奴なのか、無線から聞こえてくるのはマガリの声のみ。2人乗りであるアパッチでは少しばかり有り得ない状況である、もしくはマジで気絶したか

「声聞かせろよ、わりかし心配だ」

『あー、それは無理っす』

「何故」

と

聞いた所でレーダーが敵接近を知らせてきた

『来たぞ、方位80から82、機数は2。恐らくこの前のフランカ
ーF1だ』

「便乗してきやがったか？足元見られてんな」

『距離130マイル、アムラームの発射体勢に…くそ…先に撃た
れた！！全機ブレイク！！』

操縦桿を思い切り右下に押し倒す

バレルロール気味に右急旋回して回避に入り、援護位置にいたネメ
シスは左側へ同じ事をやつた。アラートは鳴っていないが、しばらく
してからスキュラ隊がチャフぶちまけながらビルの隙間に逃げ込
んでいった

『貴重な対地攻撃力を失わせるな、アトリア隊、制空権を死守しろ』

「アトリア1了解」

『アトリア2、了解』

AIM-120アムラームを選択、アフターバーナーを使って射撃
位置まで急行する。ネメシスはといえば機首を上に向けて全力で駆
け上がっていた、なるほどいつもああやつてたのかと、レーダーに

映つてから初めて気付いた

『「ひからティア、ステインガー2発だけだけど持つてるから、ヒツ
ち来れば撃つよ』

「いいからお前はそいつの敵を一掃しろ」

『うい』

さて、前回戦つてわかつてているのはF-15Cの格闘能力ではSu-35には勝てないといつ事だ、接近されないよう立ち回らなければならない

ネメシスを前に、とも思つたが、邪魔しない方がいい氣もする、放つておけば確実に1機は落とすだらう

「……奴ら以外の反応は？」

『無い』

なら全弾撃ち切つても大丈夫か、あと1時間すれば交代役が来るし

「結局は数だ、性能がなんだつーの」

『言つて悲しくならないか?』

「……今言つたな、それは今言つたな、後でけやんと血口嫌悪するから」

「今度は何い！……！」

ものすごい風圧で後ろに押し戻される。明&ネアとの合流予測地点まで200メートルを切った所でヘリのエンジン音が降ってきて、現在、側転しながら現れたアパッチがストライカーの前方に陣取っていた。高度1メートル以下、もういつそ着陸しろと言いたくなる

車内でレオンが何か叫んでいるが何も聞こえない、少しして無線機

を投げてよこした

その間にアパッチは10メートルほど上昇し、74式を乗り越えて前進、部隊より先行する形を取る。離れた事で爆音が幾分か和らぐ
『これからスキュラ隊ティア、今からそつち援護するから部隊ナンバー教えてー』

女性の声だ

が、コリアナだって女である、驚きはしない。しかし非常識ではあると思つ

「えー…第666分隊、コールサインはダガー2。目の前のアパッチでいいの？」

『そーだよー』

30mmチョインガンを掃射し始めた

『で、何したいの？』

「迷子が2人、もう少しだけ前進できれば合流可能なんだけじ」

『オーケーわかった、とりあえず正面は押さえ付けるから、対戦車兵優先に片付けてって』

正規軍にしてはやけに聞き分けがいい、傭兵とは基本的に使い捨てであるはずなのだが、まあどこぞの米軍のノリだろう。道路上にいる敵兵をロケット弾で吹っ飛ばしていく

「狙撃用意！！」

無線機を胸に装着しつつ命令を下し、自らはM4式の前に出る。そこで制圧射撃を担当していたマリアンと合流しつつアパッチを追い掛け

「目標！…対戦車兵！…丘端から！…」

言つた途端にMG4の砲聲、掃射された飲食店の窓ガラスが弾け飛び、店内を真っ赤に染め上げた

目的地まであと100メートル、それそろ連中が見えてくれないとまずい事になる、丘端まで「ドリ押ししてきたのだ、もうすぐ弾が無くなってしまう

『ああ見えた、なんか派手なオレンジの女の子だけど間違いない？』

「それ以外ありえない！…」

やはりあの人間離れした髪色は目立つようだ、ステルスには絶対向かないがこいついう時便利である

ホロサイト付きのSCAR-Hをアパッチと同じ方向に向ける、ビル影やら何やら隠れている連中のうち RPGを持つているのを探し出し照準、トリガーを引いた

この試作型アサルトライフルが撃ち出す弾はマリアンや明、ひいては軍全体が標準装備している5.56mm弾と違い7.62mm弾を使用、その分威力が上がっているが反動も大きく、フォアグリップ

プを付けていないとフルオートで撃つのは難しい。そうするとグレネードランチャーを装備できないが、そもそも装備する気が無いので問題無い

「まずいぞ！－！」いつら集まって来てる！－！」

「1分だけでいいから押さえ付けて！－！」

指揮系統が潰れたからか、騒ぎに集まる野次馬の如く敵が集結していた、4個小隊はいるだろう、このままだと包囲される

「先に退路を確保する！－道開けてくれ！－！」

ギヤリギヤリギヤリ！－と急速反転した74式がストライカーの脇を通つて後方へ。前方ではアパッチのチエインガン乱射が大部分の敵を吹つ飛ばし、 RPGを撃とうとしているのはレオンが狙撃、それ以外はユリアナとマリアンがしらみ潰しにしていく。だが、倒しても倒しても湧いてきていた

「来た来た来た！－！」

アパッチの下をぐぐり抜けて迷子2人が登場、少なくともネアは弾切れのようだ、明を後方援護に置きながら全力疾走している

「お待たせしました！－！」

ストライカーまで辿り着くなりネアはウージーとベネリM4を車内に投げ捨て、奥からミニミニ機関銃を引っ張り出す。使用目的はマリアンのMG4とまったく同じ、外見もそっくりである。細かい特徴を挙げるならばMG4は高い連射速度を持つ火力特化型だが、ミニ

ミは部隊支援を最優先に各性能をバランス良くまとめており、M16用弾倉を使って射撃することも可能、利便性を追求した仕様となつている

「いやすげえぞあの子、一人で一小隊潰しやがった」

「いいから早く乗れ！……！」

「おうおひおひお！」

ネアの援護射撃を受けながら明をストライカーに押し込み、マリアンにも戻つてくるよう指示、撤退行動に移る

「一いちらダガ一2！…これから撤退するわ！…焼き払つて…！」

『オーケー、後ろは任せな…』

74式が砲弾をぶち込み、同時に全速力で撤退を開始。包囲を突破するべく残つた火力をすべて前方に集中する。背後では断続的にロケット特有の飛翔音が起こり、途端に追撃がぱたりと止んだ

「今本隊の一部がこっち側への侵入に成功した！…敵の指揮も破壊したみたいだし、逃げ切れればそのまま行けるぞ！…」

「それ以外には！？」

「無指揮になつた連中が全部ここに殺到してゐる…！」

言いながら PSG - 1を捨てて M2を撃ち始めるレオン。ネアとマ

リアンのマシンガン2丁に加わって低音のリズムを響かせ始めた。ユリアナは全速走行するストライカーの助手席まで移動し前方の様子を確認する

『ツ……まよいぞ……前方400メートル……戦車が出て……』

無線機からそんな声が聞こえた直後、先行する74式の砲塔が吹き飛んだ

「停まりますか！？」

「もう生きてい……！」としあえず忘れて……

スクランプと化した74式を掠めて右の脇道へ。瞬間に見えたのはエクストロキアのT-72だつた、まさかそんなものがあらうとは余裕は無い

『お困りかい？』

いや、そうだ

所詮は車両、ヘリに勝てるものなんかじゃない

「タンゴ、ヤンキー、エックスレイ、ホテル！！航空支援を要請！
！」

アパッチに座標を伝えて、エレナには幹線道路に戻るよう指示

『巻き込まれないようにな！』

脇道から飛び出した瞬間、空から降ってきた槍がT-72を串刺しにした

爆炎、轟音、車体を大きく揺らしながらも反対側へ

「……包囲突破に成功」

マリアンが上部ハッチから降りてくる

「とりあえず本隊の後ろまで行こう、もう弾が無いし、再編成する必要もある」

「はあ……そうね、補給終わる頃には片付いて欲しいけど……あ

……」

「どうした？」

「気持ち悪くなってきた……」

O P · S O N I C A r r o w 6 (前書き)

適当な所で区切つたら短くなつたで、いざやる

まず敵1番機に対しアムラームを2発撃ちかけ、難無く回避される。反撃としてやつてきたR-27ミサイルはネメシスの奇襲によつて無効化、その時点でF-22Aラプターの存在が公になり、以後、無駄に上空を警戒する敵と近付いたり離れたりの中距離戦を続けている

『突出してた部隊の撤退完了、後は後続に任せといても大丈夫だあ

ねー』

地上を這い回っているスキュラ隊から報告が入り、ほどなくしてアトラスからも通信網正常化の報。祭りは終わつたらし

となると、明確な脅威が残つてるのは我らアトリア隊のみとなつた訳だ。大トリを頂けるのはありがたいが、それでスコアが変わることでも無し

「俺が囮になるつてのはどうだ?」

『過剰なまでに警戒されてる、これじゃ効果が上がらない』

前回の奇襲はそこまで恐ろしいものだったか、得意な格闘戦を捨ててまでラプター封じにかかりついた。距離を置いた戦闘の場合、電子支援等でガチガチに固めたイーグルの方が有利になつてしまつただが

ともかくこれで奇襲は不可能、正面から戦つて倒すしかない。そうなると見かけ上1対2、戦闘機同士の空戦において致命的である

『囮なら私の方が適任』

「そりゃ?」

ずっと上空に陣取つていたラプターがフランカー2機に向かつて降下を始めた。降下角度はほぼ90度、まさに猛禽類

「おーおーおー」

眼前を灰色の物体が通り過ぎていつただけであんなに取り乱すだろうか、編隊飛行は崩れ、逃げ惑うように散開していく

これならいけるか

「でもそれ囮じゃないだろ」

『攻撃的な囮』

「…………いや囮じゃないだろ」

散り散りになつた2機の間に割つて入り、1番機の方へ機首を向けた。その間ネメシスは失つた高度を取り戻すべく上昇に移り、ついでに2番機を威嚇、イーグルから遠ざける

また逃げられても面倒だ、1機ずつ確実に

「飽和攻撃だ、交互に行くぞ」

『了解』

まずサイドワインダーを1発だけ放る、これは絶対に当たらぬ、回避行動を取らせ隙を作るための投資

敵の右後方から追尾を開始したサイドワインダーは独特の蛇行を見せながらフランカーの尻を追いかけ、しかしフレアに釣られてしまつた、あさつての方向へ飛んでいく

直後、サイドワインダーより一回り大きなアムラームが上空から飛来、回避直後の敵を突き刺しにかかる

取つた、と思ったが、途端に敵機体が縦滑りしだした。鶴お得意のコブラに高出力エンジンが組み合わさり体勢そのままに垂直上昇、その急制動と位置ずれについていけず、アムラームもあさつて方向へ

『お前ら、破産するぞ』

「構うな……次でしまいだ……」

前回は最新かつ輸入品のアムラームを8発ほど乱射したが、今思えば計理士が失神する値段だつたはずだ。今回は10発持つてきているので、2機相手に撃ち尽くしたとあつたら確実に卒倒される

後方からサイドワインダー、上空からもアムラーム。しかしそれでも諦めなかつた、失速寸前まで落ちた速度を垂直降下で取り戻し、これでもかとフレアをぶちまけてサイドワインダーを無効化、反転急上昇でアムラームを

『ち……』

回避する直前、ラプター 자체が降つてきた

獲物を急襲するよつに真上を取り、すれ違ひ様にバルカンを発砲。本当に必要最小限で、トリガーに軽く触れた程度の十数発が飛び出してフランカーのエンジンに命中、グラайдラーと化して滑空していく

『1機撃破』

「……いや、それはいいけど、今なんか舌打ち聞こえなかつたか?」

『……いやー』

「うぬせえよ」

ミサイルアラート、ネメシスに追い払われてから必死で戻ってきた
ようだが、味方の援護には一步及ばず、とにかく反撃しようと撃つ
てきたらしい。申し訳ないが、最近の戦闘機は後ろ取られたくらい
では落ちないのだ

極至近距離まで引き付けて、フレアを撒きつつちょっと機体をブレ
させるだけ。危険すぎて誰も使わないくらい難易度が高いが、慣れ
てしまえばこれ以上のものはない

「ああ、袋叩きタイムだ」

過剰なまでにラプターを警戒している事もあって、SU-35に前
回ほどの脅威は感じず、付け加え軽くフォローしてやるだけで敵を
叩き落とす僚機、負ける要素はまったく無かった

といふか、その警戒をぐぐり抜けて急襲を成功させるネメシスは本
当に人間なのか

『アムラーム発射、追撃を』

「おひー

今度は下から。ラプターと敵機の位置を把握してから5秒後の状態を予測し、捻り込みながら降下

目の前にフランカーが現れた

『お疲れ様でした』

「おーう

発砲、着弾、爆発。パラシュートがひとつ広がる

『制空権を確保、繰り返す、制空権を確保した。これより目標をステート空軍基地に変更、爆撃機を侵攻させる。燃料に余力のある部隊は前進して空域の安全を……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1329m/>

night sky's sagittarius

2011年10月5日22時16分発行